

一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ

鳥取県東伯郡琴浦町

上伊勢第1遺跡 三保第1遺跡

2005

財団法人 鳥取県教育文化財団
国土交通省 倉吉河川国道事務所



1. 上伊勢第1遺跡・三保第1遺跡 調査後風景（北東から）



2. 上伊勢第1遺跡 畠完掘状況（南から）



1. 上伊勢第1遺跡 畠1完掘状況（北東から）



2. 三保第1遺跡 弥生時代集石群検出状況（北東から）

序

近年、鳥取県では妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡をはじめとする古代の重要な遺跡の発見が相次いでおり、当時の集落の姿や暮らしの様子が具体的に語られるようになりつつあります。

先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝承することは、現在に生きる私たちの重要な責務です。

ところで、県内においては、現在、山陰自動車道の整備が着々と進められているところでありますが、当財団は、国土交通省からの委託を受け、この事業に係わる一般国道9号（東伯中山道路・名和淀江道路）の改築に先立つ埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。

そのうち、琴浦町にある上伊勢第1遺跡では古代～中世の畠跡、三保第1遺跡では弥生時代の集石遺構を確認するなど、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。発掘調査終了直前には、現地説明会を開催し多くの方々の御来場をいただいたところですが、このたび、調査結果を報告書としてまとめることができました。

この報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

財団法人 鳥取県教育文化財団
理事長 有田博充

序 文

一般国道9号は、起点の京都府京都市から山口県下関市にいたる、総延長約691kmの幹線道路であり、西日本日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として、地域住民の生活と密着し大きな役割を果たしています。

このうち、国土交通省倉吉河川国道事務所は、東伯郡湯梨浜町から米子市（鳥取－島根県境）までの76.6kmを管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

東伯中山道路は、東伯郡琴浦町から西伯郡中山町にかけての、国道9号の渋滞緩和、荒天時の交通障害の解消、また、災害時の緊急輸送の代替道路確保、などを目的として計画された高規格幹線道路（自動車専用道路）であり、鋭意事業に着手しているところです。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の3の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成16年度は、「上伊勢第1遺跡」、「三保第1遺跡」、「久蔵谷遺跡」、「化粧川遺跡」、「八幡遺跡」、「中道東山西山遺跡」、「福留遺跡」、「湯坂遺跡」、「南原千軒遺跡」の9遺跡について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘調査の委託契約を締結し、同埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われました。

本書は、上記の「上伊勢第1遺跡」、「三保第1遺跡」の調査成果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深めるため、ならびに、教育および学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることをご理解いただければ幸いです。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集にいたるまで御尽力いただいた財団法人鳥取県教育文化財団の関係者に対して、心から感謝申し上げます。

平成17年3月

国土交通省 倉吉河川国道事務所
所 長 嘉 本 昭 夫

例 言

1. 本書は、一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴い、財団法人鳥取県教育文化財団が国土交通省倉吉河川国道事務所の委託を受け、同埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した上伊勢第1遺跡ならびに三保第1遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書に記載した遺跡の所在地・調査面積は以下のとおりである。なお、東伯町は赤碕町と平成16年9月1日に合併し、琴浦町となっている。

上伊勢第1遺跡	所在地：鳥取県東伯郡琴浦町大字上伊勢字東松山377ほか 調査面積：7,253㎡
三保第1遺跡	所在地：鳥取県東伯郡琴浦町大字三保字一本木293-1ほか 調査面積：1,071.5㎡
3. 本書で使用した標高値は海拔高であり、2級基準点H10-2-5、3級基準点H10-3-8を基点としたものである。また、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第V系のものであり、方位は公共座標北を示している。
4. 本書で使用した地図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「赤碕」「伯耆浦安」、東伯町地形図1/5,000を複製・加筆したものである。
5. 出土遺物や土壌の分析を下記の諸氏に依頼し、有益な御教示をいただいた。また、そのうちのいくつかについては玉稿を賜った。記して感謝の意を表す。
 - ・石材鑑定 赤木三郎（鳥取大学）
 - ・炭化材の樹種同定 古川郁夫、船橋 晃（鳥取大学）
 - ・胎土分析 白石 純（岡山理科大学自然科学研究所）
 - ・軟X線分析 高橋 学（立命館大学）
 - ・土壌分析 宮路淳子（奈良文化財研究所）
 - ・花粉分析 金原正明（奈良教育大学）、金原正子、岡山邦子（古環境研究所）
6. 調査前・調査後空中写真撮影、炭化材の¹⁴C年代測定、粒度・円磨度分析、花粉分析・プラントオパール分析、打製石器の実測・浄写を業者に委託した。
7. 本書に使用した遺物の実測や実測図の浄写、遺構図の浄写などは、委託したものを除き、文化財主事・調査員の指導のもと整理作業員が行った。
8. 本書に使用した遺構・遺物写真は、委託したものを除き、文化財主事・調査員が撮影した。
9. 本書の作成および編集は玉木秀幸・淺田康行・前島ちかが行った。また、執筆は牧本哲雄・玉木・淺田・前島が分担して行い、文責を文末に記した。
10. 本書に関連する出土遺物および図面・写真等は、鳥取埋蔵文化財センター（鳥取市国府町宮下1260）に保管している。
11. 発掘調査中に、高橋 学氏、宮路淳子氏、深瀬亜紀氏から晶について現地指導を仰いだ。記してお礼申し上げる。

凡 例

1. 出土遺物に用いた遺跡の略号は以下のとおりである。

上伊勢第1遺跡：上イセ1

三保第1遺跡：ミホ1

2. 本書の遺構全体図中などにおいて、遺構名を次のとおり省略して表記している。

竪穴住居：住 掘立柱建物：建 土坑：土 方形土坑：方 集石：集

また、本書に掲載した遺物は、土器・土製品・石器・金属製品に分類し、遺跡ごとにそれぞれを連番とし、土製品・石器・金属製品・玉類については、番号の前に次のとおり記号を冠している。

土製品：C 石器：S 金属製品：M 玉類：J

3. 本書に掲載した遺構・遺物の縮尺は明記しているが、おもなものについては次のとおり統一している。

遺構 竪穴住居：1/40・1/80 掘立柱建物：1/80 土坑：1/40

集石：1/40 墓：1/40

遺物 土器・土製品：1/4 石器：1/1・1/4・1/5・1/10

金属製品：1/1・1/4 玉類：1/1

4. 本書に掲載した遺物実測図のうち、縄文土器・弥生土器・土師器・陶磁器の断面を白抜き、須恵器の断面を黒塗り、土製品・石器・金属製品などの断面を斜線で表現している。

5. 遺物観察表の法量記載における数値は最大値を表している。なお、口径の推定復元値には数値の前に*を付している。

6. 本書で掲載した遺構図中の地山や貼り床範囲、被熱範囲、土器に塗布された赤彩を下記のとおりに表現している。



7. 図中における出土遺物の表記は、土器：●、石器：■、金属製品：▲、ガラス製品：★である。

8. 本書で使用した遺構名は調査時のものと異なり、その対照表は11、96頁に示している。

9. 本書に用いた遺構・遺物の時代区分については、一般的な政治史区分に準拠しているが、それを補うために文化史区分・世紀を併用している。古墳時代は7世紀前半まで、古代は7世紀後半から12世紀中頃までとし、中世は12世紀後半から16世紀中頃を指し、近世は16世紀後半以降として捉えている。弥生時代から中世の土器類の編年・年代観については、以下の文献を参考とした。

巽淳一郎 1983「古代窯業生産の展開—西日本を中心として—」『文化財論叢』

清水真一 1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年—山陽・山陰編』木耳社

八峠 興 1998「山陰における中世土器の変遷について」『中世土器の基礎研究Ⅻ』日本中世土器研究会

牧本哲雄 1999「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅶ・Ⅷ 第6遺跡』鳥取県教育文化財団

小口英一郎 2003「八橋第8・9遺跡における6～7世紀の土器編年」『八橋第8・9遺跡』鳥取県教育文化財団

目 次

巻頭カラー
序
序文
例言
凡例
目次

第1章 調査の経緯 (牧本哲雄)	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
1. 上伊勢第1遺跡	2
2. 三保第1遺跡	3
第3節 調査の体制	4
第2章 地理的・歴史的環境 (玉木秀幸)	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第3章 上伊勢第1遺跡	9
第1節 調査の概要..... (玉木)	9
1. 遺跡の概要	9
2. 基本層序	12
第2節 縄文時代の遺構・遺物..... (玉木)	15
1. 概要	15
2. たわみ	17
3. 遺構に伴わない遺物	17
第3節 弥生時代の遺構・遺物..... (玉木、浅田康行、前島ちか)	18
1. 概要	18
2. 竪穴住居	20
3. 掘立柱建物	24
4. たわみ	25
5. 遺構に伴わない遺物	26
第4節 古墳時代の遺構・遺物..... (玉木、浅田、前島)	27
1. 概要	27
2. 竪穴住居	30
3. 掘立柱建物	39
4. 土坑	42
5. 方形土坑	44
6. 硬化面	44
7. 焼土面	46
8. 溝	46

9. 畦畔状遺構	55
10. 遺構に伴わない遺物	56
第5節 古代以降の遺構・遺物	(玉木、浅田) 57
1. 概要	57
2. 掘立柱建物	63
3. 土坑	63
4. 墓	66
5. 溝	69
6. 水田	71
7. 畠	72
8. 遺構に伴わない遺物	84
第6節 小結	(玉木) 85
(遺物観察表)	
第4章 三保第1遺跡	95
第1節 調査の概要	(浅田) 95
1. 遺跡の概要	95
2. 基本層序	97
第2節 縄文時代の遺物	(浅田) 99
1. 概要	99
2. 遺構に伴わない遺物	99
第3節 弥生時代の遺構・遺物	(浅田) 100
1. 概要	100
2. 土坑	100
3. 集石	102
4. 遺構に伴わない遺物	107
第4節 古墳時代の遺構・遺物	(浅田、前島) 108
1. 概要	108
2. 竪穴住居	108
3. 土坑	112
4. 集石	112
5. 溝	113
6. 遺構に伴わない遺物	118
第5節 その他の時期の遺構	(浅田) 119
1. 概要	119
2. 土坑	119
3. 溝	119
4. 畠	120
第6節 小結	(浅田) 121
(遺物観察表)	
第5章 自然科学分析	126
第1節 放射性炭素年代測定	(株式会社 加速器分析研究所) 126
第2節 上伊勢第1遺跡焼失住居跡から出土した炭化材の樹種	(古川郁夫、船橋 晃) 128

第3節	上伊勢第1遺跡の植物珪酸体	……………	(株式会社 バレオ・ラボ)	131
第4節	上伊勢第1遺跡の花粉化石群集	……………	(株式会社 バレオ・ラボ)	137
第5節	上伊勢第1遺跡の自然科学分析	……………	(ハリノ・サーヴェイ株式会社)	141
第6節	上伊勢第1・三保第1遺跡出土土器の胎土分析	……………	(白石 純)	154
第7節	上伊勢第1遺跡における花粉分析	……………	(金原正明、金原正子、岡山邦子)	160
第8節	上伊勢第1遺跡の軟X線分析	……………	(高橋 学)	168
第9節	上伊勢第1遺跡から検出された古耕作土の土壤微細形態について	……………	(宮路淳子)	173

第6章	まとめ	……………		179
第1節	調査の成果	……………	(玉木)	179
第2節	三保第1遺跡の弥生時代前期の遺構について	……………	(浅田)	182

写真図版
抄録

挿 図 目 次

第1章 調査の経緯

第1図	琴浦町内一般国道9号(東伯中山道路) 関連遺跡位置図	……………	1
第2図	上伊勢第1遺跡・三保第1遺跡位置図	……………	2

第2章 地理的・歴史的環境

第1図	琴浦町位置図	……………	5
第2図	周辺遺跡分布図	……………	7

第3章 上伊勢第1遺跡

第1図	上伊勢第1遺跡位置図	……………	9
第2図	グリッド設定図	……………	10
第3図	調査区内土層断面図	……………	13
第4図	縄文時代遺構配置図	……………	15
第5図	たわみ1	……………	16
第6図	たわみ1出土遺物	……………	17
第7図	縄文時代遺構外出土遺物	……………	17
第8図	弥生時代遺構配置図	……………	18
第9図	竪穴住居1	……………	19
第10図	竪穴住居1出土遺物	……………	20
第11図	竪穴住居2	……………	21
第12図	竪穴住居1・2出土遺物	……………	22
第13図	竪穴住居3・出土遺物	……………	23
第14図	竪穴住居3出土遺物	……………	24
第15図	掘立柱建物1・出土遺物	……………	24
第16図	たわみ2・出土遺物	……………	25
第17図	たわみ3	……………	25
第18図	弥生時代遺構外出土遺物	……………	26
第19図	古墳時代遺構配置図	……………	27
第20図	古墳時代主要遺構配置図	……………	28
第21図	竪穴住居4・出土遺物	……………	29
第22図	竪穴住居5	……………	31
第23図	竪穴住居5出土遺物	……………	32
第24図	竪穴住居6・出土遺物	……………	33

第25図	竪穴住居7	……………	35
第26図	竪穴住居7出土遺物①	……………	36
第27図	竪穴住居7出土遺物②	……………	37
第28図	竪穴住居8・出土遺物	……………	38
第29図	竪穴住居9	……………	39
第30図	掘立柱建物2	……………	39
第31図	掘立柱建物3	……………	40
第32図	掘立柱建物4	……………	41
第33図	掘立柱建物5	……………	41
第34図	土坑1～7	……………	43
第35図	土坑8・出土遺物	……………	44
第36図	土坑9	……………	44
第37図	方形土坑1～5・出土遺物	……………	45
第38図	硬化面	……………	46
第39図	焼土面	……………	46
第40図	溝1	……………	46
第41図	溝2	……………	47
第42図	溝2出土遺物①	……………	48
第43図	溝2出土遺物②	……………	49
第44図	溝2出土遺物③	……………	50
第45図	溝3～6	……………	51
第46図	溝4・5出土遺物	……………	52
第47図	溝7・出土遺物	……………	52
第48図	溝8～10・出土遺物	……………	53
第49図	溝11・出土遺物	……………	54
第50図	畦畔状遺構・出土遺物	……………	55
第51図	古墳時代遺構外出土遺物	……………	56
第52図	古代以降遺構配置図①	……………	57
第53図	古代以降遺構配置図②	……………	58
第54図	古代以降遺構配置図③	……………	59
第55図	古代以降遺構配置図④	……………	60
第56図	古代以降遺構配置図⑤	……………	61
第57図	古代以降遺構配置図⑥	……………	62
第58図	掘立柱建物6	……………	64
第59図	掘立柱建物7	……………	65

第60図	土坑10	66
第61図	土坑11・出土遺物	66
第62図	土坑12	66
第63図	墓1・出土遺物	67
第64図	墓2・出土遺物	67
第65図	墓3・出土遺物	67
第66図	溝12	68
第67図	溝12出土遺物	69
第68図	溝13・出土遺物	69
第69図	溝14・出土遺物	70
第70図	溝15・出土遺物	71
第71図	水田土層断面図	72
第72図	高変遺図	73
第73図	耕作痕1	74
第74図	畠1	75
第75図	耕作痕2	77
第76図	畠2	80
第77図	耕作痕3	81
第78図	畠1・2、耕作痕2・3土層断面図	83
第79図	古代以降遺構外出土遺物	84
第4章 三保第1遺跡		
第1図	三保第1遺跡位置図	95
第2図	土層断面位置図	97
第3図	1～3区土層断面図	98
第4図	4区土層断面図	99
第5図	縄文時代遺構外出土遺物	99
第6図	弥生時代遺構配置図	100
第7図	土坑1	101
第8図	土坑2・出土遺物	101
第9図	集石1・出土遺物	102
第10図	集石2～7・出土遺物	103
第11図	弥生時代遺構外出土遺物①	105
第12図	弥生時代遺構外出土遺物②	106
第13図	古墳時代遺構配置図	108
第14図	竪穴住居1・出土遺物	109
第15図	竪穴住居2・出土遺物	110
第16図	土坑3～7・出土遺物	111
第17図	集石8・出土遺物	112
第18図	溝1	113
第19図	溝2・出土遺物	114
第20図	溝3	115
第21図	溝3出土遺物	116
第22図	古墳時代遺構外出土遺物	118

第23図	遺構配置図	119
第24図	土坑8	120
第25図	溝4～6	120
第26図	畠土層断面図	120

第5章 自然科学分析の成果

第1図	基本層序土層・遺構面試料採取地点 概略図	131
第2図	基本層序試料の機動細胞珪酸体 分布図	134
第3図	遺構面試料の機動細胞珪酸体 分布図	134
第4図	円磨度印象図	145
第5図	N ₁ 赤碓町(海砂)の粒度分布加積曲線	146
第6図	N ₂ 北条町(飛砂)の粒度分布加積曲線	146
第7図	N ₃ 加勢蛇川(川砂)の粒度分布加積曲線	147
第8図	N ₄ 溝12埋砂の粒度分布加積曲線	147
第9図	N ₅ 溝2～黒ボク間の砂質土の 粒度分布加積曲線	148
第10図	N ₆ 畝間埋砂上層の粒度分布加積曲線	148
第11図	N ₇ 畝間埋砂下層の粒度分布加積曲線	149
第12図	N ₈ 調査区東壁上部砂層の 粒度分布加積曲線	149
第13図	円磨度のヒストグラム	150
第14図	弥生時代前期費の口縁形態による 胎土の比較(K-Ca)	157
第15図	弥生時代前期費の口縁形態による胎土 の比較(Rb-Sr)	157
第16図	古墳時代初項～後期の器種別による 胎土の比較(K-Ca)	158
第17図	古墳時代後期(須恵器)の胎土比較(K-Ca)	158
第18図	上伊勢第1・三保第1遺跡出土 須恵器の産地推定(K-Ca)	159
第19図	上伊勢第1遺跡における 主要珪藻ダイアグラム	164
第20図	縄文時代後期以降における微地形変化	172
第21図	耕作土の画像解析	177
第22図	非耕作土の画像解析	177
第23図	土壌粒子の配列と孔隙率	177
第24図	土壌構造の形状	177

第6章 まとめ

第1図	桑里復元図	181
-----	-------	-----

挿 表 目 次

第3章 上伊勢第1遺跡

表1	新旧遺構対照表	11
----	---------	----

第4章 三保第1遺跡

表1	新旧遺構対照表	96
----	---------	----

第5章 自然化学分析の成果

表1	放射性炭素年代測定結果	127
表2	上伊勢第1遺跡 竪穴住居3出土炭化材の樹種	129

表3	試料1g当たりの機動細胞珪酸体個数	133
表4	花粉化石産出一覧表	138
表5	粒度分析結果	144
表6	石英の円磨度の頻度分布	144
表7	上伊勢第1遺跡出土土器分析値一覧表	156
表8	三保第1遺跡出土土器分析値一覧表	156
表9	花粉分析結果	161
表10	珪藻分析結果	162

第6章 まとめ

表1	集落の変遷	179
----	-------	-----

文中写真目次

第3章 上伊勢第1遺跡

写真図版1	畠1表面剥ぎ取り風景	11
写真図版2	現地説明会風景	11
写真図版3	竪穴住居7遺物出土状況	34
写真図版4	永楽通寶出土状況	67
写真図版5	竪穴出土状況	73
写真図版6	畠の上面の様子	79
写真図版7	耕作痕2の底面の状況	79

第4章 三保第1遺跡

写真図版1	4区調査風景	96
写真図版2	東伯小学校児童見学風景	96

第5章 自然化学分析の成果

写真図版1	上伊勢第1遺跡竪穴住居3出土炭化材	130
-------	-------------------	-----

写真図版2	上伊勢第1遺跡の植物柱状体	136
写真図版3	産出した花粉化石	140
写真図版4	砂分の偏光顕微鏡写真	151
写真図版5	石英粒の電子顕微鏡写真①	152
写真図版6	石英粒の電子顕微鏡写真②	153
写真図版7	上伊勢第1遺跡の花粉	166
写真図版8	上伊勢第1遺跡の珪藻	167
写真図版9	畝の土壌微細形態	178
写真図版10	下層および黒ボク土の微細形態	178
写真図版11	耕作土の微細形態①	178
写真図版12	耕作土の微細形態②	178
写真図版13	黒ボク土の微細形態①	178
写真図版14	黒ボク土の微細形態②	178

第6章 まとめ

写真図版1	調査区外溝検出状況	181
-------	-----------	-----

写真図版目次

巻頭カラー図版

巻頭図版1	1. 上伊勢第1遺跡・三保第1遺跡 調査後風景（北東から）
	2. 上伊勢第1遺跡畠完掘状況（南から）
巻頭図版2	1. 上伊勢第1遺跡 畠1完掘状況（北東から）
	2. 三保第1遺跡 弥生時代集石群検出状況（北東から）

第3章 上伊勢第1遺跡

PL-1	1. 上伊勢第1遺跡・三保第1遺跡 調査前遠景（南西から）
	2. 上伊勢第1遺跡縄文時代～古墳時代 完掘状況（上空から）
PL-2	1. たわみ1遺物出土状況（北東から）
	2. 竪穴住居1完掘状況（北西から）
	3. 竪穴住居2完掘状況（南西から）
	4. 竪穴住居3完掘状況（南から）
	5. 竪穴住居3炭化材検出状況（南から）
	6. 掘立柱建物1完掘状況（西から）
PL-3	1. 竪穴住居4遺物出土状況（東から）
	2. 竪穴住居5完掘状況貼り床除去前（西から）
	3. 竪穴住居6完掘状況貼り床除去前（北から）
	4. 竪穴住居7完掘状況（南から）
	5. 竪穴住居8完掘状況（北から）
	6. 竪穴住居9完掘状況（北西から）
PL-4	1. 掘立柱建物2完掘状況（東から）
	2. 掘立柱建物3完掘状況（北から）
	3. 掘立柱建物4完掘状況（南東から）
	4. 掘立柱建物5完掘状況（北西から）
	5. 土坑1完掘状況（東から）
	6. 土坑2完掘状況（南から）
PL-5	1. 土坑3完掘状況（東から）
	2. 土坑4完掘状況（北から）

	3. 土坑5完掘状況（北から）
	4. 土坑6完掘状況（西から）
	5. 土坑8完掘状況（西から）
	6. 土坑9完掘状況（西から）
PL-6	1. 方形土坑1～4完掘状況（西から）
	2. 調査区西側溝群完掘状況（南東から）
PL-7	1. 溝2遺物出土状況（南西から）
	2. 溝2遺物出土状況細部（南西から）
PL-8	1. 溝5～7完掘状況（南から）
	2. 溝4遺物出土状況（北から）
	3. 溝5遺物出土状況（北東から）
PL-9	1. 溝11杭跡検出状況（南西から）
	2. 溝11完掘状況（北西から）
	3. 掘立柱建物6完掘状況（北西から）
	4. 掘立柱建物7完掘状況（北から）
	5. 掘立柱建物7 Pit内礎石検出状況
PL-10	1. 土坑10完掘状況（北から）
	2. 土坑11完掘状況（北から）
	3. 土坑12完掘状況（北西から）
	4. 墓1検出状況（北西から）
	5. 墓2検出状況（北東から）
	6. 墓3完掘状況（北から）
PL-11	1. 溝12完掘状況（南から）
	2. 溝13完掘状況（南から）
	3. 溝14完掘状況（南から）
	4. 溝15完掘状況（東から）
PL-12	1. 耕作痕1・2完掘状況（東から）
	2. 畠1完掘状況（北西から）
	3. 畠2完掘状況（東から）
PL-13	1. たわみ1出土遺物
	2. 竪穴住居1出土遺物
PL-14	1. 竪穴住居2出土遺物
	2. 竪穴住居3出土遺物
	3. 弥生時代遺構外出土遺物
PL-15	1. 竪穴住居1～3・遺構外出土遺物

2. たわみ2・縄文・弥生時代遺構外出土遺物
- PL16 1. 竪穴住居4出土遺物
2. 竪穴住居5出土遺物
- PL17 1. 竪穴住居5出土遺物
2. 竪穴住居7出土遺物
- PL18 1. 竪穴住居7出土遺物
- PL19 1. 竪穴住居7出土遺物
2. 竪穴住居8出土遺物
3. 溝2出土遺物
- PL20 1. 竪穴住居7出土土師器
2. 溝2出土土師器
- PL21 1. 溝2出土遺物
- PL22 1. 溝2出土遺物
- PL23 1. 溝2出土遺物
- PL24 1. 溝2出土遺物
2. 溝4出土遺物
3. 溝5出土遺物
4. 溝7出土遺物
5. 溝8出土遺物
- PL25 1. 溝8出土遺物
2. 溝10出土遺物
3. 溝11出土遺物
4. 溝2・古墳時代遺構外出土遺物
- PL26 1. 溝12・古代遺構外出土遺物
2. 溝13出土遺物
3. 溝14出土遺物
4. 溝15出土遺物
- PL27 1. 墓1出土遺物
2. 墓2出土遺物
3. 古代遺構外出土遺物

第4章 三保第1遺跡

- PL28 1. 土坑1完掘状況(南から)
2. 土坑2遺物出土状況(南から)
3. 集石1検出状況(南西から)
4. 集石2検出状況(南東から)
5. 集石3検出状況(北から)
6. 集石4検出状況(北から)
- PL29 1. 集石5検出状況(南東から)
2. 集石6・7検出状況(南東から)
3. 集石群検出状況(東から)
4. 溝1・竪穴住居1検出状況(西から)
5. 竪穴住居1完掘状況(南東から)
6. 竪穴住居2完掘状況(南から)
- PL30 1. 土坑3完掘状況(南から)
2. 土坑4完掘状況(北から)
3. 土坑5完掘状況(南から)
4. 土坑6完掘状況(南から)
5. 土坑7完掘状況(南から)
6. 集石8検出状況(北から)
- PL31 1. 溝1底面検出状況(北西から)

2. 溝2遺物出土状況(東から)
3. 溝2完掘状況(南東から)
- PL32 1. 溝3糞出土状況(南から)
2. 溝3籾出土状況(東から)
3. 溝3環蓋出土状況(北から)
4. 溝3玉出土状況(南西から)
5. 溝3完掘状況(南西から)
- PL33 1. 溝4完掘状況(南東から)
2. 溝6完掘状況(東から)
3. 溝4・5完掘状況(北東から)
4. 畠耕作土上面の様子(南から)
5. 畠土層断面(北から)
- PL34 1. 集石1出土遺物
2. 土坑2出土遺物
3. 集石4出土遺物
4. 土坑2出土遺物
- PL35 1. 竪穴住居1出土遺物
2. 竪穴住居2出土遺物
3. 溝2出土遺物
- PL36 1. 溝3出土遺物
- PL37 1. 溝3出土遺物
- PL38 1. 1区遺構外出土遺物(暗褐色土)
- PL39 1. 2区遺構外出土遺物(暗褐色土)
2. 2区遺構外出土遺物(黒褐色土)
- PL40 1. 2区遺構外出土遺物(黒褐色土)
2. 溝3・遺構外出土遺物
- PL41 1. 土坑2・溝3・3区遺構外出土遺物
2. 3区遺構外出土遺物
- PL42 1. 3区遺構外出土遺物
2. 竪穴住居2出土直刃鎌

第5章 自然科学分析の成果

- PL43 上伊勢第1遺跡地域概念図
- PL44 上伊勢第1遺跡立体図
- PL45 上伊勢第1遺跡地質断面
- PL46 上伊勢第1遺跡第7地点
- PL47 上伊勢第1遺跡
軟X線写真(第7地点断面)
- PL48 上伊勢第1遺跡第8地点
- PL49 上伊勢第1遺跡
軟X線写真(第8地点平面)
- PL50 上伊勢第1遺跡
畝状遺構表面の生痕軟X線写真
(第8地点平面)
- PL51 上伊勢第1遺跡
畝状遺構表面の生痕軟X線写真
(第8地点平面)
- PL52 上伊勢第1遺跡第9地点
- PL53 上伊勢第1遺跡
軟X線写真(第9地点断面)

第1章 調査の経緯

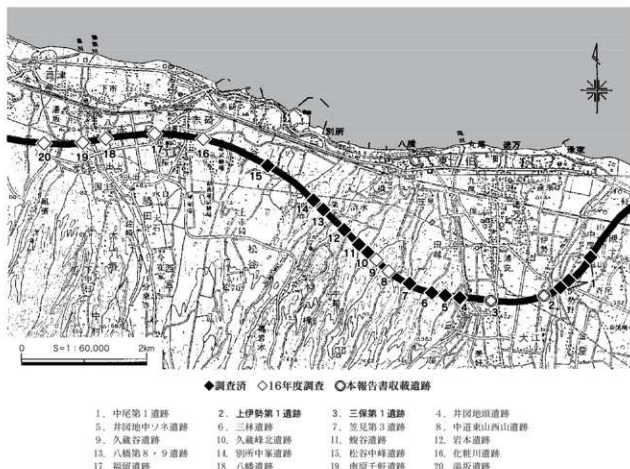
第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴い、東伯郡琴浦町上伊勢地区および三保地区内の工事予定地に存在する埋蔵文化財包蔵地である上伊勢第1遺跡、三保第1遺跡の記録保存を目的としたものである。

当該地は、旧東伯町に所在するが、平成16年9月1日をもって西隣の旧赤崎町と合併し、新町名である琴浦町となった。

さて、山陰地方では、国道9号線の交通混雑緩和および将来の国土幹線道路整備として、山陰自動車道の整備事業が進められ、鳥取県中部地域では、東伯中山道路、北条道路、青谷羽合道路が自動車専用の高規格道路として計画・施工されている。

東伯中山道路の計画地内のうち、旧東伯町地内では中尾第1遺跡、上伊勢第1遺跡、三保第1遺跡、井岡地頭遺跡、井岡地中ソネ遺跡、三林遺跡、笠見第3遺跡、中道東山西山遺跡、久蔵谷遺跡、久蔵峰北遺跡、蛭谷遺跡、岩本遺跡、八幡第8・9遺跡の多数の遺跡があり（第1図参照）、建設に先立



第1図 琴浦町内一般国道9号（東伯中山道路）関連遺跡位置図

ち計画地内の遺跡および遺構の広がりを確認する必要性が生じた。このため、東伯町教育委員会が平成11年度から15年度にかけて、国庫補助事業として断続的に試掘調査を行うこととなった。当該地の試掘調査は、平成15年度に行われた。

この結果を受け、国土交通省中国地方整備局倉吉河川国道事務所は、鳥取県教育委員会事務局文化課と協議し、文化財保護法第57条の3に基づく発掘通知を行った上、鳥取県教育委員会事務局教育長の指示により財団法人鳥取県教育文化財団に記録保存のための事前調査を委託した。これにより、当財団が文化財保護法第57条に基づく発掘調査届を提出し、平成16年度に当財団埋蔵文化財センターが発掘調査を担当することとなった。

上伊勢第1遺跡^{かぜいち}は加勢蛇川左岸の微高地上にあり、その約1km西側の微高地上に三保第1遺跡が立地するという位置関係である（第2図参照）。（牧本哲雄）

第2節 調査の経過

1. 上伊勢第1遺跡

当遺跡は路体盛土部分の調査で、調査に先立ち平成16年3月に調査前航空写真撮影を行い、基準杭設置を4月8日、方眼杭設置を重機表土剥ぎ後、検出作業と併行して同年4月27日に業者委託し、調



第2図 上伊勢第1遺跡・三保第1遺跡位置図

査区内に10m間隔のグリッドを設けた。その結果、東西（X）軸を北からA～H、南北（Y）軸を東から1～8とした。グリッド名は、東西南北軸交点の北東側杭の名称をとって呼称し、座標値はD2杭（X：-56800.000m、Y：-57290.000m）、G8杭（X：-56830.000m、Y：-57350.000m）などとなった。標高値は、2級基準点H10-2-5の42.592m等を基準にした。

調査区内には農業用水路があり、調査区外へ迂回させる必要があったため、国土交通省倉吉河川国道事務所と協議し、仮設用水路を設置した後に重機による表土剥ぎ作業を4月15日から開始した。人力による遺構検出および発掘作業は4月26日から始め、途中調査区内南側にあった電柱の移設を待って、農業用進入路部分の調査を行わなければならなかったこと、当初、遺構面は試掘調査の結果1面とされていたが、全面の調査を進めていくうちに、黒ボク上層または黒ボク中で遺構面が確認され、全面が2面、一部3面の遺構面の存在が確認されたことから、当初の計画を延長して9月10日まで行った。廃土は、用地内に仮置きした後、国土交通省によって場外搬出した。

検出作業の結果、弥生時代前期の竪穴住居3棟、掘立柱建物1棟、古墳時代の竪穴住居6棟、掘立柱建物4棟、土坑9基、溝11条、古代から中世の掘立柱建物2棟、土坑3基、墓3基、溝4条、畝2面および耕作痕3面などを調査した。

上伊勢第1遺跡の発掘調査面積は、1面が3,424㎡の2面、一部3面の計7,253㎡となった。

2. 三保第1遺跡

当遺跡は橋脚部分のみの調査で、東から1～4区に分けて調査を行った。3区では、町試掘調査によるT3で竪穴住居が検出されていた。

4月8日に基準杭の設置を業者委託し、座標値は、TB1（X：-56952.940m、Y：-58144.017m）、TB2（X：-56965.930m、Y：-58208.450m）などとなった。標高値は、2級基準点H10-3-8の39.201m等を基準とした。4月14日に重機による表土剥ぎ作業を行ったが、途中各橋脚の工事範囲が拡大したことから、4月28・29日に再度重機による表土剥ぎを行った。人力による遺構検出および発掘作業は4月20日から行った。当初遺構面は1面と考えられていたが、調査を進めるうちに黒ボク土中にもさらに1面の遺構面の存在が判明し、当初の計画を変更し6月30日まで行った。各地区の廃土は、用地内に仮置きした。

検出作業の結果、1区では、古墳時代中期の竪穴住居1棟、溝1条、古墳時代中期以前の自然河川1条を調査した。2区では、弥生時代前期の集石1基、古墳時代中期の溝1条、土坑5基、集石1基を調査した。3区では、弥生時代前期の集石6基、古墳時代中期の竪穴住居1棟、土坑1基を調査した。4区は、精査の結果遺構がないことが判明し、調査区平面図および土層断面の記録にとどめた。

三保第1遺跡の発掘調査面積は、1区1面171㎡の2面342㎡、2区230.5㎡の2面461㎡、3区1面116.3㎡の2面232.6㎡、4区35.9㎡、計1071.5㎡となった。

現地調査終了後、整理作業および報告書作成に取り掛かり、3月末をもって発掘調査報告書を刊行した。

（牧本）

第3節 調査の体制

調査は、以下の体制で実施した。

○調査主体

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 有田 博充

事務局長 中村 登

埋蔵文化財センター

所長 田中 弘道 (兼・県埋蔵文化財センター所長)

次長(事務) 竹内 茂

次長(専門) 加藤 隆昭

調査課

課長(兼次長) 加藤 隆昭

企画調整班長 山根 雅美

文化財主事 大野 哲二、下江 健太

庶務課

課長(兼次長) 竹内 茂

主幹 福田 高之

事務職員 大川 秋子、谷垣真寿美、山根 美代、小谷 有里

○調査担当 東伯調査事務所

所長 佐治 孝弑

班長 牧本 哲雄

文化財主事 家塚 英詞、小山浩和 (福留遺跡・湯坂遺跡担当)

君嶋 俊行 (南原千軒遺跡担当)

高尾 浩司、小口英一郎 (中道東山西山遺跡担当)

野口 良也、濱本 利幸 (八幡遺跡・久蔵谷遺跡担当)

玉木 秀幸、浅田 康行 (上伊勢第1遺跡・三保第1遺跡担当)

恩田 智則、小谷 郁夫 (化粧川遺跡・中道東山西山遺跡担当)

調査員 西川 雄大 (南原千軒遺跡担当)

岩井 美枝、福井 流星 (中道東山西山遺跡担当)

前島 ちか (上伊勢第1遺跡・三保第1遺跡担当)

阪上志緒里 (八幡遺跡・久蔵谷遺跡担当)

調査補助員 野 浩一、山根 雅美、吉田由香里、山根 航、石水 健一

事務補助員 真山 葉子

○調査指導 鳥取県教育委員会事務局文化課

○調査協力 琴浦町、琴浦町教育委員会、上伊勢地区、三保地区

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

報告する遺跡は、鳥取県東伯郡琴浦町に所在する。琴浦町は、平成16年9月に東伯郡東伯町と赤碓町が合併して誕生した町である。ここは県中部西側に位置し、西伯郡との郡境にあたる。町の東側は倉吉市、東伯郡大栄町、西側は西伯郡中山町・大山町、南側は日野郡江府町に接し、北は日本海に面している。町域は東西15.2km、南北18.5km、総面積139.9km²を測り、ここには約20,500人が生活している。

琴浦町の地形・地質は、県の南西部に位置する大山（標高1,729m）の影響を強く受けている。地形は、町の南西端において、大山の前峰あたる烏ヶ山、矢筈ヶ山をはじめとする標高600～1,300mの山々が位置しており、そこから日本海へ向かって山麓台地が広がっている。また、町内には東から順に加勢蛇川、洗川、倉坂川、勝田川などの河川が流れており、その流域において沖積平地ないしは扇状地が形成されている。

地質は、1万数千年前まで活動していた大山の噴火堆積物によって、町のほぼ全域が厚く覆われている。琴浦町内の基本層序についてみると、丘陵や平野部では若干異なっているが、おおむね上から順に黒ボク、弥山軽石層、ソフトローム層、ホーキ層、A T層（給良Tn火山灰）、ハードローム層、大山倉吉火山灰層（DKP）となっている。

ここで遺跡の状況をより理解するために、町東部の地形を中心にもう少し詳しく述べておきたい。

町の東部は、山麓台地と扇状地で構成されている。この西側では、山麓台地が河川などの浸食によって大小様々な谷部が形成されており、比較的起伏に富んだ地形となっている。現在、ここでは鳥取県の主要産業の一つである二十世紀梨の生産が行われているが、弥生時代中期後半～古墳時代にかけては、大小様々な集落が展開していた。

これに対して東側は、加勢蛇川や洗川などの河川によって扇状地が形成され、比較的なだらかな地形となっている。この扇状地は、低丘陵地域や沖積平地で構成されている。低丘陵地域は、現在、圃場整備がなされており、整然とした耕地が広がっている。しかし、ここには古代の律令的行政区分という伯耆国八橋郡の郡衙推定地があり、古代の官衙遺跡や集落、寺院などが展開していた。

沖積平地は、加勢蛇川や洗川、さらにその支流などによって形成されたものである。現在では圃場整備がなされており、旧地形の状況を明確に捉えることはできないが、これらの河川やその支流の間には、幾つかの微高地が形成されていたものと考えられる。当該遺跡もこのような微高地上に立地していると考えられる。

（玉木秀幸）



第1図 琴浦町位置図

第2節 歴史的環境

琴浦町内には、多くの遺跡の存在が知られており、そのうち、幾つかの遺跡で調査がなされてきた。とりわけ近年では、一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴う大規模な遺跡の発掘調査が行われており、縄文時代～中世に至るまでの基礎資料が着々と蓄積されている。以下では、これらの調査成果に基づいて、当該遺跡周辺における人々の活動を素描していく。

旧石器～縄文時代

旧石器時代～縄文時代までの遺跡数は少ない。旧石器では松ヶ丘や榎下で尖頭器が数点、三林遺跡でスクレイパー、笠見第3遺跡で舟底形細石刃石核が採集されているにすぎず、また、縄文時代早期～前期では松ヶ丘遺跡や森藤第1・2遺跡など、中期では井岡地中ソネ遺跡や井岡地頭遺跡などで土器片が出土しているにすぎない。なお、琴浦町との町境に位置する大栗町西高尾谷奥遺跡では、押型文土器とともに住居や住居状遺構が確認されている。

縄文時代後期になっても遺跡の少ないことに変わりはないが、定住的な集落が認められるようになる。森藤第2遺跡では、中央に石囲炉をもつ竪穴住居が確認されており、ここからは、後期前半頃の精製・粗製土器とともに土偶なども出土している。また、後期～晩期にかけては、落とし穴状遺構が中尾第1遺跡や笠見第3遺跡、福留遺跡などで確認されており、この時期には、微高地や丘陵上が狩猟場として利用されていたことがわかる。

弥生時代

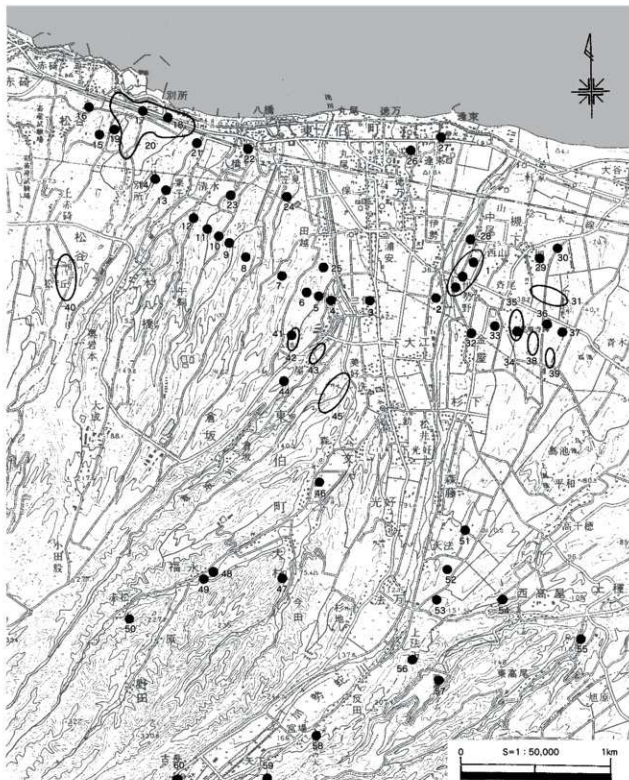
弥生時代前期～中期前半頃までは、縄文時代と同様、遺跡数が少ない。前期～中期前半頃の遺構は中尾第1遺跡や別所女夫岩遺跡などで確認されている。このうち中尾第1遺跡では、前期後半頃の列状に配置された礫石使用墓や木棺墓群が確認されている。また、中期前半～中葉頃の竪穴住居や貯蔵穴なども確認されている。貯蔵穴からは中期中葉の土器とともに打製石鉞や炭化米などが出土しており、遺跡の周辺である沖積平地上において稲作が行われていた可能性が推察される。

中期後半になると、丘陵上に集落が展開されるようになり、古墳時代初頭にかけて大幅に増加していく。これらは森藤第1・2遺跡、水溜り・駕籠据場遺跡、大峰遺跡、井岡地中ソネ遺跡、三保遺跡、笠見第3遺跡、三林遺跡、久蔵峰北遺跡、蝮谷遺跡、福留遺跡などで確認されている。

また、八橋地区内を中心とする地区では、銅剣・銅矛・銅鐙がみつまっている。田越の丘陵上では、出土状況が不明であるが、中細形銅剣が4口、久蔵峰では銅矛が1口、八橋の南方の丘陵上では、銅鐙が1口出土している。

古墳時代

古墳時代になっても、引き続き丘陵上に集落が営まれているが、微高地上でも再び集落が営まれるようになる。丘陵上に営まれる集落としては、三保遺跡、井岡地中ソネ遺跡、笠見第3遺跡、三林遺跡、久蔵峰北遺跡、蝮谷遺跡、八橋第8・9遺跡、松谷中峰遺跡、別所中峯遺跡などがある。また、微高地上に営まれる集落としては、中尾第1遺跡や逢東第2遺跡などがある。中尾第1遺跡では、中



1. 中尾第1遺跡 2. 上伊勢第1遺跡 3. 三保第1遺跡 4. 井園地頭遺跡 5. 井園地中ノ字遺跡 6. 三林遺跡 7. 笠見第3遺跡
 8. 中道東山西山遺跡 9. 久歳谷遺跡 10. 久歳峰北遺跡 11. 堀谷遺跡 12. 岩本遺跡 13. 八橋第8・9遺跡 14. 別所中華遺跡 15. 松谷
 中峰遺跡 16. 堀ノ上遺跡 17. 筑取塚古墳 18. 別所2号墳 19. 松谷遺跡 20. 別所古墳群 21. 八橋狐塚古墳 22. 八橋銅鐸
 出土地 24. 笠見1号墳 25. 田越第1遺跡 26. 逢塚第2遺跡 27. 逢塚1・2号墳 28. 中尾古墳 29. 榎下豪族居館 30. 向山遺跡 31. 榎
 下古墳群 32. 金屋峠塚 33. 伊勢野遺跡 34. 善尾庵寺跡 35. 善尾古墳群 36. 大高野遺跡 37. 水溜り・願能掘場遺跡 38. 塚本古墳群
 39. 大高野古墳群 40. 松ヶ丘遺跡 41. 田越第3遺跡(銅剣出土地) 42. 田越第2遺跡 43. 三保古墳群 44. 三保遺跡群 45. 竜ヶ崎古墳群
 46. 山田1・2号墳 47. 妙見山城跡 48. 福水1号墳 49. 福水2号墳 50. 福水3号墳 51. 森藤遺跡群 52. 古長出土地(大法院寺跡)
 53. 大法古墳群 54. 大峰遺跡 55. 西高尾峠塚 56. 法万峠塚 57. 西高尾谷奥遺跡 58. 宮場遺跡 59. 矢下古墳 60. 古長古墳

第2図 周辺遺跡分布図

期の竪穴住居1棟や溝などが確認されている。逢東第2遺跡では後期の竪穴住居1棟が確認されている。両遺跡ともに小規模なものとなっている。

ところで、古墳時代に入ると各地で古墳がつくられるようになる。町内に所在する前方後円墳のうち、明確に前期に属するものはない。その可能性があるものとして、前方後方墳であるが、別所1号墳がある。その他の前方後円墳は中期～後期にかけて築かれたものであり、八橋孤塚古墳、笠見1号墳、竜ヶ崎3号墳などがある。また、円墳であるが、中期～後期にかけて小・中規模のものが群集して築かれるようになる。大高野古墳群、塚本古墳群、斎尾古墳群、槻下古墳群、竜ヶ崎古墳群、三保古墳群などの古墳群が丘陵・低丘陵上に展開している。

古代～中世

古代になると、加勢蛇川の東岸の低丘陵地域、上伊勢第1遺跡から東方約1kmのところに斎尾廃寺が建立される。斎尾廃寺は、初期の仏教文化の様相を残すものである。県内の古代寺院の多くが法起寺式伽藍配置を採用するのに対して、ここでは法隆寺式伽藍配置が採用されている。ここからは塑像片、仏頭、鴟尾、鬼瓦、軒丸瓦、軒平瓦などが出土している。このうち、創建期の軒丸瓦には紀寺式、また、軒平瓦には法隆寺系統の瓦当文様が確認されている。

この斎尾廃寺の東側は、伯耆国八橋郡の郡衙推定地となっている。ここには、総柱礎石建物群や大量の炭化米が検出され、官衙関連の遺跡と考えられる大高野遺跡が所在している。また、この付近には、伊勢野遺跡や水溜り・駕籠据場遺跡、この南方2kmには森藤第1遺跡といった掘立柱建物を中心とする集落が所在し、さらに南側の大法には古瓦散布地が確認されている。このため、加勢蛇川東岸が郡の中心地となっていたものと考えられる。

ところで、加勢蛇川と洗川によって形成された沖積平地では、圃場整備前まで条里の地割の痕跡が残っていたようである。この地割りは若干西に振るがほぼ南北に軸をとるとの研究報告がある。しかし、この形成期については調査が行われておらず、不明瞭なものである。

中世になると、その調査例が少なく不明瞭な点が多い。遺構を確認した遺跡としては、中尾第1遺跡や井岡地頭遺跡などが存在する程度である。中尾第1遺跡は集落遺跡であり、「コ」の字状の溝に区画された空間の中に、掘立柱建物を確認している。また、この建物から離れた場所には、勝間田焼の甕が骨蔵器として使用された墓や、時期が異なるが茶毘墓も確認されている。

井岡地頭遺跡では、11世紀末葉～12世紀初頭の方形居館の可能性が考えられる方形区画遺構が確認されている。また、このような方形区画遺構は、槻下にも存在している。これは、大溝によって囲まれた方形連郭を呈した館跡と考えられるものである。ここは、『伯耆国民談記』において「岩野禪正坊居す」と記されていることから地頭の館であったものと推定される。 (玉木)

参考文献

- 岩永 実、1978、「鳥取県における条里地域の研究（第Ⅱ報）」『鳥取県地誌考』岩永實先生記念論文集刊行会
東伯町編、1968、『東伯町誌』
坂本嘉和、2003、『第2節 歴史的環境』『鳥取県教育文化財団調査報告書80』鳥取県教育文化財団

第3章 上伊勢第1遺跡

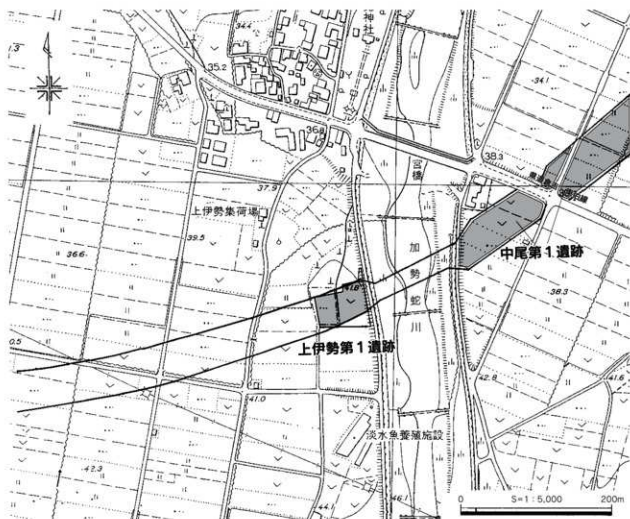
第1節 調査の概要

1. 遺跡の概要

上伊勢第1遺跡は、東伯郡琴浦町大字上伊勢字東松山ほかに所在する。

ここは海岸線から直線距離で2kmほど離れた場所に位置しており、すぐ近くには県道倉吉・東伯線が通っている。また、本遺跡から東へ1kmほど離れた低丘陵上には八橋部衝の推定地があり、そこには大野遺跡や畜尾庵寺跡といった古代の官衙遺跡や寺院が所在している。なお、本報告書に記載した三保第1遺跡は、本遺跡から西へ1kmほど離れている。

遺跡の周辺は扇状地が広がっており、比較的平坦な地形となっている。この扇状地は、加勢蛇川や洗川、そこからのびる支流によって形成されたものであり、これらの河川の間には微高地が形成され



第1図 上伊勢第1遺跡位置図

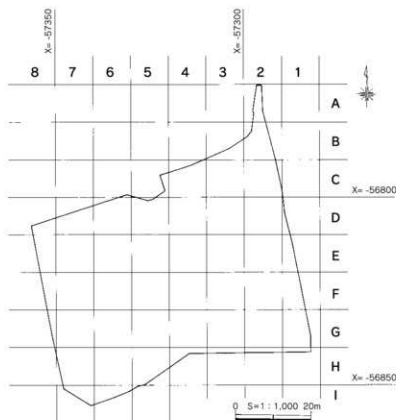
ている。本遺跡もこのようにして形成された微高地上に立地している。なお、遺跡のすぐ東側には、加勢蛇川が流れており、調査区の地形は加勢蛇川へ向かって緩やかに下るものとなっている。

この周辺はすでに圃場整備がなされており、区画された耕作地となっている。圃場整備前の状況は条里地割が残っており、圃場整備以前に撮影された航空写真でもその状況が確認できる。なお、調査区の中央と西側を南北に流れる溝12～14はこれに関連するものと考えられる。

さて、調査であるが、旧東伯町教育委員会が実施した確認調査によって、古墳時代の竪穴住居と遺物包含層が黒ボク上面で確認されていることから、本遺跡が古墳時代の集落遺跡であるとの認識をもって調査することとなった。調査は効率化を図るため、重機によって遺構検出面の上面までを掘り下げ、その後、人力による調査を行うこととなった。重機による掘り下げは、本来ならば黒ボク上層までとなるはずであるが、調査期間が短く、また、黒ボク上面での遺構検出は困難であり、遺物の出土量も希薄であるとのことから、遺構検出の容易な漸移層までを重機で掘り下げ、調査を行うこととなった。しかし、重機による掘り下げが終盤にさしかかった時点で、調査区西側から溝2に伴う遺物がまとまって出土した。このため重機による掘下げを黒ボク上面までとすることになった。

人力による調査は4月26日から開始した。まず、調査区内に10m間隔で杭を打ち込み、その東西軸を東からアルファベット、南北軸を北から算用数字で示し、第2図のようなグリッドを設定した。つづいて、このグリッドの線に沿うようにしてトレンチを入れ、土層の堆積状況や遺構・遺物の分布状況を把握することにした。その後、漸移層から黒ボク上面において検出作業を行った。

検出の結果、古代～中世の掘立柱建物2棟、土坑3基、墓3基、溝4条、畝、耕作痕を確認した。このうち耕作痕は調査区全体に認められ、また、これらの遺構は古墳時代以前の遺構を切っていた。



第2図 グリッド設定図

このため、当初の予定では1面であった遺構面を2面に切り替えて調査を行うこととなった。

6月17日には空中写真撮影を行い、第1遺構面の調査が終了した。なお、畝の状況を把握するため、土壌分析や軟X線分析を行った（第5章参照）。

第2面遺構面の調査は空撮終了後直ちに開始した。調査の結果、縄文時代のたわみ状遺構1基、弥生時代前期の竪穴住居3棟、掘立柱建物1棟、たわみ状遺構2基、古墳時代前期～後期の竪穴住居6棟、掘立柱建物4棟、土坑9基、方形土坑5基、溝11条、硬化面1面、焼土面1面、畦畔状遺構1面を確認した。このうち、弥生時代前期の竪穴

住居3は、焼失住居の可能性のあるものであり、ここから出土した炭化材の樹種同定や年代測定を行った。また、土器についても良好な資料を得ることができたため、胎土分析を行った（第5章参照）。

7月には調査区内にあった電柱が移設されたため、南西側の調査に取り掛かることとなり、16日には重機による掘り下げを開始した。重機による掘り下げは、それまでの調査成果を踏まえ、畠の耕作土上層の灰色系のシルト層までとした。調査の結果、畠2面、耕作痕3面を確認した。なかでも下層の畠1の残存状況は良好であり、畝の状況が明確に分かるものであった。8月21日には現地説明会を実施し、縄文時代～中世の遺構・遺物の検出状況の説明、テント内では三保第1遺跡も含めた出土遺物や写真パネルの展示を行い、100名ほどの見学者で賑わった。9月1日には高橋学氏、宮路淳子氏、深瀬亜紀氏に畠の現地指導を受けた。9日には空中写真撮影を行い、10日には調査が終了した。



写真図版1 畠1表面剥ぎ取り風景



写真図版2 現地説明会風景

表1 新旧遺構対照表

新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
竪穴住居1	SI6	土坑6	SK20	溝7	SD95
竪穴住居2	SI8	土坑7	SK21	溝8	SD92
竪穴住居3	SI5	土坑8	SK13	溝9	—
竪穴住居4	SI1	土坑9	SK19	溝10	SD93
竪穴住居5	SI2	土坑10	SK1	溝11	SD91
竪穴住居6	SK4	土坑11	SK2	溝12	SD1
竪穴住居7	SI3	土坑12	SK3	溝13	SD90
竪穴住居8	SI4	方形土坑1	SK18	溝14	SD5
竪穴住居9	SI7	方形土坑2	SK15	溝15	SD6
掘立柱建物1	SB6	方形土坑3	SK17	たわみ1	SI10
掘立柱建物2	SB1	方形土坑4	SK16	たわみ2	たわみ4
掘立柱建物3	SB8	方形土坑5	—	たわみ3	SI9
掘立柱建物4	SB5	墓1	集石1	硬化面	硬化面
掘立柱建物5	SB7	墓2	SX1	焼土面	焼土
掘立柱建物6	SB4	墓3	SX2	畦畔状遺構	水田
掘立柱建物7	SB2	溝1	SD2	水田	—
土坑1	SK23	溝2	SD4	畠1	畝1
土坑2	SK5	溝3	SD89	畠2	畝2
土坑3	SK7	溝4	SD88	耕作痕1	—
土坑4	SK10	溝5	SD96	耕作痕2	SD7～87, 97～102
土坑5	SK22	溝6	SD94	耕作痕3	

調査終了後、直ちに報告書作成に取り掛かった。報告書の刊行が3月末となっていることから、効率良く整理作業を行うことに努めた。1月5日には遺構のトレース（浄写）が終了し、20日には図版類の作成が終了した。1月31日には原稿が完成し、3月末には報告書が刊行した。

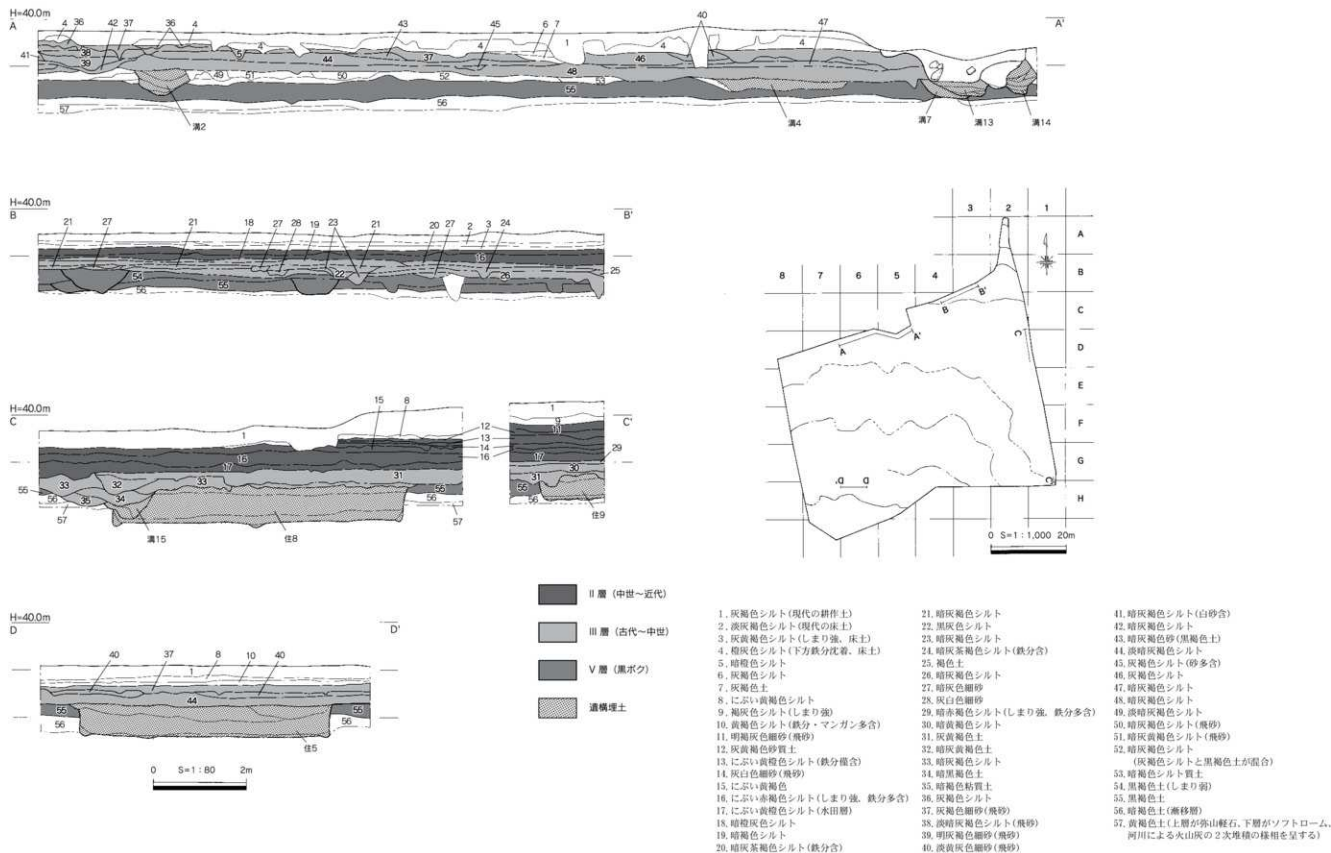
ところで、本報告書に掲載した遺構名であるが、調査時のものと異なっている。これは、検出時と完掘後に遺構の性格が異なるものが存在したことから、改めて遺構名をふり直したためである。この遺構名の対照表は表1に示すとおりである。（玉木秀幸）

2. 基本層序（第3図）

調査区内の堆積状況は、おおむね以下のとおりとなっている。まず、圃場整備時に盛られた客土が堆積し（Ⅰ層）、その下面には中世から現代にかけてのシルト層が堆積している（Ⅱ層）。さらに、古代～中世の畠の耕作土とそれを覆う細砂が堆積し（Ⅲ層）、弥生時代前期～古墳時代の遺構・遺物を含む黒ボクが堆積している（Ⅴ層）。このⅢ層とⅤ層の間には、部分的にはあるが、暗褐色系のシルトが堆積している（Ⅳ層）。Ⅴ層以下の堆積は漸移層（Ⅵ層）、弥山軽石層やソフトローム層となっている（Ⅶ層）。これらⅠ～Ⅶ層の概要は以下のとおりである。

- Ⅰ層：1～10層までがこれに対応する。圃場整備時の客土と考えられる。
- Ⅱ層：11～17層までがこれに対応する。中世以降に堆積した層であり、灰色系の淡い色調を呈するシルト層である。これらの層には酸化鉄の沈着が認められ、調査区北東側の土層断面では水田に伴う畦畔状遺構を確認できたことから、水田の耕作面と考えられる。また、この層には厚さ10cm以下の薄い灰白色系の細砂層が幾らか認められる。この細砂層は飛砂の可能性がある。
- Ⅲ層：18～48層までがこれに対応する。古代～中世の畠の耕作土ないしは畠を覆う砂である。畠を覆う砂は、飛砂の可能性が考えられる。
- Ⅳ層：49～53層までがこれに対応する。暗灰褐色系のシルト層であり、黒ボク上面に堆積した砂が土壌化した様相を呈する。これらは飛砂の可能性が考えられる。この層は調査区全体には認められず、北東側において分布している。古墳時代前期の溝2が切っていることから、これ以前のものと考えられる。この層の上面は古墳時代前期の検出面といえる。
- Ⅴ層：54～55層がこれに対応する。いわゆる黒ボクであり、弥生時代前期の遺構・遺物を包蔵する層である。この層の上面が弥生時代～古墳時代後期の遺構検出面である。ところで、54層はブロック状の堆積状況を示した層であり、また、この上面には畦畔状遺構を検出していることから、耕作土であった可能性が考えられる。
- Ⅵ層：56層がこれに対応する。いわゆる漸移層であり、黒ボクとソフトローム層の間に位置する層である。縄文時代早期の遺構検出面である。
- Ⅶ層：上面には弥山軽石層が堆積し、その下はソフトローム層となっている。ソフトローム層には一辺3cmほどの軽石が含まれており、沖積作用によってこの層が形成されたものと考えられる。

（玉木）

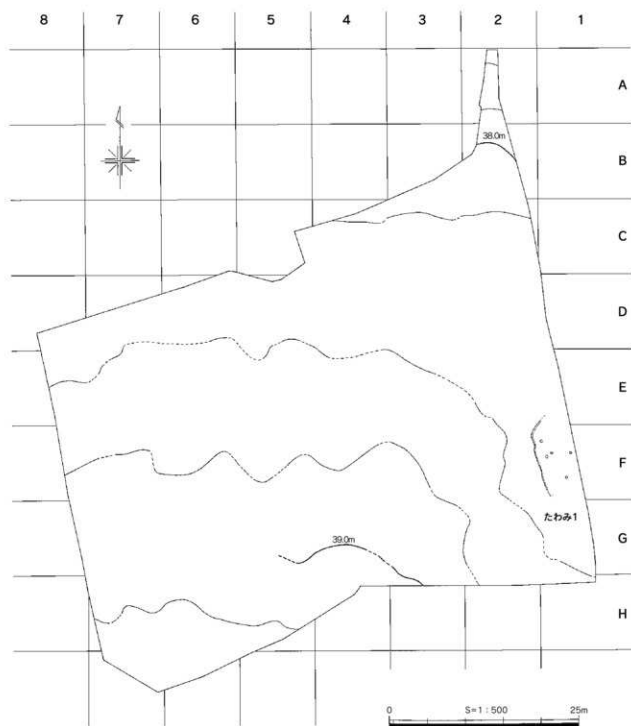


第3図 調査区内土層断面図

第2節 縄文時代の遺構・遺物

1. 概要

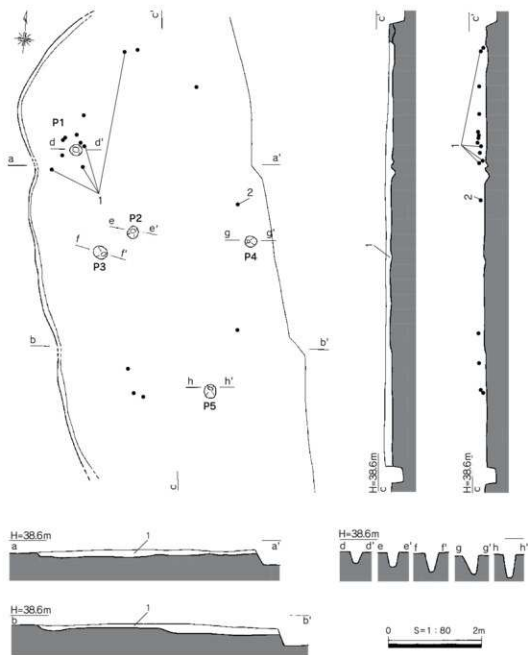
縄文時代の遺構は、たわみ状遺構1基を確認した。たわみ1は、弥生時代前期の遺構・遺物の集中



第4図 縄文時代遺構配置図

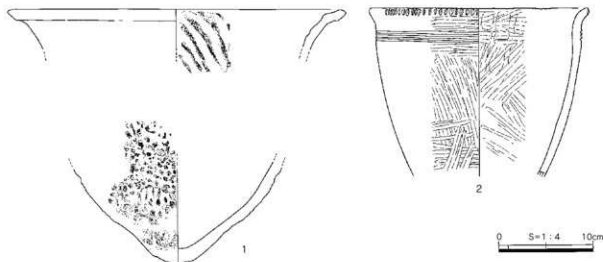
する調査区東端に位置しており、漸移層上面で検出した。この遺構は、高山寺式の特徴を示す土器を伴うことから、早期後半の時期が考えられるものである。この他に調査区内では早期の遺構・遺物は確認されていないことから、この遺構が単独で存在していた可能性が考えられる。しかし、遺構が調査区の東端に位置すること、その立地が北東へと下る緩斜面上であることから、調査区東端から加勢蛇川にかけて遺構・遺物が存在する可能性も考えられる。

遺物は、たわみ1に伴う土器のほか、晩期の土器が数点出土したにすぎなかった。 (玉木)



1. 黒褐色土(しまり強、黄白色粒確含)

第5図 たわみ1



第6図 たわみ1出土遺物

2. たわみ

たわみ1 (第5・6図, PL.2・13)

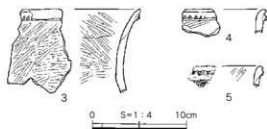
調査区東端のF1グリッド中に位置し、調査区を北東方向へと下る緩斜面上に立地する。検出面は黒ボクを除去した漸移層上面である。

遺構の形状・規模は、東側が調査区外へと伸びており、南側がたわみ3によって切られているため不明である。検出面からの深さは16cmを測る。底面は漸移層までとなっており、標高38.3mである。また、底面は比較的平坦であるが、硬化した部分は認められなかった。ここからは径20~32cm、深さ24~49cmの平面形が円形を呈するピット5基を確認した。これらのピットは配置に規則性が認められず、柱痕跡も確認できなかったことから、柱穴とは判断し難いものであった。埋土は黒ボクとほぼ同質の黒褐色土であるが、黒ボクやたわみ2の埋土に比べやや淡いものとなっていた。

遺物は、早期の深鉢1、弥生時代前期の甕2が出土した。1は遺構の北西側、底面付近でまとまって出土した。外面には楕円文、口縁部内面には斜行沈線を施し、底部は尖底となっている。2は付近に弥生時代の遺構が存在することから、そこから混入したものと考えられる。遺構の時期は、1が高山寺式の特徴を示すことから、早期後半頃と考えられる。(玉木)

3. 遺構に伴わない遺物 (第7図, PL.15)

晩期の土器を数点確認したのみである。このうち図化できたものは、鉢3~5である。これらは、調査時に確認することができず、整理作業時においてはじめて確認できたものである。いずれも口縁部に刻目突帯がめぐるものである。時期は晩期後半頃と考えられる。(玉木)

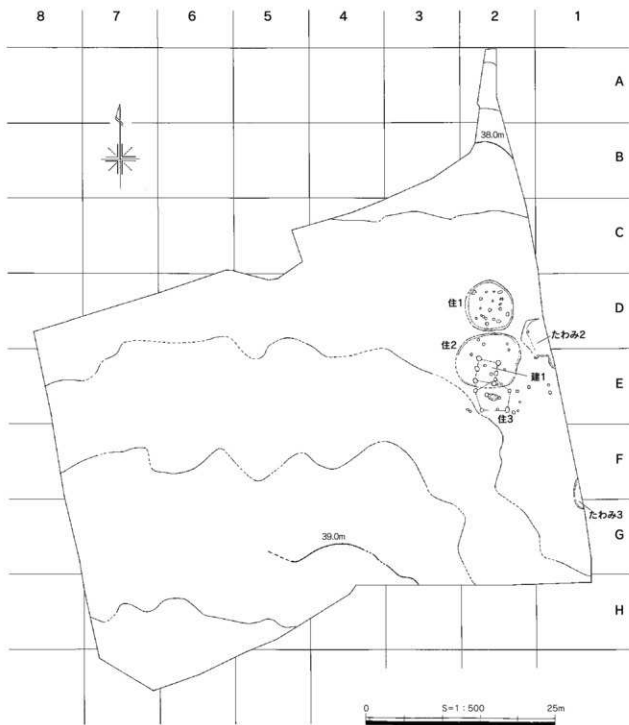


第7図 縄文時代遺構外出土遺物

第3節 弥生時代の遺構・遺物

1. 概要

弥生時代の遺構・遺物は、前期のものが主体となっており、その他の時期のものとしては、中期の



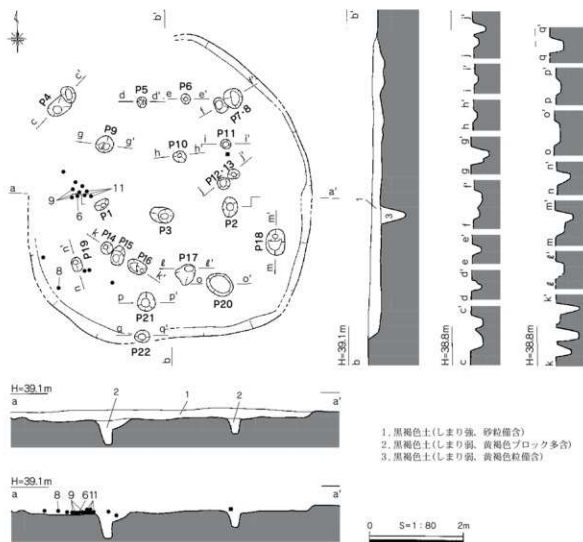
第8図 弥生時代遺構配置図

遺物がわずかに認められるにすぎなかった。確認した遺構・遺物は、ほぼ全てが調査区東側で検出されていることから、ここを中心に前期の集落が展開していたと考えられる。また、調査区は加勢蛇川へ向かって緩やかに傾斜する地形となっていることから、調査区外にもこの集落が続く可能性が高い。

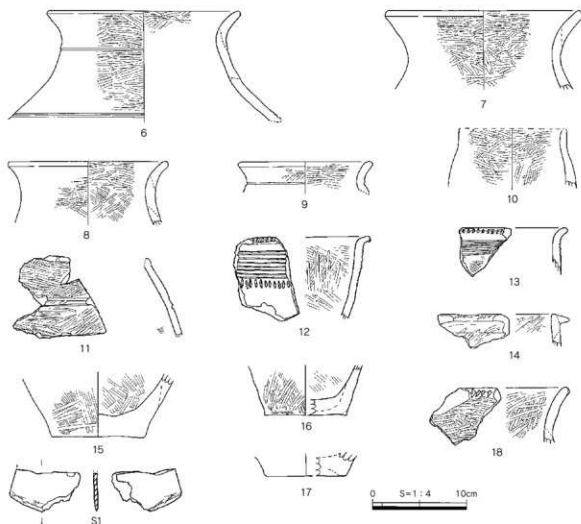
確認した遺構は前期の竪穴住居3棟、掘立柱建物1棟、たわみ状遺構2基である。このうち竪穴住居3は焼失住居の可能性があり、床面からは片面に被熱した痕跡のある打製石斧S8や炭化材が出土している。なお、この炭化材については、年代測定や樹種同定を行っている（第5章参照）。

遺物は、前期のものが大半を占めている。このうち、口縁部が「く」の字状に折れ曲がる如意状口縁をもつ甕と、逆「L」字状の口縁をもつ甕が出土している。これらの胎土に違いが認められるのを調べるために胎土分析を行った（第5章参照）。

ところで、今回調査した結果、前期の遺構は黒ボク中に掘り込み面があるものと考えられる。また、遺構の掘り方は、浅いもので黒ボク中、柱穴を除く深いもので漸移層までとなっていた。このため、漸移層上面で遺構検出した場合、その大半が消失しているものと思われる。今回の調査では漸移層上面で遺構検出を行ったため、確認できなかった遺構が多く存在するといえよう。（玉木）



第9図 竪穴住居1



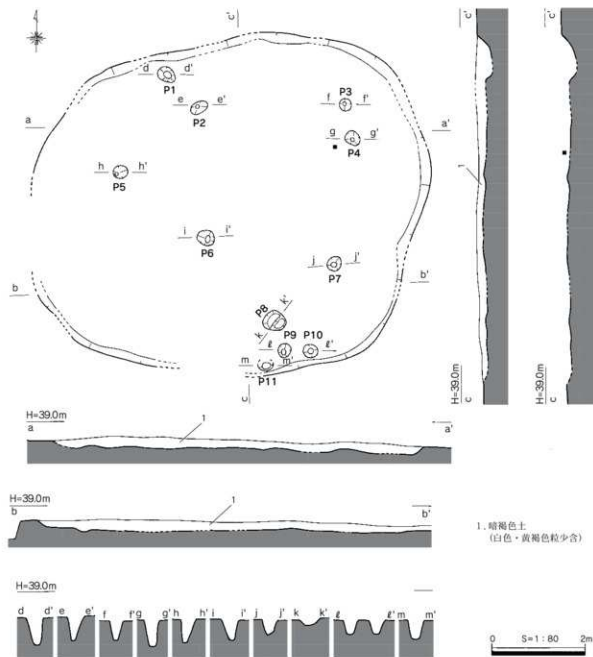
第10図 竪穴住居1出土遺物

2. 竪穴住居

竪穴住居1 (第9・10図、PL.2・13)

調査区東側のD2グリッド中に位置しており、竪穴住居2の北側に隣接する。遺構の検出面は、黒ボク下面から漸移層上面である。本遺構の周辺において、遺物がまとめて出土したことから、精査を重点的に行ったところ、不明瞭ながらも平面形を捉えることができた。また、平面形を明確に捉えるためトレンチを複数入れ、断面を明確にすることとした。しかし、遺構の埋土が黒ボクに起因する黒褐色土であり、検出面である黒ボクとは砂粒の含有量の違いしか認められなかったことから、平面形を明確にすることができなかった。

遺構の形状・規模は不明瞭なものであったが、確認できた状況から、長軸6.4m、短軸6m、床面積30.3㎡あまりの不整形な円形を呈するものと推測できる。検出面からの深さは24cm、床面の標高は38.4mであり、掘り込みは漸移層までであった。床面はほぼ平坦であったが、硬化した部分は認められなかった。ここからはピットを23基確認した。これらのピットのうち、柱穴と考えられるものはP1～3の3基である。これらは径16～42cm、深さ42～50cmを測り、平面形が楕円形を呈する。

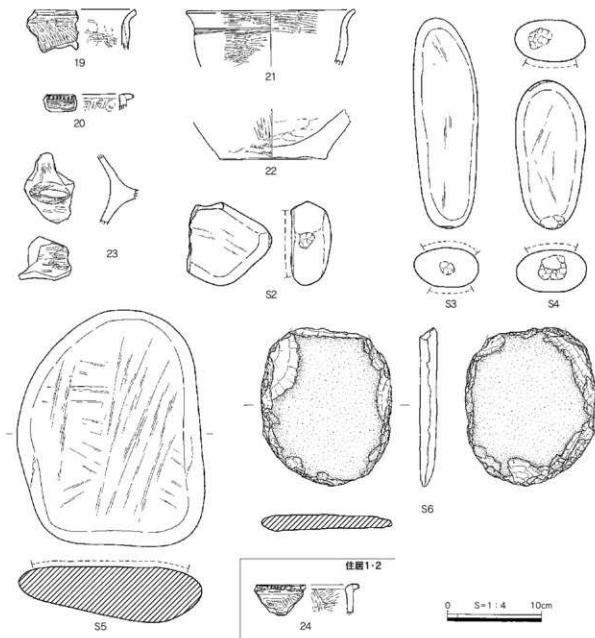


第11図 竪穴住居2

遺物は弥生土器や石器が出土している。このうち11は胴部に削り出し突帯のつく壺であり、S1は磨製石包丁である。時期は清水編年のI-2～3期、弥生時代前期後半頃と考えられる。

竪穴住居2（第11・12図、PL.2・14）

調査区東側のE2グリッド中に位置する。竪穴住居1の南側に隣接し、竪穴住居3や掘立柱建物1と重複する。切り合い関係から、最も古いものが本遺構であり、以後、掘立柱建物2、竪穴住居3の順に建てられたと考えられる。遺構の検出は黒ボク下面から漸移層上面で行った。竪穴住居1と同様、遺構の埋土が黒褐色土であり、検出面と同質であるため、遺構の全体像を捉えることが困難であった。遺構の形状・規模は不明瞭なものであったが、確認できた状況から判断すると、長軸8.8m、短軸7.3



第12図 竪穴住居1・2出土遺物

m、床面積46.2㎡あまりの不整形な楕円形を呈するものと推測される。検出面からの深さは20cmを測り、床面の標高は38.5m、掘り込みは漸移層までとなる。床面は若干凹凸があるものの比較的平坦であるが、硬化した部分は認められなかった。床面からはピットを11基確認したが、柱穴と考えられるものは確認できなかった。このため本遺構はたわみの可能性も考えられる。

遺物は弥生土器や石器が出土した。このうち24は遺構検出中に出土したものであり、竪穴住居1のどちらに帰属するのかわからない。時期は清水編年のⅠ-3期、弥生時代前期後葉と考えられる。

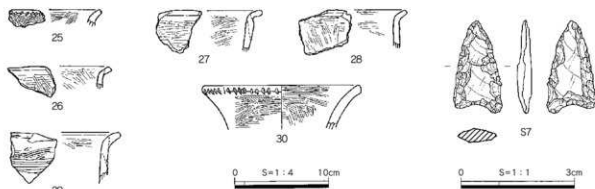
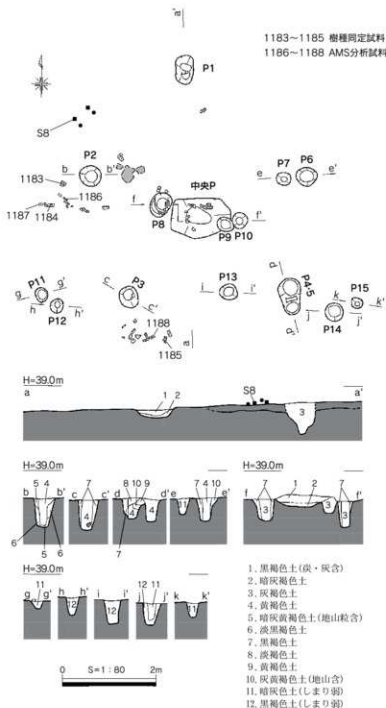
竪穴住居3 (第13・14図、PL.2・14・15)

調査区東側のE2グリッド中に位置しており、竪穴住居2と重複し、中世の墓3によって切られている。ここは、漸移層付近まで重機で掘り下げた場所であり、埋土の大半が消失していた。検出時に

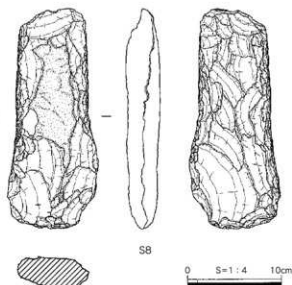
はずでに床面付近の炭が散っていた。遺構の広がりはある程度把握できたものの、平面形を明確に捉えることはできなかった。

遺構の形状・規模は不明である。床面は標高38.6mであり、竪穴住居2の上面に位置している。床面からはピット15基を確認した。このうち柱穴と考えられるものはP1～6・8・10の8基であり、これらは径32～64cm、深さ44～68cm、平面形が円形ないしは楕円形を呈するものである。これらの柱穴のうち、主柱穴と考えられるものは、P1～3・5・6の5基であり、その柱間隔は270～348cmを測る。なお、P2・3・5・6・8・10では径16～24cmほどの柱痕跡を確認した。さらに、P4の上面には淡褐色土が堆積しており、柱穴を掘り直した時に埋められたものと考えられる。

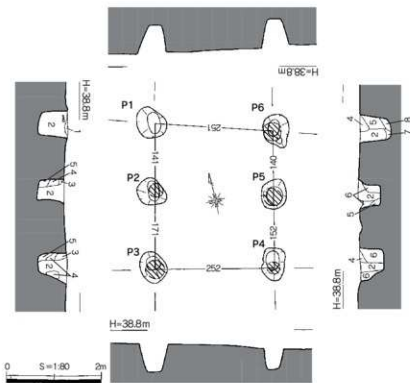
また、この住居の中心にはP8とP10に挟まれた中央ピットがある。規模は長軸128cm、短軸83cm、深さ16cmを測り、平面形は不整形な方形を呈する。埋土中からは炭・灰が多量に出土した。



第13図 竪穴住居3・出土遺物



第14図 竪穴住居3 出土遺物



1. 黒褐色土(黄褐色ブロック少含)
2. 暗褐色土(しまり弱, 黄褐色ブロック少含)
3. 暗褐色土(しまり強, 黄褐色ブロック少含)
4. 暗褐色土(しまり強, 黄褐色ブロック多含)
5. 暗褐色土(しまり弱, 黄褐色ブロック僅含)
6. 暗褐色土(しまり弱)
7. 黄褐色土(しまり弱, 1層少含)
8. 黄褐色土(しまり弱)

第15図 掘立柱建物1・出土遺物

床面からは、焼土とともに炭化材が検出された。炭化材が中央ピットに向かい放射状に倒れていたため、焼失住居の可能性が考えられる。これらの樹種はニガキ、クスノキ、ヤマグワであった(第5章参照)。遺物は25~30、S7・8が出土した。S8は被熱の痕跡があり、廃絶時のものと考えられる。時期は年代測定の結果、2250±30~2440±30BPであった(第5章参照)。(玉木)

3. 掘立柱建物

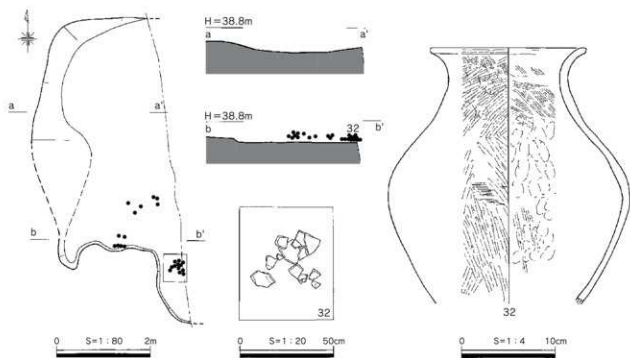
掘立柱建物1(第15図、PL.2)

E2グリッドの北側に位置する。竪穴住居2を切る。黒ボクの下面の竪穴住居2の埋土上面で検出した。

建物の形状は長方形で桁行2間、梁間1間である。規模は桁行が約3.1m、梁間が約2.5mである。主軸は、N-10°-Eをとる。柱穴の掘り方は、検出面での平面形は円形を呈し、断面形は「U」字状である。P2~6に関しては柱痕が残っており、土層断面図中の埋土2が柱痕に相当する。土層断面の観察から柱痕の直径は15~25cmである。

P1から覆の胴部31、P4からは黒曜石製のスクレイパーS9が出土している。清水編年のI-3期に相当する。

遺構の時期は出土遺物や竪穴住居2との切り合い関係から弥生時代前期後葉と考える。(浅田康行)



第16図 たわみ 2・出土遺物

4. たわみ

たわみ 2 (第16図, PL.15)

D 2～E 2 グリッドにあり、竪穴住居 1 の東側に位置する。漸移層上面で検出した。検出規模は長軸約 6 m、短軸約 3 m で、検出面から底面までの深さは 10 cm である。埋土は暗灰褐色土の単層で、弥生土器片を包含している。当初は住居として扱っていたが、明瞭な掘り込みが見られないこと、平面形がいびつであることから、くぼみ状の部分に遺物が堆積したものと考え、たわみ状の遺構とした。

32 は壺である。緩やかに「く」字状に外反する口縁部を持つ。内外面に赤彩の痕跡が残る。これは清水編年の 1-2 期のものである。

本遺構の時期は出土遺物から弥生時代前期中葉である。

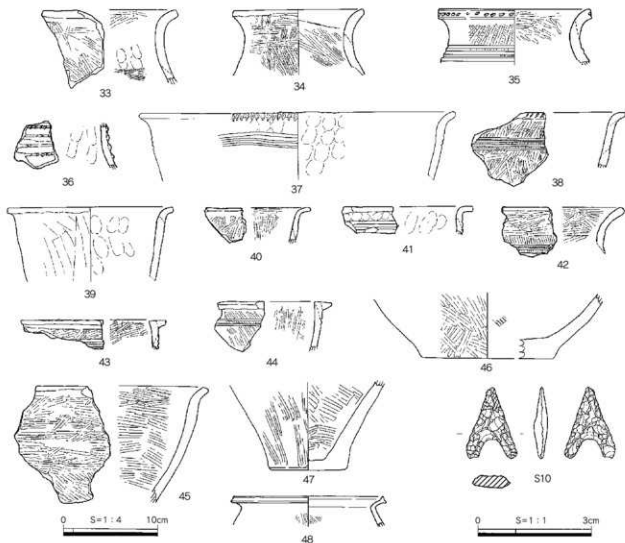
たわみ 3 (第17図)

F 1 グリッドの調査地東壁際に位置する。漸移層上面で検出した。規模は長軸約 4 m、短軸約 1 m である。検出面から底面までの深さは 10 cm である。埋土は黒褐色土の単層である。たわみ 2 と同様、当初は住居として扱っていたが明瞭な掘り込みが見られないこと、平面形がいびつであることから、たわみ状の遺構とした。

遺物がないため、詳細な時期については不明であるが、たわみ 2 と同じ面で検出していることから、弥生時代前期頃が想定される。(浅田)



第17図 たわみ 3



第18図 弥生時代遺構外出土遺物

5. 遺構に伴わない遺物 (第18図、PL.14・15)

33～36は壺である。これらのうち33～35は緩やかに外反する口縁部を持つものである。33は外傾接合からなり、外面に条痕を施した後ヘラミガキを施す。内面は条痕を施す。内外面ともに赤彩の痕跡がわずかに残る。34は外傾接合からなり、外面にはハケメ後ヘラミガキ、内面にはナデ後ハケメを施す。35は口唇部に刺突文を施し、頸部には4条以上の沈線を施す。36は壺の胴部と思われ、外面に4条以上の刻目貼付突帯を施す。37～44は甕の口縁部である。37は口唇部に刻目を施す。38は口唇部に刻目を、胴部には4条の沈線を施す。40は外傾接合からなり、外面にハケメ後ヘラミガキを施し、内面にはヘラミガキを施す。41は、口縁部下には2条以上の沈線を施す。43・44は逆「L」字状の口縁部を持つものである。胴部には2条以上の沈線を施す。43には外面に赤彩痕が残る。45は鉢である。外面にヘラミガキ、内面にはヘラミガキおよび条痕を施す。内面に赤彩痕が残る。46は壺の底部、47は甕の底部である。これらはおおむね清水編年のⅠ～2～3期のものである。48は甕の口縁部である。清水編年のⅢ～2期のものである。S10は黒曜石製の石鏃であり、最大長19mm、最大幅13.5mm、重さ0.9gを測る。
(浅田)

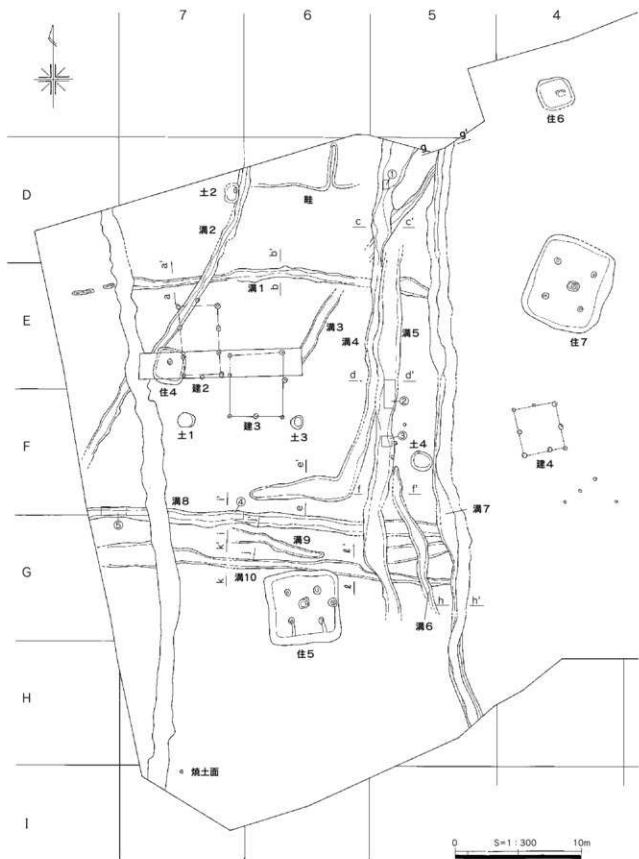
第4節 古墳時代の遺構・遺物

1. 概要

古墳時代の遺構・遺物は、旧東伯町教育委員会による確認調査の際に竪穴住居4や遺物包含層が確

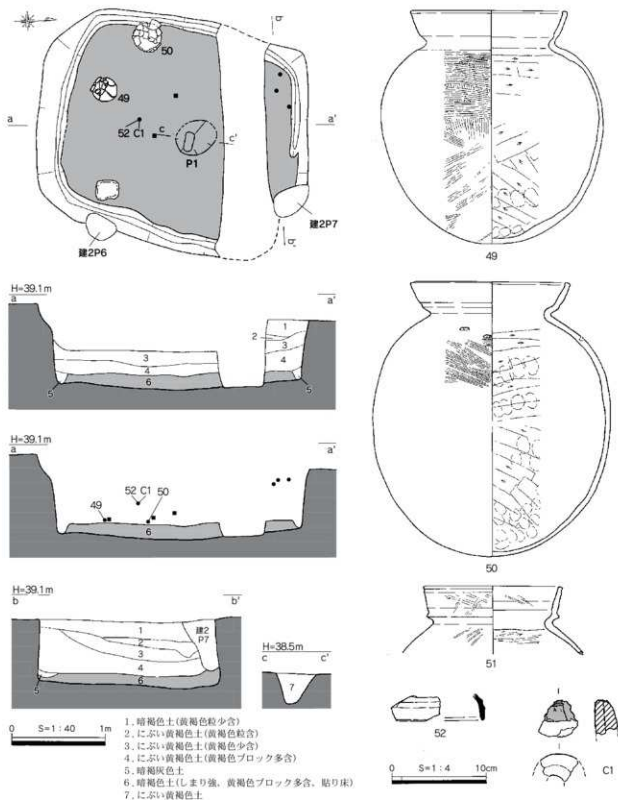


第19図 古墳時代遺構配置図



第20図 古墳時代主要遺構配置図

認められたことから、調査前においてその存在が明らかであった。本来の遺構の検出面は、古代～中世の耕作土を除去した黒ボク上面であるが、ここでは遺構の確認が困難であるとの判断がなされたため、検出の比較的容易な漸移層上面まで重機で掘り下げてから調査を行うこととなった。しかし、重機による表土剥ぎも終盤、全体の2/3が終了した時点で黒ボク上面から溝2の遺物がまとも出土したため、当初の調査計画を変更してここまですを残し、調査を行うこととなった。



第21図 竪穴住居4・出土遺物

確認した遺構は、前期～後期にかけての竪穴住居6棟、掘立柱建物4棟、土坑9基、方形土坑5基、硬化面1面、焼土面1面、溝11条、畦畔状遺構1面である。これらは調査区全体に分布しており、また、調査区の南側に接した民有地からも土師器や須恵器が出土することから、この周辺一帯の微高地には前期～後期にかけての集落が営まれていたと想定できる。なお、調査区東側で遺構が希薄になっているのは、後世の削平や表土剥ぎによって遺構が消滅したためと思われる。(玉木)

2. 竪穴住居

竪穴住居4(第21図、PL.3・16)

調査区北西側のE7グリッドに位置する。トレンチが住居の中心部分にかかっていたため依存状態は良くなかった。東側に位置する掘立柱建物2に切られていることから、住居4が先行する。

遺構の規模は長軸2.5m、短軸2.1m、床面積4.7㎡を測り、平面形は隅丸方形を呈する。検出面からの深さは65cmを測り、床面の標高は38.1mであった。床面はソフトロームまで掘り込まれていた。床面から黄褐色と暗褐色の混合土で固くしまった貼り床がほぼ全面にわたって検出されており、この厚さは8cm程度であった。また、壁に沿って幅8～14cm、深さ約12cmの壁溝がほぼ全周していた。

床面には主柱穴に相当するものを確認することはできなかった。貼り床除去後に、住居のほぼ中央から長軸44cm、短軸36cm、深さ約32cmを測るピットを確認したが、本住居にともなうものかどうかは不明である。また、住居の周辺においても柱穴の検出をこころみたが確認できなかった。

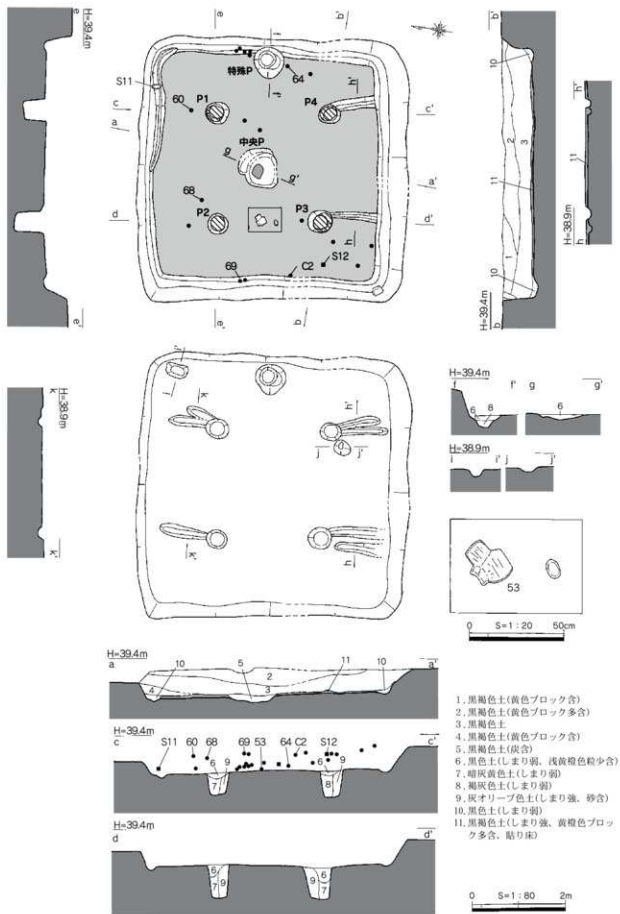
埋土は、黒ボクに起因する暗褐色土やにぶい黄褐色土であり、これらはレンズ状の堆積状況を示している。このことから、自然堆積によって埋没したものと考えられる。

出土遺物は土師器や須恵器、羽口などがあり、49～52、C1を図示した。このうち49・50は床面直上から、51・52、C1は埋土中からの出土である。49・50はほぼ完形になる甕であり、「く」の字に折れ曲がる口縁部をもち、肩部に刺突文を施すものである。51は複合口縁の甕、52は須恵器の坏蓋である。49・50が天神川IV～V期の特徴を示すことから、時期は古墳時代中期前葉に相当すると思われる。(前島ちか)

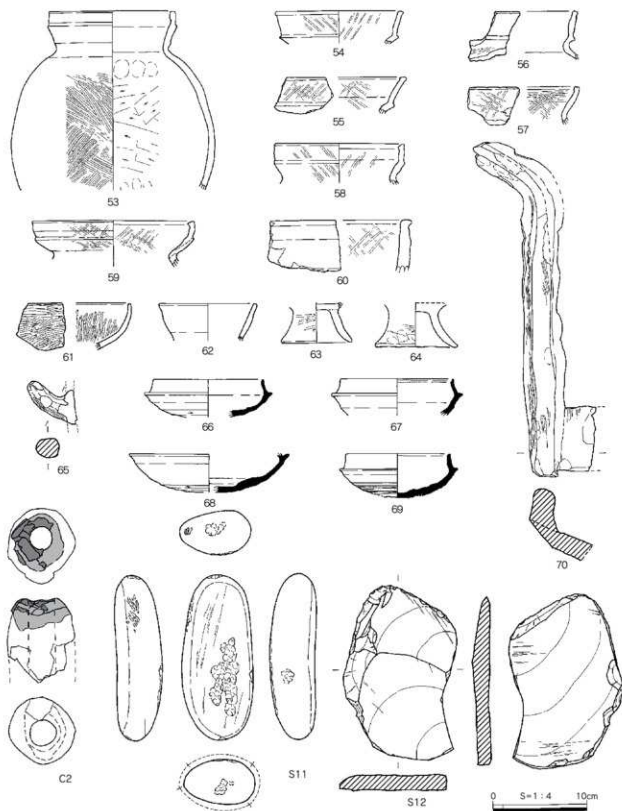
竪穴住居5(第22・23図、PL.3・16・17)

調査区南側のG6グリッド中に位置し、北東隅が溝10と接する。遺構の検出は畠1の耕作土を除去した黒ボク上面で行った。埋土は黒ボクに起因する黒褐色土であるが、地山ブロックを含んでいたため遺構の検出は容易であった。

遺構の規模は、長軸5.7m、短軸5.5m、床面積21.4㎡を測り、平面形は方形を呈している。主軸はN-5°-Wである。検出面からの深さは60cm、床面の標高は38.6m、掘り込みはソフトロームまでである。床面には黒ボクと地山掘削土による貼り床が全面に認められ、その周囲には幅24cm、深さ12cmほどの壁溝がめぐる。主柱穴は4基確認されており、いずれも径40cmほどの柱痕跡が認められる。これらの柱間距離は2.4mほどである。柱穴の掘り方は径44～50cmほどの楕円形を呈しており、深さ48～62cmを測る。P3・4からは壁溝に接続する幅20cm、深さ10cmほどの溝がのびている。床面中央には長軸82cm、短軸62cm、深さ24cmほどの不整形な中央ピットが認められ、この底面は被熱により赤色化していた。床面東側では壁溝を切るような形で掘り込まれた径66cm、深さ10cmほどの円形を呈し



第22図 竪穴住居5



第23図 竪穴住居5 出土遺物

た特殊ビットを検出した。貼り床除去後には、柱穴からのびる幅20cm、深さ10cmほどの溝4条、ビット2基を確認した。

遺物は、53～70、S11・12、C2などが出土した。53、S11は床面付近から、他は埋土の上層から

中層にかけての出土である。時期は、53が天神川X期、八橋IV期の特徴を示すことから、古墳時代後期前葉と考えられる。

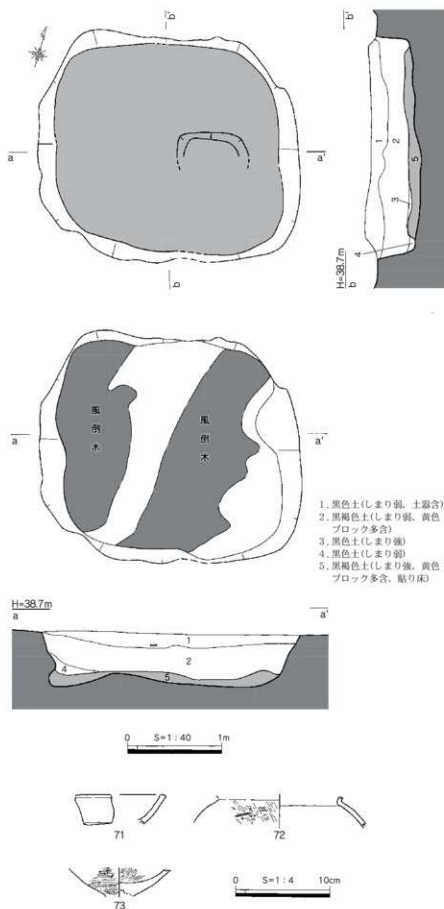
竪穴住居 6

(第24図, PL. 3)

調査区北側のC4グリッド、竪穴住居7の北側約10mに位置している。上面は古代～中世の耕作痕2によって切られていた。遺構の検出は漸移層上面で行った。

遺構の形状・規模は、長軸2.8m、短軸2.4m、床面積4.7㎡あまりの隅丸方形を呈しており、主軸はN-13°-Wである。床面までの深さは40cm、床面の標高は38m、掘り込みはソフトロームまでである。床面には黒ボクと地山掘削土による厚さ12cmほどの貼り床が全面にわたって認められた。また、南側では壁に沿うようなかたちで幅20cm、深さ6cmほどの溝を検出し、中央のやや東側においては一辺75cm、深さ4cmほどのピットを確認した。さらに貼り床を除去すると、底面には風倒木の痕跡が認められた。

遺物は埋土中から71～73が出土した。71・72は



第24図 竪穴住居6・出土遺物

襲である。72の肩部には櫛状工具による刺突文が施されている。73は高坏の坏部である。これらの遺物は遺存状況が悪いため不明瞭であるが、天神川IV～V期の特徴を示すものと考えられる。遺構の時期は、遺物が床面から浮いた状況で出土したため明確にすることができないが、前期後半頃には廃絶していたものと考えられる。
(玉木)

竪穴住居7（第25～27図、PL.3・17～20）

調査区中央やや北東側のD4・E4グリッドに位置する。遺構検出は黒ボク上面で行った。

遺構の規模は、長軸6.4m、短軸5.6m、床面積33.9㎡を測る。形状は隅丸方形を呈し、主軸方向はN-22°-Eである。検出面からの深さは65cmを測り、床面の標高は37.8mであった。床面はソフトローム層まで掘り込まれていた。また、壁に沿って、幅15～18cm、深さ約8cmの壁溝がほぼ全周していた。

床面からは、P1～4の4基の主柱穴を確認した。柱穴の規模は径34～44cmを測り、平面形は円形を呈する。床面からの深さは64cmを測り、掘り方はソフトロームまで掘り込まれていた。このうちP1・3からは径23cmの柱痕跡を確認した。また、P3の埋土の堆積状況から、柱を据えた後に2回に分けて埋め戻されたことが確認された。P1～4の柱間距離は、2.9～3.0mであった。

また同じく床面から、幅0.8～1.4cm、深さ2cmほどの溝を確認した。このうちの1条はP4から北東方向に向かって湾曲してのびており、もう1条は南北方向に直線的にのびていた。

さらに、住居のほぼ中央からは中央ピットを検出した。中央ピットは二段掘りとなっており、上段は長軸100cm、短軸72cm、深さ10cmを測る長方形、下段は径40cm、深さ47cmを測る円形を呈するものであった。この埋土は2層にわかれ、上層は土器を多く含んだ黒褐色土、下層は地山ブロックを多く含む暗褐色土であった。

そのほかにはP5～9の5基のピットを確認した。P5～9は、規模が径22～58cm、深さ12～20cmを測り、平面形は円形ないしは楕円形を呈するものであった。ピットの深さは柱穴に比べて浅く、また、その配置状況にも規則性が認められないことから、性格については不明である。

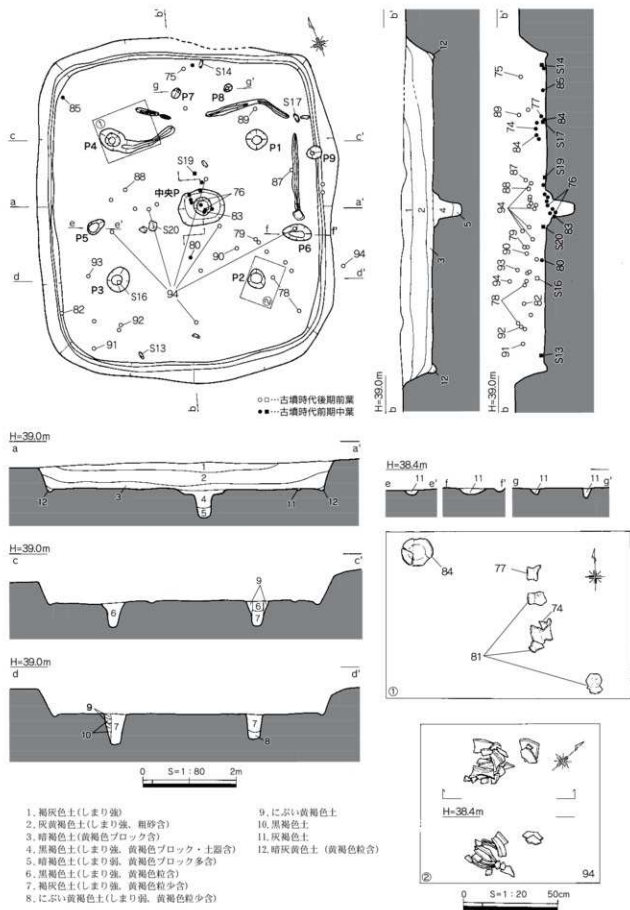
埋土は黒ボクに起因するものであり、3層に分層することができた。これらの層はレンズ状の堆積を示すことから、自然堆積によって埋没したものと考えられる。また、埋土の上層からは古墳時代後期の遺物が、下層では古墳時代前期の遺物が出土しており、住居廃絶後、後期の段階まで窪地であったことがうかがえる。

遺物は、第25図の断面図で示したように、埋土下層から出土したものと上層から出土したものの大きく2つに分かれる。先にも述べたとおり、下層が古墳時代前期の遺物であり、上層が古墳時代後期の遺物である。土師器や須恵器、石器が出土しており、このうち74～94、S13～20を図示した。これらは上層と下層で時期が異なるため、下層、上層の順に述べていく。

下層からは74・76・77・80・81・83～85、S13～15・17・19が出土した。このうち、床面直上から出土したものは76・83・84、S13・17・19・20である。76は複合口縁の甕であり、床面から中央ピット内の埋土上層にかけて出土した。口縁部下端にはぶく突出し、口縁部端部に平坦面をもつ。肩部外面



写真図版3 竪穴住居7 遺物出土状況

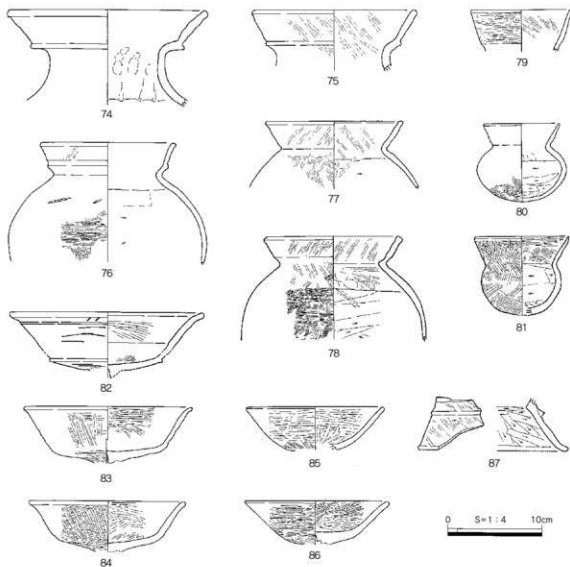


第25図 竪穴住居7

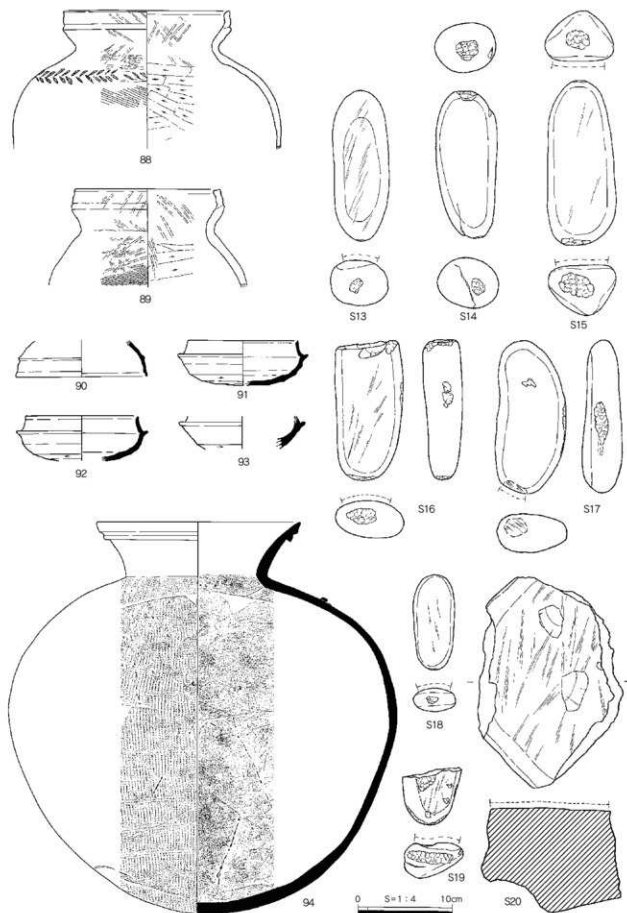
に刺突文を施文し、胴部外面には煤が付着する。83・84は高杯の坏部である。83は口唇部を丸くおさめるものであり、外面には赤色顔料を塗布した痕跡が認められる。また、内外面には煤が付着している。84はP4付近において、口縁部が上を向いた状態で出土した。口唇部は83と同様、丸くおさめる。下層の遺物は天神川Ⅲ期の特徴を示しており、古墳時代前期中葉のものと思われる。

上層からは、75・78・79・82・87～94、S16が出土した。94は須恵器の甕であり、ほぼ完形となるものである。住居の南東側において折り重なり合うようにして出土した。なお、この甕の破片の一部は溝5からも出土している。頭部はゆるやかに外反しており、口縁部は下方へ屈曲する。口縁部にはヨコナデを施し、胴部外面には平行タタキ、内面には同心円状の当て具痕が残る。口縁部から肩部にかけて自然釉がかかる。上層の遺物は、天神川X期、八橋Ⅳ・Ⅴ期の特徴を示すことから、古墳時代後期前葉のものと思われる。

遺構の時期であるが、下層から出土した遺物が古墳時代前期中葉であることから、前期中葉には廃絶されたものと考えられる。また、上層から出土した遺物が後期前葉のものであることから、前期中葉に住居としての機能を失った後、なかば窪地状に埋没した後期の段階で土器が流入したと考えられ



第26図 竪穴住居7出土遺物①



第27図 竪穴住居7出土遺物②

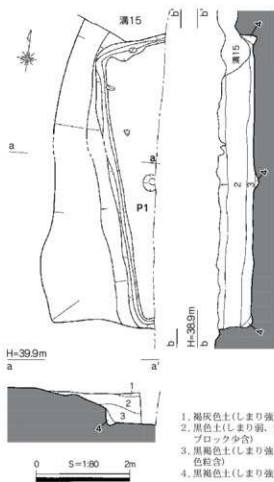
る。なお、上層から出土した須恵器の甕94の破片が、住居の西側に位置する溝5からも出土しており、溝5が機能していた段階までここが窪地であったものといえよう。(前島)

竪穴住居8 (第28図、PL.3・19)

調査区東側のD2グリッド、竪穴住居6の東側約20mに位置している。遺構の北側は中世の溝15によって切られており、東側は調査区外へのびている。また、住居の西側には不整形な段が幅6mの範囲にわたり検出されている。

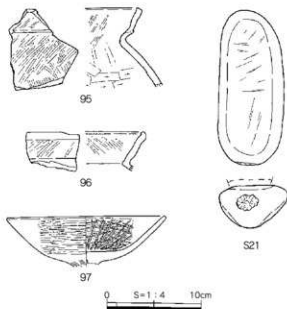
遺構の形状・規模はその大部分が調査区外へとのびており、全体像は不明瞭である。確認できた状況から判断すると、1辺6.1mほどの方形を呈するものと推定される。床面積の復元値は37m²ほどであり、主軸はN-20°-Wと考えられる。検出面からの深さは70cmを測り、床面の標高は37.8m、掘り込みはソフトロームまでとなっている。床面に貼り床は貼られていないが、比較的硬化していた。柱穴は確認されておらず、径33cm、深さ10cmほどのP1を確認したのみである。また、床面の周囲には幅20cm、深さ10cmほどの壁溝がめぐる。

出土遺物には土師器の甕95・96、高坏97、敲石S21などが出土している。このうち、S21は床面からの出土である。これらの遺物の時期は天神川IV～V期と考えられるため、この住居の埋没時期は古墳時代前期後葉以前と考えられる。(玉木)



竪穴住居9 (第29図、PL.3)

H1グリッドの調査地南東隅に位置する。漸移層上面で検出した。調査区境に位置しているため、検出できたのは遺構の北西隅部分だけである。遺構の主体部は調査区外へ続いている。検出した規模は南北約1.6m、東西約0.8mである。平面形は、



第28図 竪穴住居8・出土遺物

検出した部分から隅丸方形を呈するものと考えられる。床面には地山層の黄褐色土を多く含む黒褐色土で貼り床が施されていた。検出面から床面までの深さは最大72cmを測り、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。検出した範囲においては、床面上に壁溝および、ピットを確認することはできなかった。

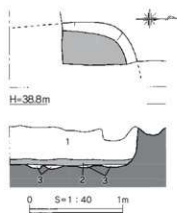
遺物が皆無のため詳細な時期については不明だが、他の竪穴住居と同じ検出状況であることから、古墳時代と考えられる。(浅田)

3. 掘立柱建物

掘立柱建物 2 (第30図、PL. 4)

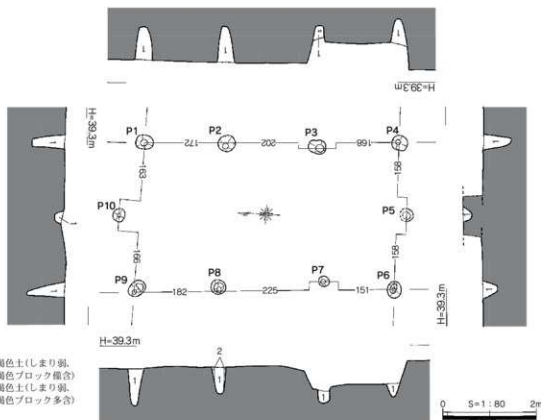
調査区西側のE7グリッド中に位置しており、竪穴住居4と溝2を切っている。遺構の検出は黒ボク上面で行った。遺構の埋土が黒ボクに比べて若干明るく、また、柱の裏込め土に地山ブロックが含まれているため、検出は比較的容易であった。

桁行3間、梁間2間の南北に長い掘立柱建物である。棟方向はほぼ南北を示すが、 $N-4^{\circ}-W$ と若干西に振れている。規模は桁行5.6m、梁間3.3m、床面積18.5㎡を測る。柱穴の平面形は円形を呈しており、規模は径22~40cm、検出面からの深さ20~110cmを測る。これらの柱穴のうち、P8では径20cmほどの柱痕跡を確認している。桁行の柱通りはほぼ一直線であるが、梁間はやや雑然としてお



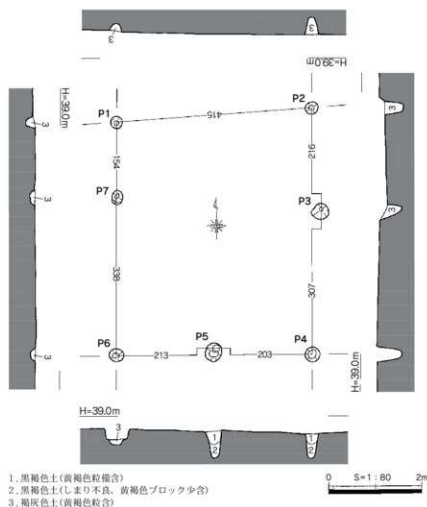
1. 黒褐色土(しまり弱、黄白色粒雑含)
2. 黒褐色土(しまり強、黄褐色ブロック多含、貼り床)
3. 黒褐色土(しまり弱、黄白色粒含)

第29図 竪穴住居 9



1. 黒褐色土(しまり弱、黄褐色ブロック雑含)
2. 黒褐色土(しまり弱、黄褐色ブロック多含)

第30図 掘立柱建物 2



第31図 掘立柱建物3

の掘立柱建物と思われる。規模は桁行3.2m、梁間4.1m、面積21.4㎡を測る。棟方向は $N-0^{\circ}-E$ で南北方向を示し、掘立柱建物2と平行している。平面形は南北に長い方形を呈しているが、ひずみが認められる。柱穴の掘り方は円形を呈し、径34cm程度を測る。検出面からの深さは、遺存状態の良い東側で48～58cmを測り、ソフトロームまで掘り込まれていた。柱痕跡は確認されなかった。

出土遺物はなく、時期を特定することはできないが、掘立柱建物2と検出状況や棟方向、埋土の堆積状況が同じであることから、ほぼ同時期のものと考えられる。(前島)

掘立柱建物4 (第32図、PL.4)

調査区中央のF4グリッド中、竪穴住居7の北側約6mに位置する。検出は漸移層上面で行った。

桁行2間、梁間2間の方形を呈する掘立柱建物である。棟方向は $N-11^{\circ}-W$ と西に振れている。規模は桁行3.7m、梁間3.4m、床面積12.6㎡を測る。柱穴の平面形は円形を呈しており、規模は径26～44cmを測る。検出面からの深さは40～68cmであり、掘り込みはソフトロームまでとなる。

時期は、遺物が出土しておらず不明瞭であるが、古墳時代のものと考えられる。(玉木)

掘立柱建物5 (第33図、PL.4)

G1グリッドの西側に位置する。方形土坑2・4を切る。黒ボク下面から漸移層上面で検出した。

り、P5・10が外側へ張り出している。また、このP5・10は、他のもの比べて掘り込みが非常に浅いことから、別の機能を有していた可能性が考えられる。

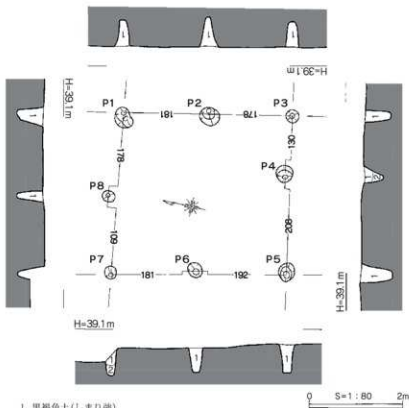
埋土中からは遺物が出土しておらず、時期を特定することができなかった。しかし、竪穴住居4、溝2との切り合い関係から、古墳時代中期以降のものと考えられる。(玉木)

掘立柱建物3 (第31図、PL.4)

調査区北西側のE7グリッドに位置する。検出は黒ボク上面で行った。本遺構の北側と西側は、トレンチにかかるため遺存状態は良くない。桁行2間、梁間2間

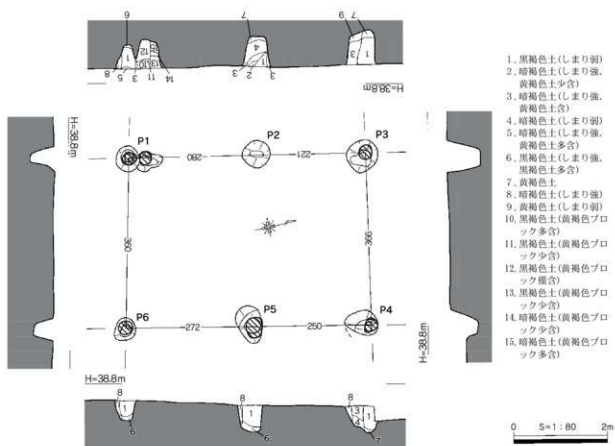
桁行2間、梁間1間の掘立柱建物である。平面形は長方形で、規模は桁行が約5m、梁行が約3.6mである。主軸は座標北に対し $N-13^{\circ}-E$ に振る。柱穴の掘り方の平面形は円形を呈し、断面形は「U」字状である。P1・3～6に関しては柱痕跡が残っており、土層断面図中の埋土1が柱痕跡に相当する。土層断面の観察から、柱の直径は15～25cmである。埋土8は暗褐色土でしまりがよく、堆積の様子から裏込め土と思われる。

遺物は出土していない。そのため本遺構の時期を特定す



1. 黒褐色土(しまり強)
2. 黒褐色土(浅黄色ブロック多含)

第32図 掘立柱建物4



1. 黒褐色土(しまり弱)
2. 暗褐色土(しまり強、黄褐色土少含)
3. 暗褐色土(しまり強、黄褐色土含)
4. 暗褐色土(しまり弱)
5. 暗褐色土(しまり強、黄褐色土多含)
6. 黒褐色土(しまり強、黒褐色土多含)
7. 黄褐色土
8. 暗褐色土(しまり強)
9. 黄褐色土(しまり弱)
10. 黒褐色土(黄褐色ブロック多含)
11. 黒褐色土(黄褐色ブロック少含)
12. 黒褐色土(黄褐色ブロック多含)
13. 黒褐色土(黄褐色ブロック少含)
14. 暗褐色土(黄褐色ブロック少含)
15. 暗褐色土(黄褐色ブロック多含)

第33図 掘立柱建物5

ることとはできないが、検出面が堅穴住居8と同じ状況であることや方形土坑との切り合い関係から、古墳時代前期以降が想定される。(浅田)

4. 土坑

土坑1 (第34図、PL.4)

調査区北西側のF7グリッドに位置する。平面形は不整形な楕円形を呈する。規模は長軸140cm、短軸69cm、深さは23cmを測る。底面は平坦である。壁面は、東側では垂直に立ち上がるが、北西側ではわずかに掘り込まれた袋状を呈する。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。

土坑2 (第34図、PL.4)

調査区北側のD7グリッドに位置する。土坑の中央部分にトレンチがかかっていたため遺存状態は良くない。平面形は遺存状況から隅丸長方形を呈すると思われる。規模は長軸153cm、短軸約114cm、検出面からの深さは56~70cmを測る。底面には凹凸があり、またここから深さ5cm程度の浅いピットを検出した。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。

土坑3 (第34図、PL.5)

調査区北西側のF6グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸104cm、短軸89cm、検出面からの深さ54cmを測る。底面は平坦であり、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。

土坑4 (第34図、PL.5)

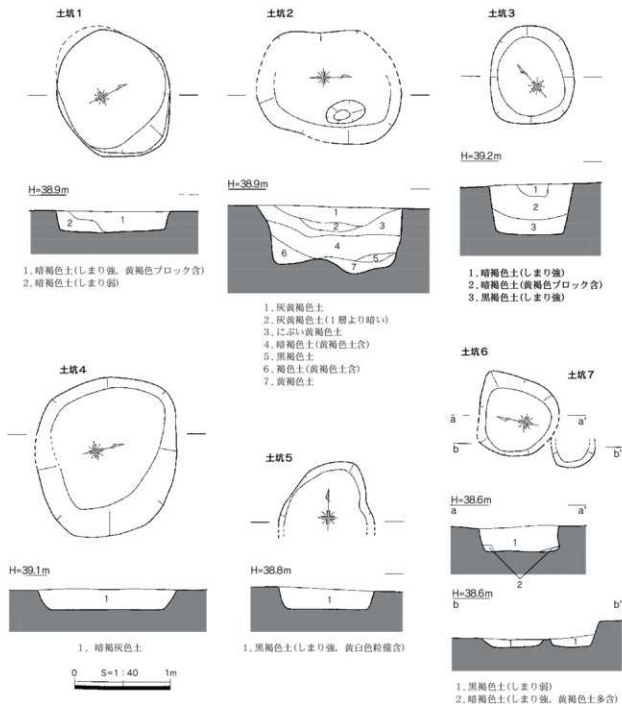
調査区中央のF5グリッドに位置する。平面形は不整形な楕円形を呈する。規模は長軸164cm、短軸152cm、検出面からの深さ22cmを測る。底面は平坦であり、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。

土坑5 (第34図、PL.5)

調査区南東側のH2グリッドに位置する。遺構の南側はサブトレンチにより消失している。残存状況から、平面形は円形を呈すると思われる。規模は幅110cm、深さ22cmを測る。底面は平坦であり、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。

土坑6・7 (第34図、PL.5)

調査区南東側のG2グリッドに位置する。両土坑の西側半分は、試掘トレンチによる削平をうけたため、遺構の底面が残る程度で遺存状態は良くない。また、遺構が切りあう部分にはトレンチがかかるため、両者の新旧関係は不明である。土坑6は、平面形は不整形な円形を呈する。底面は平坦であり、壁面は垂直に立ち上がる。土坑7は、土坑6の南西側に位置するもので、遺存する壁面から平面形は円形を呈すると思われる。底面は平坦であり、壁面は垂直に立ち上がる。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。(前島)



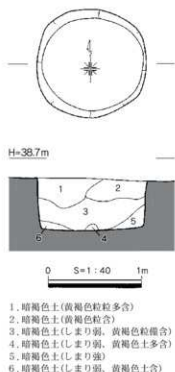
第34図 土坑1～7

土坑8 (第35図, PL. 5)

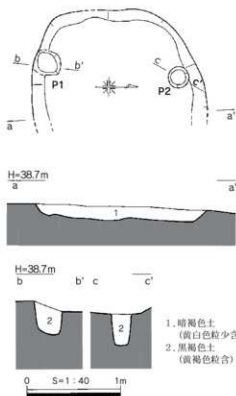
G1グリッドの北西側に位置する。黒ボク下面から漸移層上面で検出した。方形土坑2を切る。平面形は円形を呈する。規模は径116cm、深さは56cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面にはピットは確認できなかった。埋土は主に暗褐色土で、断面の観察から自然堆積したものと思われる。

遺物は弥生土器の甕が出土している。98は逆「L」字状の口縁部を持つもので、口唇部に刻目を施す。清水編年のI-3期のものである。これは埋没時に混入したものと思われる。

時期は竪穴住居9の検出状況および方形土坑との切り合い関係から古墳時代のものと考えられる。



第35図 土坑8・出土遺物



第36図 土坑9

性格は不明である。

土坑9 (第36図、PL.5)

G1グリッドに位置する。黒ボク下面から漸移層上面で検出した。調査区境であるため、西側部分のみの検出であり、東側は調査区外へと続いている。規模は長軸1.8m、短軸1.2mを測り、平面形は方形を呈する。検出面からの深さは最大14cmである。壁面は外側に傾斜して立ち上がる。南北の壁面直下にピットを検出した。径20~30cm、深さは30~34cmである。埋土は黒褐色の単層で、柱痕跡は認められなかった。土坑に関連するものと考えられるが、その性格は不明である。

遺物は出土していない。時期は、土坑8と同じ検出状況であることから、古墳時代のもと考えられる。(浅田)

5. 方形土坑

方形土坑1~5 (第37図、PL.6)

C3、G1~2グリッドに位置する。方形土坑5については、調査区北側の壁面での断面のみの検出である。平面形は方形を呈し、規模は一辺が1.3~1.6mである。底面はほぼ平坦で、検出面から底面までの深さは6~30cmである。それぞれの土坑から底面上にピットが1~2基検出された。土坑に関連するものと思われるが、性格は不明である。全ての土坑が軸をほぼ北にそろえるようにつくられており、意図的に配置されていることがうかがわれる。

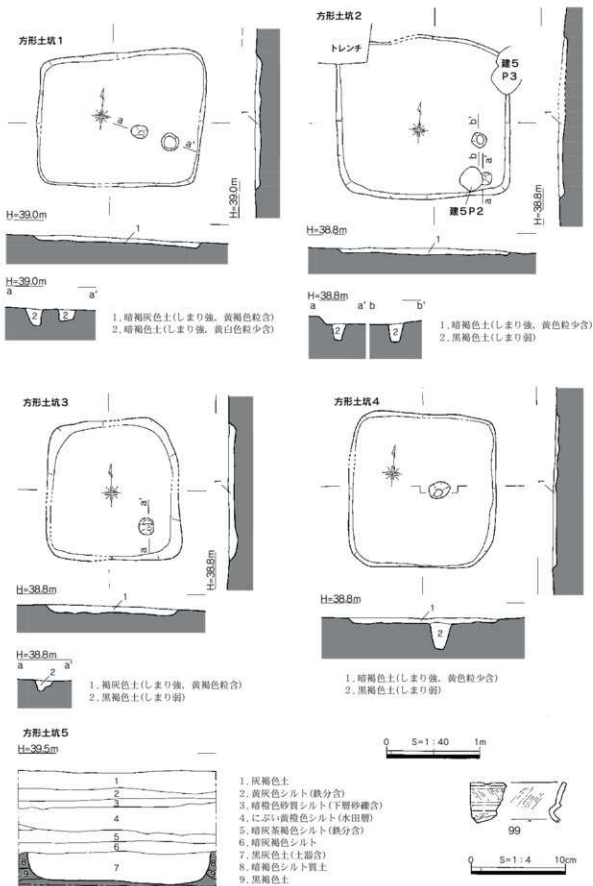
遺物は方形土坑2から甕の口縁部99が出土している。これは天神川II期のものである。

これらの時期は、出土遺物から古墳時代前期のもと考えられる。性格については不明である。(浅田)

6. 硬化面 (第38図)

調査区南側のG3グリッド中にあり、溝11の上面に位置している。本遺構は、溝11の検出時に漸移層上面で確認したものである。ただし、検出面は直上まで重機によって掘削されているため、この遺構が硬化面のみの存在であったのか、上面に何らかの構造を有していたのかは不明である。

硬化面は、東西約4.9m、南北約3.4mの範囲で確認さ



第37図 方形土坑1～5・出土遺物



1. 暗褐色土(しまり強、黄褐色粒少含)

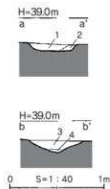
第38図 硬化面

8. 溝

溝1 (第20・40図)

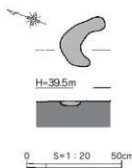
調査区北西側のE5～8グリッドに位置する。重機により、検出面である黒ボク上面まで掘り下げているので遺存状態は良くない。検出時において、後述する溝2・4・5・7に切られていることが確認されたことから、これらの溝に先行すると考えられる。また、この溝付近に溝3が存在するが、遺存状態が良くないことから両者の新旧関係は不明である。

東西方向へほぼ直線的にのびるもので、溝4・5・7と直交し、溝8・10と平行する。残りが悪いため現状では3つに分断しているが、本来は一連の溝であったと考えられる。規模は幅50～56cm、検



1. 灰白色砂質土(しまり強)
2. 黄白色砂質土(しまり強)
3. 暗褐色砂質土(しまり強)
4. 暗褐色砂質土(砂礫多含)

第40図 溝1



第39図 焼土面

れている。厚さは4cmほどであり、検出面の標高は38.8mである。遺物は出土しておらず時期は不明であるが、溝11の上面にあることから、古墳時代後期以降と考えられる。(玉木)

7. 焼土面 (第39図)

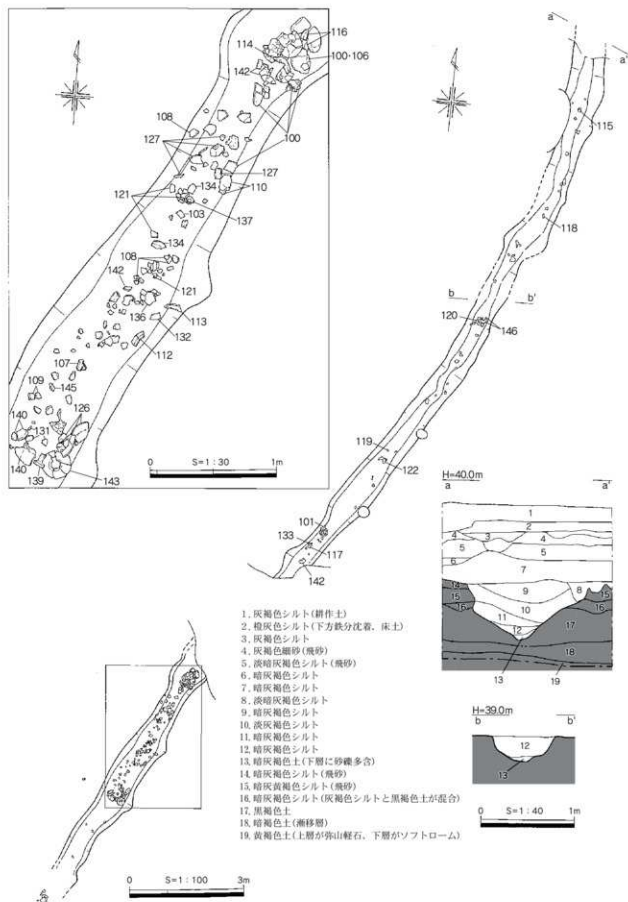
調査区南西側の17グリッド中に位置しており、黒ボク上面で検出した。焼土面は長軸30cm、短軸10cmの小範囲において確認できた。遺構の周辺からは遺物が出土しておらず、時期を特定できないが、検出した層位から古墳時代のもと考えられる。(玉木)

出面からの深さは14cmを測り、断面は「U」字状を呈する。埋土は暗褐色砂質土を主体とした4層に分かれる。最下層に砂礫の混入がみとめられることから、流水があったものと推測される。遺物は土器片が数点出土しているが、時期を特定するに至らなかった。

溝2 (第41～44図、PL.7・19～25)

調査区北西側のD6・E7・F8グリッドに位置する。表土剥ぎ中に遺物が集中して出土したことで確認された溝である。重機によって遺構上面まで掘り下げているので残存状態は良くない。南西から北西方向に向かってほぼ直線的にのび、後述する溝3と平行している。

北東側は調査区外にのびており、北西側は、後世の攪乱を受けているため、掘り方を確認することができなかった。規模は、幅86cm、検出面から

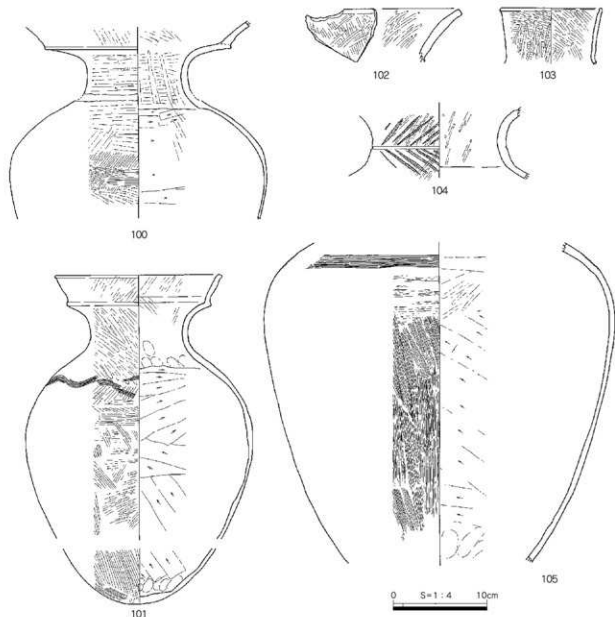


第41図 溝2

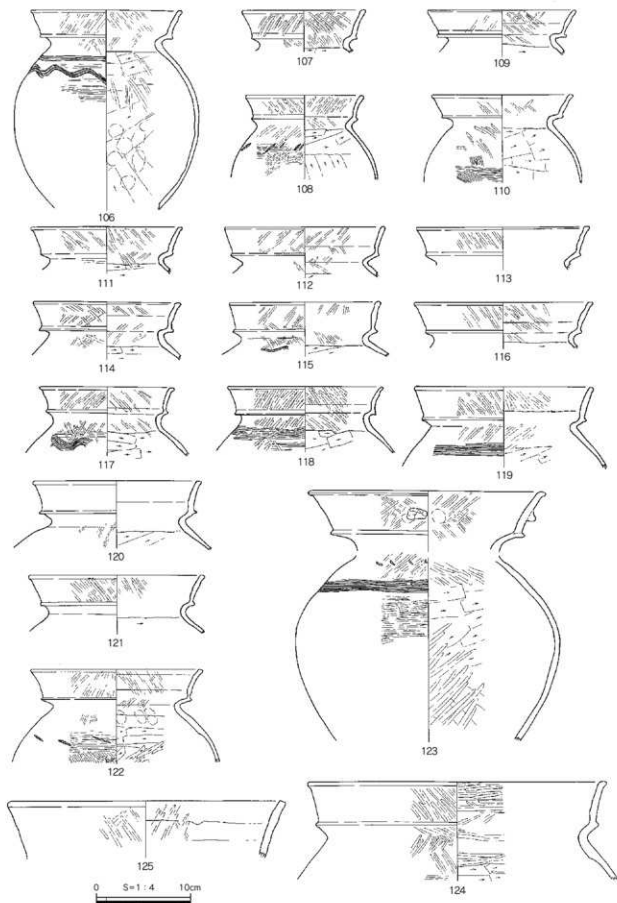
の深さ61cmを測り、掘り込み面は黒ボク〜漸移層までであった。断面形は「U」字状を呈する。

埋土は暗灰褐色シルトが主体となり、これらは5層に分層できた。これらの層のうち、最下層のものには砂礫が多く含まれることから、流水のあったことがうかがえる。しかし、第41図の遺物出土状況図で示したように、同一個体となる遺物が比較的近い位置から出土していることから、流水の影響はさほど受けなかったと思われる。

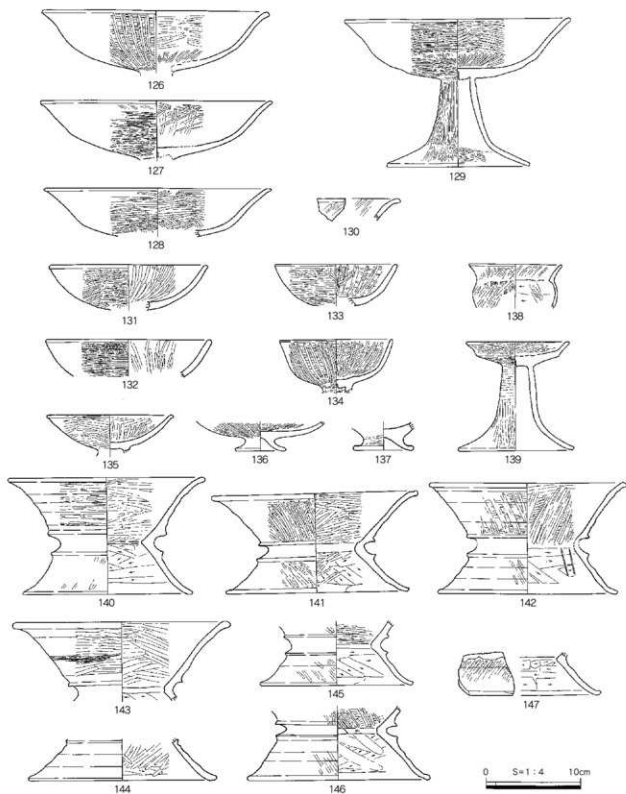
遺物はすべて底面から出土した。出土した遺物のうち100~146を図示した。100・101・104・105は壺、106~124は複合口縁の甕、125は鉢、126~134は高坏、135~137は低脚坏である。138は小型丸底壺、139は小型器台、140~147は鼓形器台である。遺物は第41図で示したように溝の全体から出土しており、とくに南西側では顕著に認められた。これらはまとめて出土していることから、一括性の高いものといえる。時期は天神川Ⅱ〜Ⅲ期、古墳時代前期前葉と思われる。 (前島)



第42図 溝2出土遺物①



第43図 溝2出土遺物②



第44図 溝2出土遺物③

溝3～6 (第20・45・46図、PL.8・24)

溝3～6は調査区中央に位置し、黒ボク上面で検出した。このうち溝3～5は互いに重複し、また、溝1を切っている。切り合い関係から、溝3が最も古く、溝4・5の順に新しくなる。

溝3は南東から北東へ直線的にのびる溝であり、溝2と平行する。規模は幅182cm、深さ28cmを測り、断面形は不整形ながらも逆台形を呈する。遺物は出土しておらず時期の特定はできない。

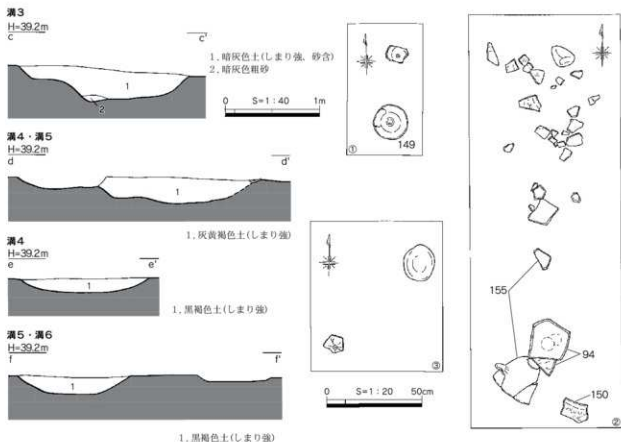
溝4は西から東にのびた後、ほぼ直角に折れ曲がり、北へとびる。規模は幅132cm、深さ12cmを測り、断面形は皿状を呈する。遺物は土師器や石器が出土している。149は底面から出土しており、S22は混入したものと見える。時期は古墳時代中期と考えられる。

溝5は南から北へやや蛇行しながらも直線的にのびる溝であり、溝4と重複しながらも並走する。規模は幅166cm、深さ27cm、断面形は皿状を呈する。出土遺物は土師器、須恵器である。出土した須恵器のうち甕の破片は堅穴住居7から出土した94と接合している。遺構の時期は、遺物が天神川X期、八橋IV期の特徴を示すことから、古墳時代後期前葉と考えられる。

溝6は溝4とほぼ平行に流れるたわみ状の溝である。規模は、幅76cm、深さ6cmを測り、断面形は皿状を呈する。遺物は149の破片が出土しており、時期は溝4とほぼ同じと考えられる。

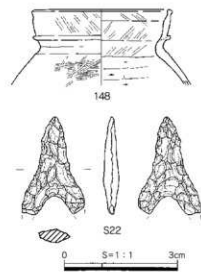
溝7（第47図、PL.8・24）

調査区中央に位置しており、検出面は黒ボク上面である。南北方向へほぼ直線的にのびており、古代の溝13と重複する。規模は幅約90cm、深さ約40cmを測り、断面形は逆台形ないしは皿状を呈する。遺物は土師器、須恵器、石器が出土している。時期は八橋V期、古墳時代後期前葉と考えられる。

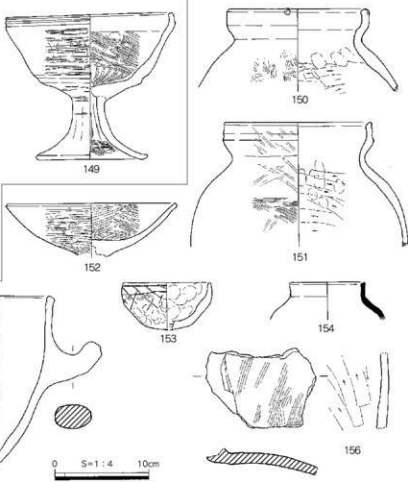


第45図 溝3～6

溝4



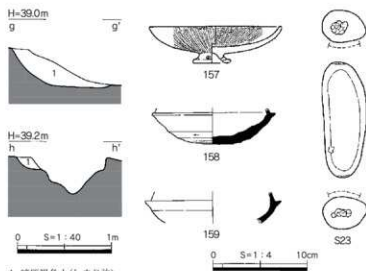
溝5



第46図 溝4・5出土遺物

溝8～10 (第48図、PL.24・25)

溝8～10は調査区南西側に位置し、黒ボク上面で検出した。溝8は西から東へ直線的にのびる溝である。規模は幅106cm、深さ45cmを測り、断面形は不整形な逆台形を呈する。出土遺物は、土師器、須恵器、石器が出土している。160・163・164・166・S24は底面から、他は埋土中からの出土である。また、167は埋土上層から出土しており、上層からの混入と考えられる。遺構の時期は、底面からの出土遺物が天神川X期、八橋IV・V期の特徴を示すことから、古墳時代後期前葉と考えられる。

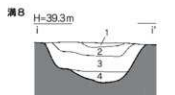


1. 暗灰褐色土(しまり後)

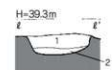
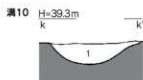
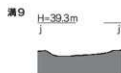
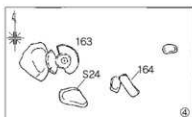
第47図 溝7・出土遺物

溝9は、蛇行しながらも溝8と平行して流れる溝である。規模は幅70

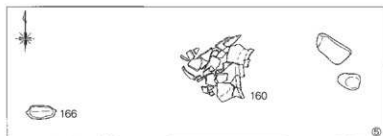
cm、深さ45cmを測り、断面形は不整形な逆台形を呈する。出土遺物は、土師器、須恵器、石器が出土している。160・163・164・166・S24は底面から、他は埋土中からの出土である。また、167は埋土上層から出土しており、上層からの混入と考えられる。遺構の時期は、底面からの出土遺物が天神川X期、八橋IV・V期の特徴を示すことから、古墳時代後期前葉と考えられる。



1. 黒褐色土(しまり強)
2. 黒褐色土(しまり強, 黄褐色粒少含)
3. 黒褐色土(しまり強)
4. 黒褐色土(しまり弱, 黄褐色粒少含)

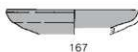
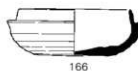
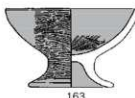
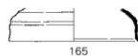
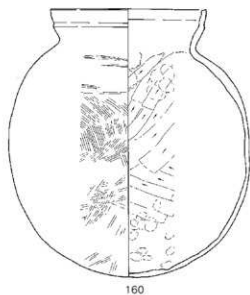


1. 黒褐色土(しまり強)
2. 灰黄褐色土(しまり強)

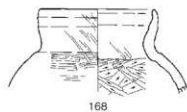


溝8

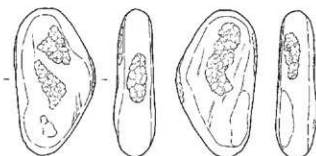
0 S=1:20 1m



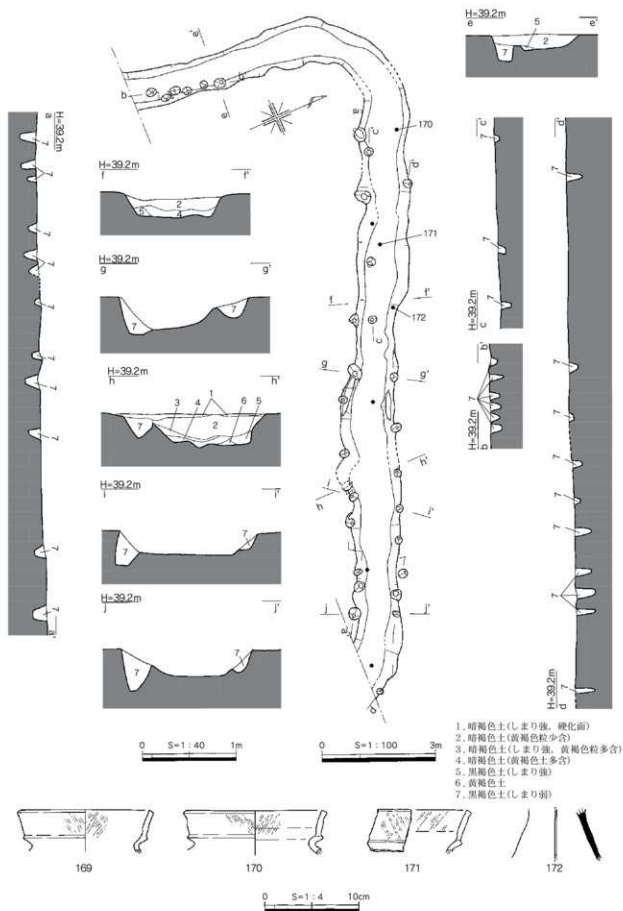
溝10



0 S=1:4 10cm



第48図 溝8~10・出土遺物



第49図 溝11・出土遺物

cm、深さ6cmを測り、断面形は皿状を呈する。遺物は出土しておらず、時期の特定はできない。

溝10は西から東側へ直線的に流れる溝であり、溝8・9と平行する。規模は幅96cm、深さ20cmを測り、断面形は逆台形ないしは皿状を呈する。遺物は168が出土している。時期は、168から天神川X期、古墳時代後期前葉と考えられる。(玉木)

溝11 (第49図, PL. 9・25)

G2～4グリッドに位置しており、わずかに北東側に傾斜する緩斜面上に立地する。黒ボク下面から漸移層上面で検出した。南東から北西に向かって直線的にのびており、G4グリッド杭

の付近で南側へ「L」字状に屈曲する。グリッド杭までは、等高線に対してほぼ平行になっているが、屈曲部分からは等高線に対して垂直になる。検出した規模は全長22.5m、最大幅1.4m、深さ20～34cmを測る。断面は「U」字状ないし皿状を呈する。底面には硬化面およびピットは認められなかった。

掘り込み面の肩部および溝壁面と底面の接する部分において、ピットが検出された。ピットの平面形は円形を呈し、断面は「V」ないし「U」字状である。規模は直径15～30cm、深さ10～15cmである。これらのピットは、溝の走行に合わせて列状に並んでおり、また断面の形状が「V」字状になるものもあることから杭痕と思われる。

溝の断面の観察や埋土の堆積の様子から、水流があった痕跡は認められなかった。本遺構の性格としては、土地を区切る区画溝としての可能性が考えられるが、詳細は不明である。

遺物は土師器や須恵器が出土している。169～171は土師器甕の口縁部である。172は須恵器高坏の脚部である。2方向以上の透かし穴をもつ。

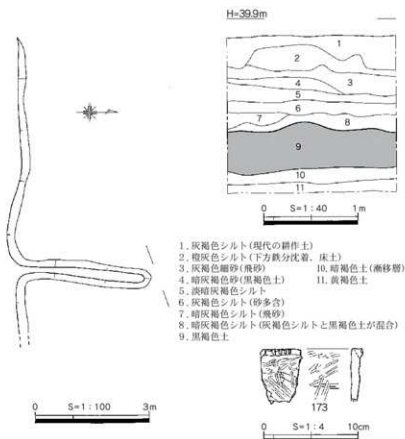
本遺構の時期は出土遺物から、古墳時代後期のものである。

(浅田)

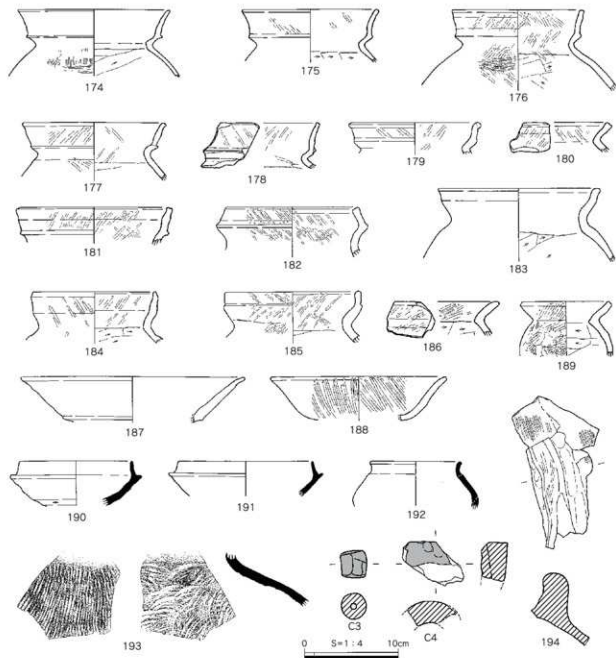
9. 畦畔状遺構 (第50図)

調査区北側、D6グリッド中に位置している。黒ボク上層にあたる暗灰褐色シルトを徐々に掘り下げたところ、畦畔状の高まりを確認した。しかし、遺構の周辺は、黒ボク上面まで重機によって掘り下げられており、残りが悪く、全体の状況・性格は不明である。

東西6m、南北3mほどを検出した。畦畔状の高まりは、幅50cm、高さ20cmを測り、底面の標高は38.7mとなっている。ところで、遺構の地山は黒褐色土となっているが、その上層部において、土が



第50図 畦畔状遺構・出土遺物



第51図 古墳時代遺構外出土遺物

ブロック状に堆積している状況を看取できた。このため、ここで耕作などの土を掘り返す行為が行われていたものと考えられることができる。

遺物は、暗灰褐色シルト中から、173が出土している。これは、検出状況から混入したものと考えられる。時期は、ここが溝2の下層にあたることから、古墳時代前期以前と考えられる。(玉木)

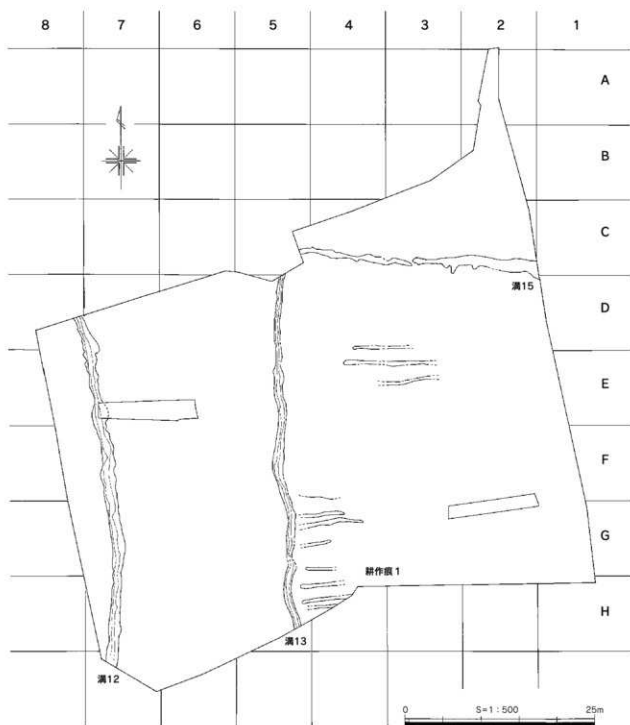
10. 遺構に伴わない遺物 (第51図、PL.25)

古墳時代前期～後期までの土師器、須恵器、土製品を確認した。これらの大部分は確認した遺構に伴う時期のものである。174～186は甕、187・188は高坏、189は小型丸底壺、190・191は坏身、192は短頸壺、193は襷、194は移動式籠、C3は土玉、C4は鞆の羽口である。(玉木)

第5節 古代以降の遺構・遺物

1. 概要

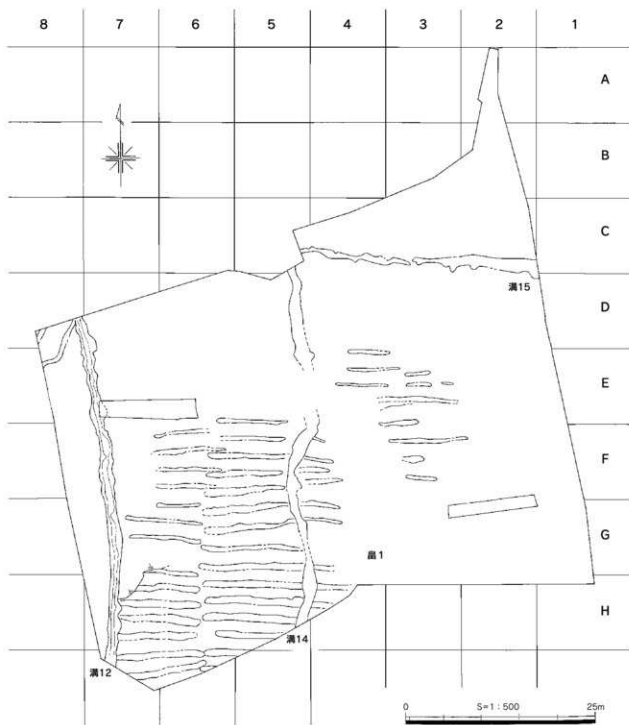
当該期の遺構・遺物は、古墳時代前期の溝2の確認により、当初の調査計画を変更し、黒ボク上面



第52図 古代以降遺構配置図①

までを残したことによって初めて検出されるに至った。つまり、古代以降の遺構は、その掘り込みの大半が黒ボクまでのものであり、当初の調査計画どおり漸移層上面を遺構検出面とした場合、存在していた遺構の大半が消失してしまい、また、運良く遺構が残ったとしても残存状況が非常に悪く、遺構の検出が非常に困難なため、最低でも黒ボク上面で遺構の検出しない限りは大部分の遺構を確認できなかつたのである。

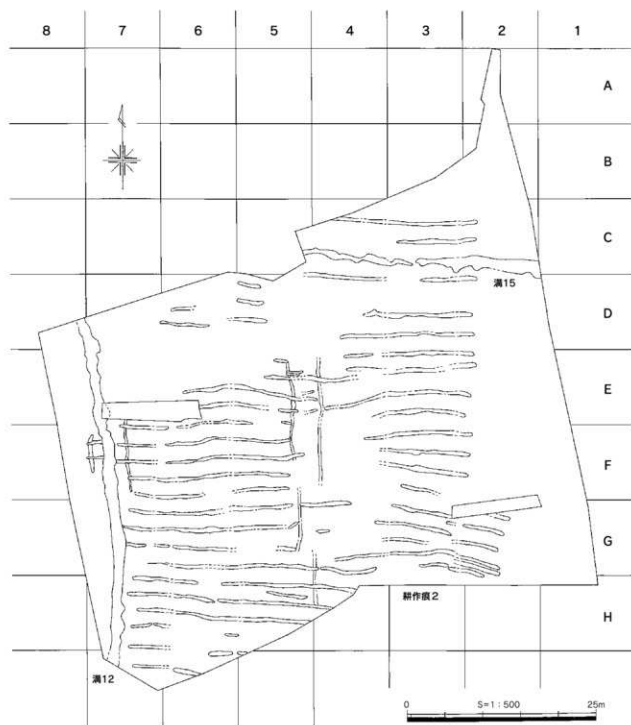
遺構の検出は、基本的に黒ボク上面から漸移層上面にかけて行った。ただし、第1節でも述べたが、



第53図 古代以降遺構配置図②

調査区南西側のH5～7、I6・7グリッドでは、調査も中盤の7月16日から新たに表土剥ぎを行うこととなったため、これまでの遺構の検出状況を踏まえて、重機による掘削を灰色系のシルト層までとし、そこから徐々に掘り下げを行い、調査を進めていくこととした。このため、それまで残りが悪く、判然としなかった遺構がかなり良好な状態で検出することができ、また、複数の時期の遺構が一面で検出されたために雑然としていた遺構の新旧関係のある程度整理することができたのである。

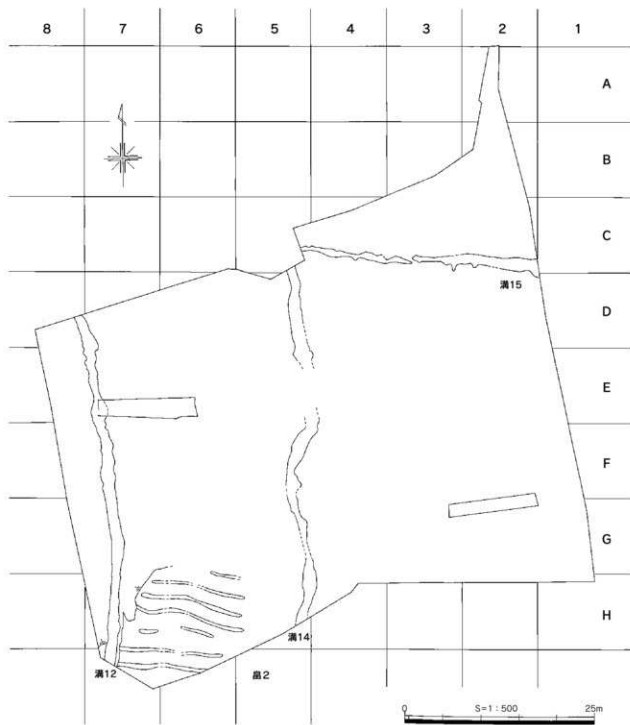
遺構は、掘立柱建物2棟、土坑3基、墓3基、溝4条、畝2面、畝に伴う耕作痕3面などを確認し



第54図 古代以降遺構配置図③

た。また、土層観察から水田に伴う畦畔状の高まりを調査区北東側で確認した。これらの遺構は古代～中世、一部は近世まで続くものであり、かなりの時期幅がある。このため、複数の段階を経てこれらの遺構が形成されたといえる。しかし、前述の通り、調査の中盤までは複数の時期の遺構を同一面で確認していたため、遺構の形成段階を明確に捉えることができず、H5～7、I6・7グリッドの調査によって、第52～57図のような遺構の変遷を復元することができたのである。

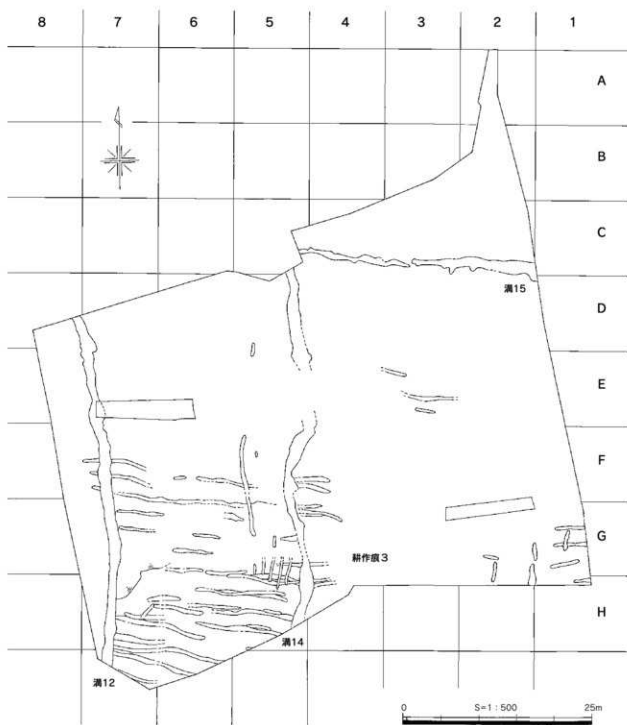
これらの図面のうち最も古いものは第52図であり、第54・53・56・55・57図の順に新しくなる。



第55図 古代以降遺構配置図④

変則的な順序となっているのは、第53・54図、第55・56図がそれぞれ畝とそれに伴う耕作痕といった関係にあり、畝→耕作痕の順に掲載したためである。

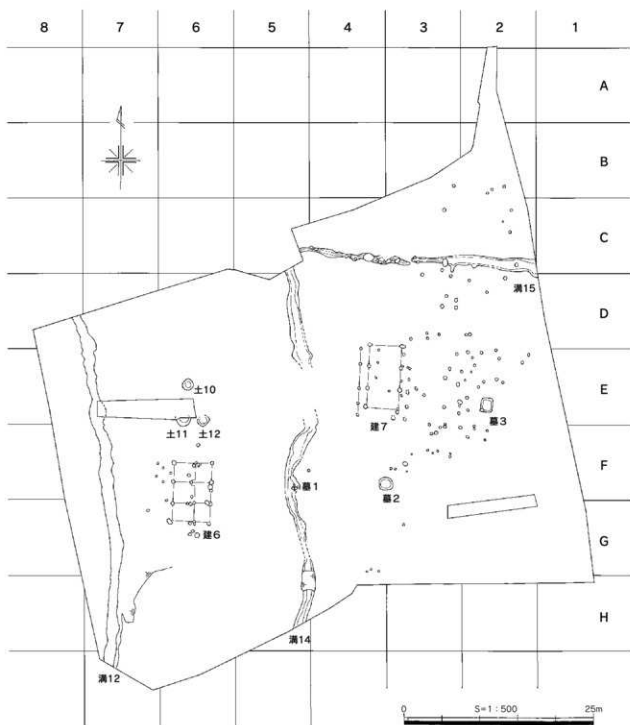
さて、遺構の状況であるが、古墳時代後期までは集落であったが、古代になると状況が一変し、耕地となるようである。ここでは畝1・2が確認されており、畝1の方が古く、畝2が新しい。これらの畝の下層からは、耕起の痕跡と考えられる耕作痕が調査地全面にわたり確認されている。また、この付近には、条里に関係すると考えられる溝12・13が確認されていることから、これらの畝が条里と



第56図 古代以降遺構配置図⑤

関連していた可能性が高いといえる。

中世になると、集落が営まれるようになり、掘立柱建物や土坑、墓、溝などを確認している。これらの遺構の配置は、ほぼ古代の地割に即したものと考えられ、古代の地割がこの時点でも踏襲されていたものと推察される。なお、この地域の圃場整備前の航空写真をみると、条里の地割が残っており、この地割が溝12、13・14とほぼ重なり合うことから、現代に至るまで古代の地割が踏襲されてきたと考えられる。この集落廃絶後は、造成が行われ水田となっていく。(玉木)



第57図 古代以降遺構配置図⑥

2. 掘立柱建物

掘立柱建物 6 (第58図、PL.9)

調査区西側のF6・G6グリッド中、土坑11・12の南側約5mに位置しており、畠1、耕作痕2・3を切っている。検出面は黒ボク上面であり、畠1、耕作痕2・3と同一面で確認した。

桁行3間、梁間2間の南北に長い総柱建物である。棟方向はほぼ南北を示すが、 $N-4^{\circ}-E$ と若干東に振れている。規模は桁行8m、梁間5.2m、床面積41.6㎡を測る。柱穴の平面形は円形を呈し、規模は径23～56cm、深さは42～90cmを測る。底面の深さはほぼ一定であり、ソフトロームまで掘り込まれている。これらの柱穴から柱痕跡は認められなかった。また、P4の埋砂中からは、一辺15cmほどの石が出土している。柱通りはほぼ揃っており、桁行、梁間ともに直線的であった。

埋砂中からは遺物が出土しておらず、時期の特定ができないが、周囲の遺構の状況から、中世のものと考えられる。なお、この周囲にはこの建物と同一の埋砂、平面形、規模の柱穴が散見されることから、この建物に伴う付属施設ないしは別の建物が存在していた可能性が考えられる。

掘立柱建物 7 (第59図、PL.9)

調査区中央のE4グリッド中、溝14の東側約8mに位置し、畠1、耕作痕1～3を切っている。埋砂は灰黄褐色細砂であり、掘立柱建物6と同質であることから、ほぼ同時期のものと考えられる。検出面は黒ボク上面であり、畠1や耕作痕1～3と同一面で確認し、かなり雑然としていた。

桁行3間、梁間1間の南北に長い側柱建物である。棟方向は $N-4^{\circ}-E$ とほぼ南北を示し、掘立柱建物6と平行する。規模は桁行8.4m、梁間4.3m、床面積36.1㎡を測る。柱穴の平面形は円形を呈し、規模は径32～56cm、検出面からの深さは21～28cmを測る。底面の深さはほぼ一定であり、漸移層～ソフトロームまで掘り込まれている。これらの柱穴のうちP1～6・8では、やや丸みをもった柱穴底面に灰黄褐色細砂を敷き、これをつき固めた後に、円形の扁平な石1～2個を水平になるようにして置き、その上に柱を据えた状況を観察することができた。

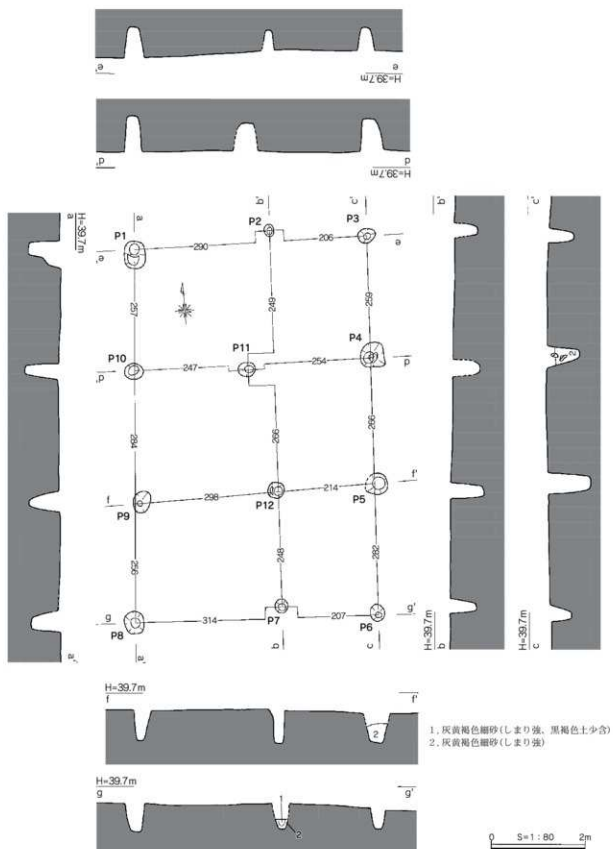
この西側には、建物に関連すると思われる柵列が確認されている。柱穴は5基確認しており、その平面形は円形を呈し、規模は径21～28cmを測る。検出面からの深さは21～52cmと一定ではない。また、柱間距離は1.6～3.1mとばらきがある。柱通りは揃っており、直線的である。

遺物は図示できなかったが、掘り方の埋砂から須恵器片1点が出土している。時期は出土遺物が小片で明確にすることができないが、周囲の状況から中世と考えられる。なお、この東側や北側にはこの建物と同一の埋砂をもったピットが散見されることから、この建物に伴う付属施設ないしは、別の建物が数棟存在していた可能性が考えられる。(玉木)

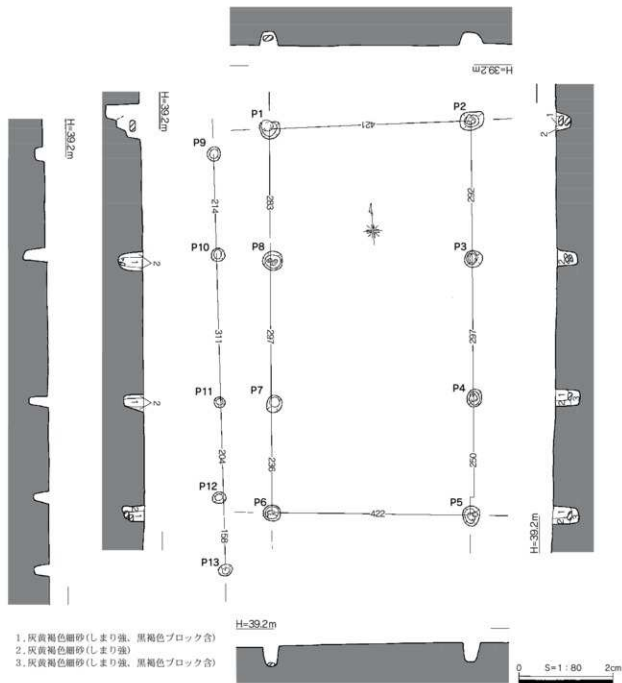
3. 土坑

土坑10 (第60図、PL.10)

調査区西側のE6グリッド中、土坑11・12の北側約5mに位置している。規模は径134cm、検出面からの深さ25cmを測り、平面形は円形、断面形は皿状を呈する。遺構の掘り込みは漸移層までである。



第58図 掘立柱建物6



第59図 掘立柱建物7

遺物は出土しておらず時期の特定はできないが、遺構の埋砂や周囲の状況から掘立柱建物6・7、土坑11・12とほぼ同時期のものと考えられる。

土坑11 (第61図、PL.10)

調査区西側のF6グリッド中、土坑12の西側に近接している。本遺構は、試掘調査のトレンチによってその半分が消失しており、形状・規模ともに不明瞭である。確認できた範囲から判断すると、規模は径184cm、検出面からの深さ60cmを測り、平面形は円形を呈するものと考えられる。断面形は逆台形を呈し、底面は漸移層まで掘り込まれている。遺物は、底部糸切りの皿195、受け口状の口縁部を

もつ鍋196が出土している。時期はこれらの遺物から13世紀頃と考えられる。

土坑12 (第62図、PL.10)

調査区西側のF6グリッド中、土坑11の東側に近接している。遺構の一部はサブトレンチにより消失している。規模は径156cm、検出面からの深さ40cmを測り、平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。埋土中から土器の小片が数点出土したのみであり、時期を明確にすることができないが、埋土の状況や遺構の形状などから土坑11とほぼ同時期のものと考えられる。(玉木)

4. 墓

墓1 (第63図、PL.10・27)

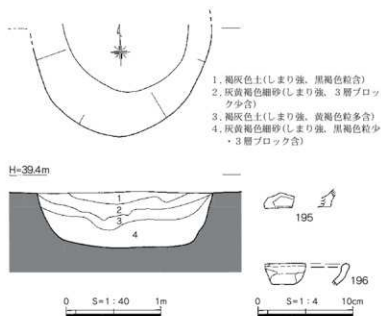
調査区中央、F5グリッド中に位置しており、溝14と重複する。明瞭な掘り方はなく、いびつな底面に10~40cmほどの礫が検出された。遺物は、碗197、釘M1、永楽通寶(初鑄1408年)M2が出土している。

墓2 (第64図、PL.10・27)

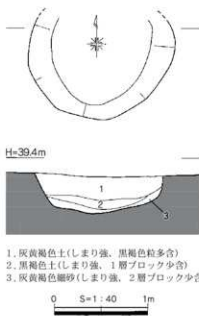
調査区南側、F4グリッド中、掘立柱建物7の南側約10mに位置している。重機で漸移層まで掘り下げたため残りが悪い。長軸172cm、短軸136cmの楕円形を呈した墓であり、深さ110cmを測る。底面にはやや凹凸が認められ、土坑内には8~50cmほどの礫が詰まっていた。遺物は底部糸切りの小皿198や椀199、蔽石S25が出土した。時期は13世紀頃と考えられる。



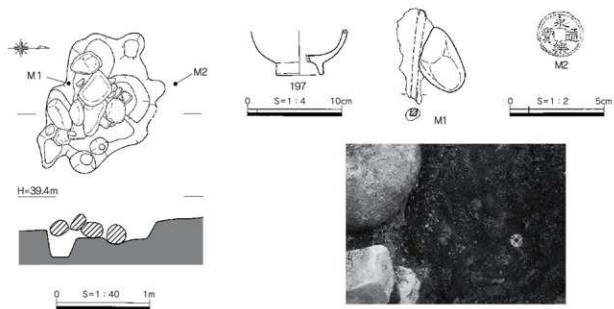
第60図 土坑10



第61図 土坑11・出土遺物

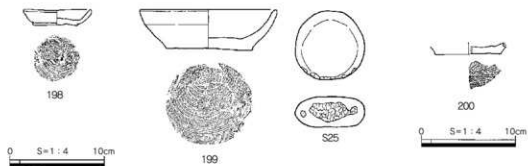
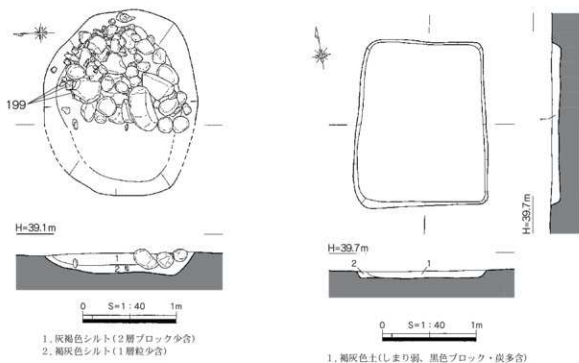


第62図 土坑12



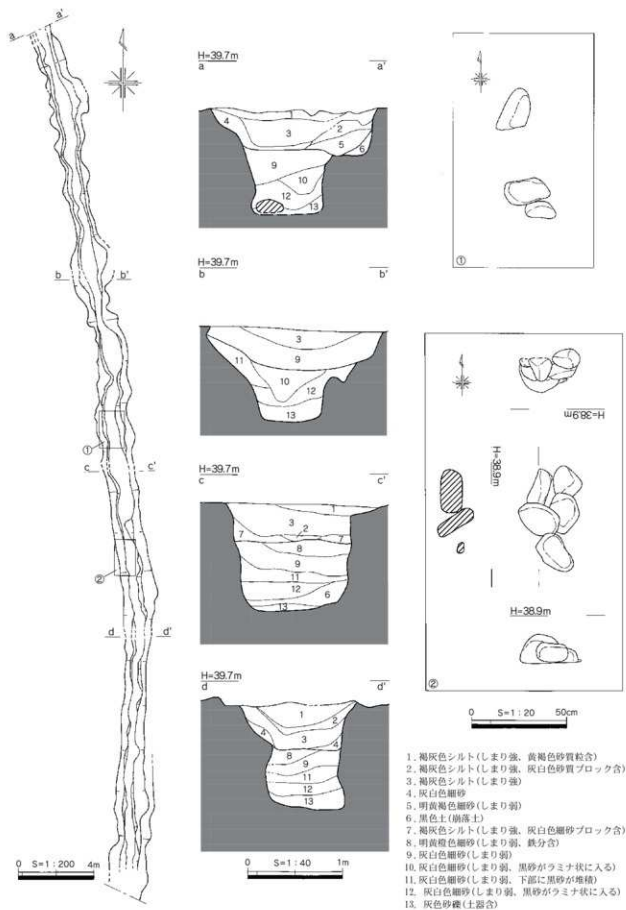
写真図版4 永楽通寶出土状況

第63図 墓1・出土遺物

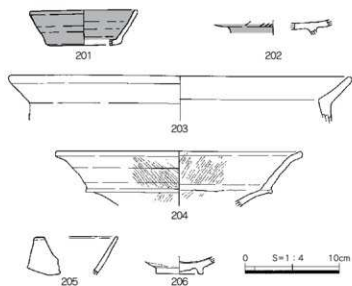


第64図 墓2・出土遺物

第65図 墓3・出土遺物



第66図 溝12



第67図 溝12出土遺物

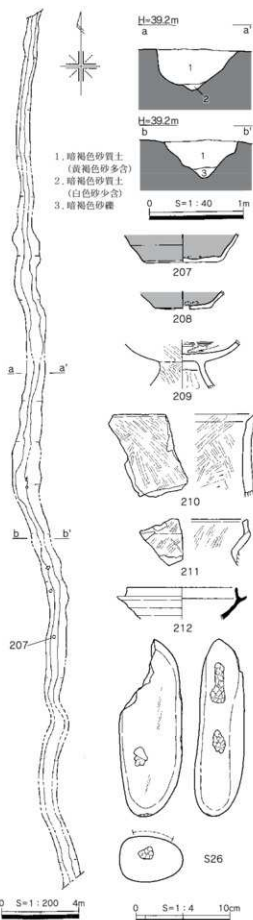
墓3 (第65図, PL.10)

調査区東側、F2グリッド中に位置しており、竪穴住居3を切っている。長軸172cm、短軸136cmの方形を呈した墓であり、深さ8cmを測る。遺物は底部糸切りの小皿200が出土している。墓2と同時期のものと考えられる。(玉木)

5. 溝

溝12 (第66・67図, PL.11・26)

調査区西端に位置する南から北へ流れており、条里に関連すると考えられる溝である。溝はほぼ直線的のびているが、d-d'付近でやや西側に屈曲している。一度砂によって埋没した後、これと重複するように掘り直しが行われている。断面形は段状をなしているが、新旧の溝が重なり合った結果そうなのであり、本来は、ともに箱型を呈するものである。規模は、下層の溝で幅80~120cm、検出面からの深さ110cm、上層の溝で幅108~183cm、検出面からの深さ36cmを測る。なお、下層の溝は、底面に砂礫層が堆積し、溝の側面も抉られているため、水の流れが比較的急であったものと考えられる。また、底面には礫がかためて置かれている場所があり、水の流れを塞ぎ止めるために使用したものと想定でき、こ



第68図 溝13・出土遺物

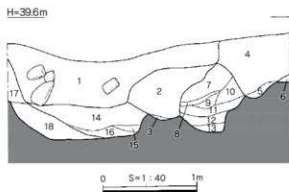
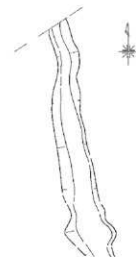
の溝が用水路として機能していた可能性が考えられる。

遺物は201~203が底面付近から、他は上層から出土している。時期は、
 伯耆国庁2段階、9世紀頃と考えられる。 (玉木)

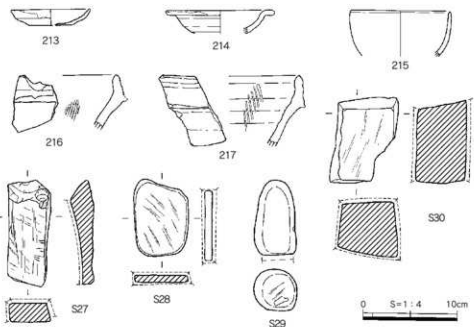
溝13 (第68図、PL.11・26)

調査区中央にあり、畠1の耕作土除去後に検出した。南北方向へ直線的に
 のびており、溝7を切る。規模は幅1.4m、深さ40cmほどを測る。断面形は
 「U」字状ないしすり鉢状を呈し、埋土は暗褐色の砂質層からなる。最下面
 には砂礫層が堆積し、水路として機能していたと考えられる。

遺物には土師器、須恵器、石器などが出土している。このうち、207~210
 がこの時期のものと考えられ、他は混入したものと見える。時期は、
 伯耆国庁2段階、9世紀頃と考えられる。 (浅田)



1. 灰褐色シルト(現代の用水路)
2. 黄灰色粘質砂(近世以降の溝)
3. 黄灰色砂礫層(近世以降の溝)
4. 黄灰色シルト
- (黒ボク含、近世以降の溝)
5. 黄灰色砂礫(近世以降の溝)
6. 暗黄灰褐色シルト(近世以降の溝)
7. 灰黄色細砂
8. 暗黄灰色砂
9. 灰白色砂
10. 淡黄灰色砂
11. 灰白色砂
12. 淡灰褐色シルト
13. 淡灰褐色砂礫
14. 灰黄色(溝13)
15. 灰褐色シルト(溝13)
16. 灰黄色(溝13)
17. 暗灰褐色シルト
18. 暗灰褐色シルト(溝7)



第69図 溝14・出土遺物

溝14 (第69図, PL.11・26)

調査区中央に位置しており、南から北へ蛇行しながら流れる溝である。溝13の一部を切っており、また、それ以降の溝によって切られている。遺構の検出は漸移層上面で行っており、残りが悪い。規模は幅80cm、深さ30cmを測る。遺物は灯明皿213・214、碗215、備前焼の播鉢216・217、砥石S27～30が出土している。これらの遺物から、時期は中世～近世と考えられる。

ところで、調査区中央には本遺構のほかに溝7・13、現在に至るまでの溝、現在の用水路が若干ずれながらも同じ方向に流れている。このことから、この地域では古墳時代後期以来、同じところに水路が継続して存在していたことが分かる。

溝15 (第70図, PL.11・26)

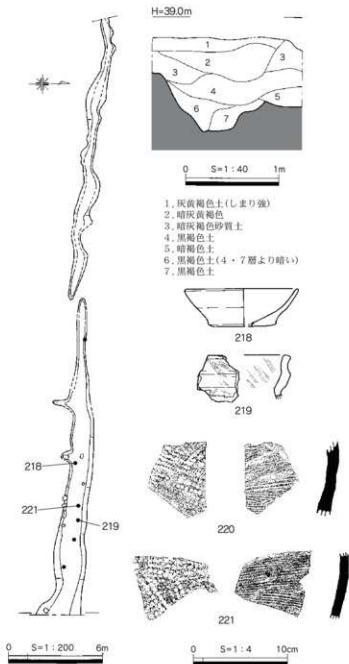
調査区北東側に位置しており、西から東へ直線的に流れる溝である。遺構の検出は漸移層上面で行っており、残りが悪い。規模は幅95cm、検出面からの深さ30cmを測る。断面形はいびつな逆台形を呈しており、底面は流水によるものなのか凹凸が認められる。

遺物は底面からやや浮いた状態で、底部へラ切りの坏218、土師器甕219、外面に格子状のタタキ後カキメ、内面にカキメを施す須恵器甕220・221、鉄滓などが出土している。時期は中世と考えられる。

6. 水田 (第71図)

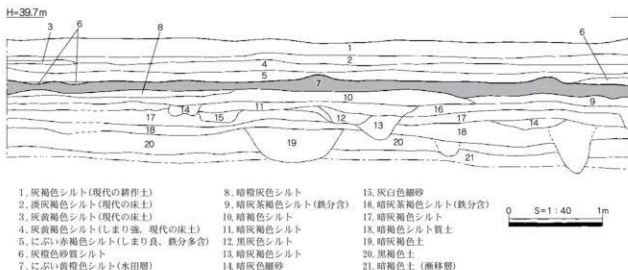
本遺構は、漸移層まで重機によって掘り下げたため、平面では捉えることができず、調査区北東側の土層観察によって畦畔状の高まりが確認されたために明らかとなった遺構である。

水田面の標高は39mであり、ほぼ水平となっている。畦畔状の高まりは2箇所確認されており、その規模は幅35～42cm、高さ5～10cm、間隔は2.4mを測る。水田の耕作土はシルト層からなり、酸化鉄の沈着によってにぶい黄橙色を呈している。この耕作土は、溝14よりも東側で確認されていること



第70図 溝15・出土遺物

(玉木)



第71図 水田土層断面図

から、調査区の比較的低い部分において水田が形成されていたものと思われる。

水田の耕作土の下層は、畠の耕作土と考えられる暗橙灰色～暗灰褐色シルトとなっている。これらの上面は比較的平坦となっており、調査区東壁の土層断面では畠の耕作土を造成し、平坦面をつくり出している状況を観察することができた。このことから、畠が廃絶した後に、大規模な造成が行われ、水田が形成されるに至ったものと考えられる。

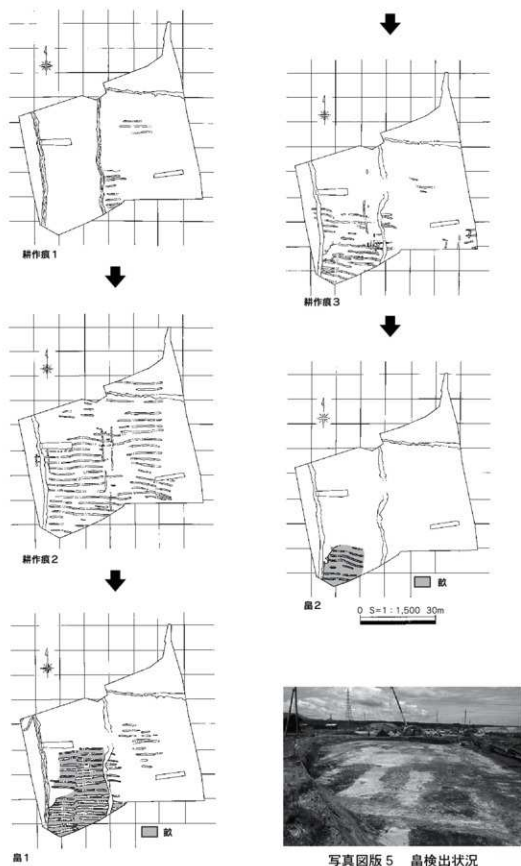
さて、この水田の時期であるが、遺物が出土しておらず明確にはできない。しかし、古代～中世にかけての遺構・遺物が水田の下層に存在することから、中世以降のものと考えられる。(玉木)

7. 畠

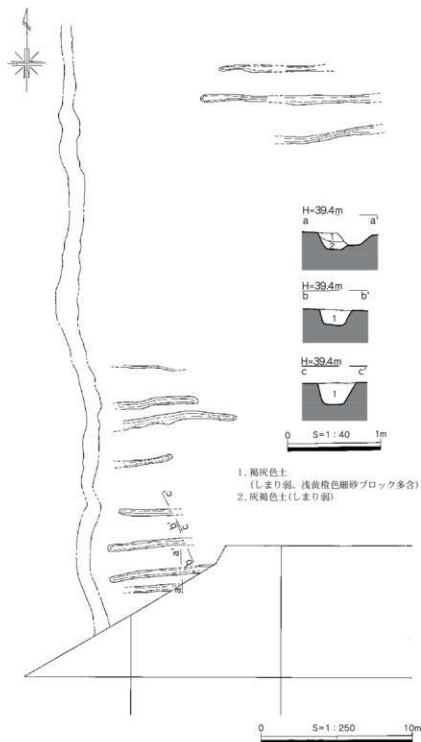
畠は調査区全面に渡って検出された。概要でも述べたが、重機によって黒ボク上面ないしは漸移層上面まで掘り下げた箇所が大半を占め、調査の当初、弥生時代から中世に至るまでの遺構・遺物が同一面検出されることとなり、その新旧関係を判断することが非常に困難であった。とくに、この畠に伴う畝間や耕作痕の切り合い関係が複雑であり、漠然と3種類の溝が切り合っている状況を捉えたにすぎず、また、この性格も畠に伴うものと考えていたのであるが、明確に決定できるものではなかった。しかし、調査区南西側のH5～7、16・7グリッドの調査によって、遺構の形成順序や性格が明らかとなったのである。

第72図は、畠の変遷を示したものである。この変遷図や第52～56、73～75、77図は調査終了後に畝間や耕作痕の埋土・埋砂の質や色調をもとに整理・復元したものである。若干、不明な箇所もあるが、おおむねこの通りに捉えることができる。

さて、畠の変遷であるが、まず、耕作痕1が形成される。その後、畠が形成されたと考えられるが、その痕跡は平面や断面で捉えることができず、後世の耕作によって削平されたものと考えられる。つづいて耕作痕2が掘られ、畠1が形成されることとなる。この畠1であるが、この上面には大量の細砂が堆積しており、これによって一旦、この地域における生産活動が中止されたものと考えられる。この生産活動中止後、新たに耕作痕3が掘られ、畠2が形成されることとなる。その後、調査区の東側では造成が行われ、水田が行われるようになり、現代に至るものと考えられる。



第72図 畝変遷図



第73図 耕作痕 1

分を掘り下げてしまったため、その一部のみの確認となった。

畠の状況をその最も残りの良い北東側から概観すると、直線的な畠であり、整然としたものであった。規模は幅2.2~2.5m、高さ15~30cmを測り、断面形は台形を呈している。畠の方向は、耕作痕1とほぼ同じく東西方向を示しており、調査区の地形とはやや異なる。畠の長さは、畠が断片的にしか残っていないため不明瞭であるが、20mほどであったと考えられ、東西方向に約20mの間隔で畠が連なっていた状況を想定することができる。

耕作痕 1 (第73図、PL.12)

調査区中央で部分的に確認し、畠1の耕作土を除去した黒ボク上面で検出した。溝13と直交し、直線的にのびる数条の溝で構成されている。規模は幅30~40cmを測り、断面形は逆台形を呈している。検出面からの深さは30cmを測り、掘り込みは黒ボク中で終わっている。溝の間隔は1~3mとばらつきが認められるが、おおむね2m間隔で掘られているものと考えられる。埋土は褐灰色土に浅黄橙色細砂が大量に混じるものであり、溝13の埋土に近いものであった。

遺構の時期は、埋土中から遺物が出土しておらず不明瞭であるが、埋土の状況などから判断して、溝13よりもやや新しいものと考えられる。

畠 1 (第74・78図、PL.12)

調査区中央と南西側において確認され、本来ならば、細砂ないしはシルト層除去後に検出されるべき遺構である。調査区全体にわたり良好な状態で畠を確認できたはずであるが、重機により遺構の大部



第74図 畠1



第75図 耕作痕 2

畝の上面や畝間には淡黄色細砂が厚く堆積する状況を確認しており、砂によって埋没した後、生産活動が一旦中止となったものと考えられる。なお、このような砂の堆積は、調査区内で所々認められており、その供給源、すなわち、洪水砂であるのか、飛砂であるのかを確認するため粒度分析や円磨度分析を行っている（第5章参照）。

また、畝の上面には、径3～10cm程度の円形の痕跡が認められており（写真図版6）、この正体を明らかにするために、軟X線分析を行った。また、ここで何が生産されていたのかを判断するため、花粉分析やプラントオパール分析をはじめとする土壌分析や軟X線分析を行った（第5章参照）。

さて、この遺構の時期であるが、耕作土中から出土した遺物のうち最も新しいものが伯耆国庁2段階に相当するものと考えられ、9世紀以降のものといえる。また、この畝の廃絶後に形成される中世の集落が13世紀頃と考えられることから、それ以前のものともいえる。

耕作痕2（第75・78図、PL.12）

調査区のほぼ全体にわたって確認しており、畝1の耕作土を除去した黒ボク上面～漸移層上面で検出した溝群である。畝1の畝とほぼ同方向へ直線的にのびており、畝1の畝間と部分的に重複している。溝12・13の付近には、これを挟むようにして、また、東西にのびる溝と直交するあたりで2条1対の溝が掘られている。

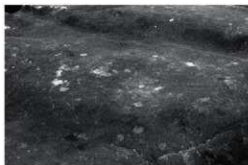
なお、調査区東側では、これらの溝を確認できなかった。これは、単に溝が掘られていなかったのか、表土剥ぎの際

に消滅したのか判断し難いが、溝の深さが比較的深く削平されたとは考え難く、また、土層観察から溝の断面を確認できなかったことから、前者の可能性が高いものと思われる。しかし、ここは層位的な調査が行われていない箇所であり、断言はできない。

溝の規模は、幅30～40cmを測り、断面形は逆台形を呈する。検出面からの深さは30cmほどであり、黒ボク～漸移層までを掘り込む。溝の間隔はおおむね2～2.5mとなっている。溝の長さは、溝の全体を確認できたところがなく判断し難いが、南北方向にのびる溝に挟まれた区間を一つの単位とするのならば、22～30mの範囲に収まるものと想定できる。

埋土は褐灰色土であり、畝1の耕作土と同質となっている。また、溝のうち幾つかの底面には凹凸が顕著に認められるものがあつた（写真図版7）。この凹凸は、この溝が耕作痕という遺構の性格上、鋤などによる農具の痕跡ではないかと想定される。

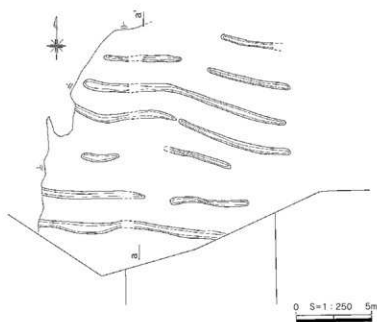
さて、この遺構の時期であるが、耕作痕という遺構の性格上、畝1を形成する前に行われた行為の痕跡であることから、畝1とほぼ同時期のものと捉えることができる。



写真図版6 畝の上面の様子



写真図版7 耕作痕2の底面の状況



第76図 畠2

畠2 (第76・78図、PL12)

調査区南西側に位置しており、重機による表土剥ぎの際、シルト層を掘り下げた直後に確認した。重機により遺構上面まで掘り下げたため残りが悪く、畝間みの検出となった。また、確認できた範囲が限定的であり、遺構の広がりをも明確にすることができなかった。しかし、この畠に伴うと考えられる耕作痕3の広がりから、調査区全体にわたり畠2が形成されていたものと考えられる。

畠は東西方向へ直線的にのびる

ものと、これよりもやや北に振り、a-a'付近で屈曲するものの2種類が認められた。これらは複数で一つのまとまりをなすものと考えられるが、確認範囲が限定的であることから、これらのまとまりの単位を明確にすることはできなかった。規模は、幅2～2.5mを測る。この畠の耕作土は、暗灰黄色シルトであり、下層の耕作痕3の状況などから、畠1の耕作土とその上層の細砂が混ざり合って形成されたものと考えられる。畝間に堆積していた埋砂は、明黄褐色細砂であり、掘立柱建物6・7や土坑10～12、墓2などの埋砂とほぼ同質であった。

耕作土や埋砂中から遺物が出土しておらず、時期を特定することができないが、遺構の検出状況や埋砂の状況などから判断して、畠1以降のものであり、掘立柱建物6や土坑10～12、墓2以前、すなわち、13世紀以前のものであると考えられる。

耕作痕3 (第77・78図)

調査区南西側で集中して確認しており、畠1の上面に堆積する細砂層除去後に検出した。これらの溝は、調査区全体において断片的に認められることから、この全面に掘り込まれていたものと考えられる。これらの溝には、畠1・2とほぼ同方向である東西にのびる溝と、これらと直交し南北にのびる溝の2種類が認められた。切り合い関係から、東西にのびる溝が先行するものと考えられる。

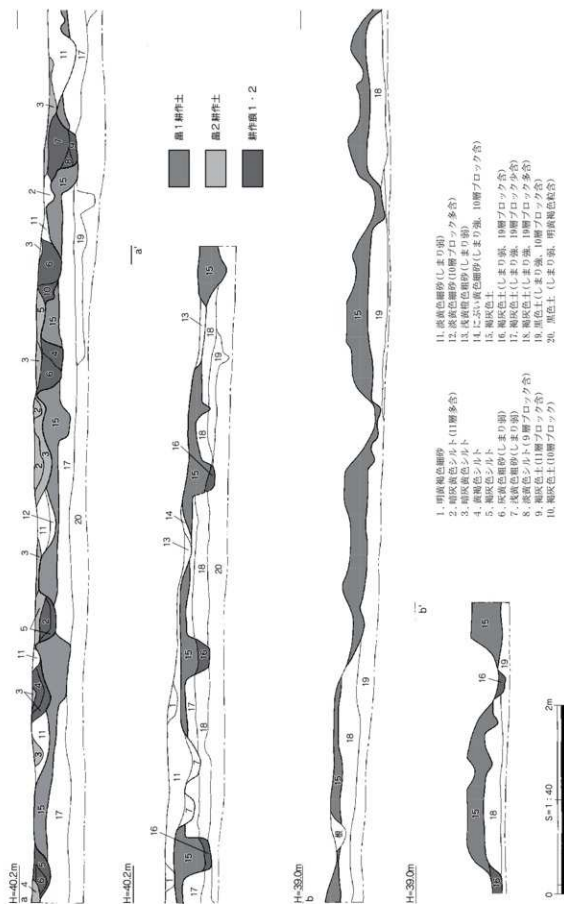
東西にのびる溝は、畠1の畝間をはずすようにして掘られており、効率よく耕起が行われた状況をうかがうことができる。これらの溝は、やや蛇行しながらのびており、また、部分的にはあるが螺旋状に交錯している箇所も確認された。規模は幅41～60cmを測り、断面形は逆台形を呈する。検出面からの深さは20cmを測り、畠1の耕作土から黒ボク中にかけて掘り込まれていた。埋土は畠1の上面を覆う細砂～粗砂を主体とするものであり、この中に畠1の耕作土が部分的に混ざるものである。

南北にのびる溝は、その検出数が少なく、全体像が判然としない。規模は幅20cmほどを測り、断面形は逆「U」字状を呈する。この埋土も南北にのびる溝とほぼ同じ傾向を示している。

さて、この遺構の時期であるが、耕作痕という遺構の性格上、畠2を形成する前の行為であり、こ



第77図 耕作痕 3



第78図 畠1・2、耕作痕2・3土層断面図

のことを考慮に入れると、畠2とほぼ同時期のものと捉えることができる。

(玉木)

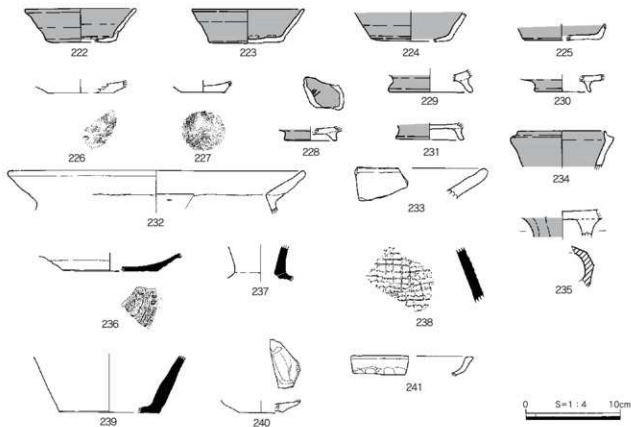
8. 遺構に伴わない遺物 (第79図、PL.26・27)

遺物は、古代に属するものが主に耕作土中から出土している。また、中世から近世に属するものの大半は、調査区中央の溝13・14付近において、重機による表土掘り下げ時に取り上げたものである。このため、出土層位については不明瞭であるが、溝14やそれ以降に造られた溝の埋砂中に帰属するものと考えられる。なお、240は調査区北東側のシルト層、241はピットからの出土である。

222～235は土師器であり、このうち222～225は、底部ヘラ切り後、内側から指によって押圧が加えられるといった、底部押圧技法の認められる坏である。内外面にはナデ、ヨコナデが施され、赤色顔料が塗布される。226・227は坏ないしは皿の底部であり、糸切りの痕跡が認められる。228～231は坏の高台部であり、いずれも赤色顔料を塗布する。また、228の坏部内面には、暗文が部分的に認められる。234は壺であり、狭い肩部から短い口縁部が真っ直ぐに立ち上がる。内外面ともにナデを施し、赤色顔料を塗布する。235は高坏の脚部であり、外面に面取りをなし、赤色顔料を塗布する。

236～239は須恵器である。このうち236は坏であり、底部に糸切りの痕跡が認められる。237は瓶類の頸部、238は甕の胴部、239は壺の底部である。240は青磁の皿であり、内面にヘラや櫛による文様が施される。241は瓦質の鍋である。

(玉木)



第79図 古代以降遺構外出土遺物

第6節 小結

調査の結果、縄文時代のたわみ状遺構1基、弥生時代の竪穴住居3棟、掘立柱建物1棟、たわみ状遺構2基、古墳時代の竪穴住居6棟、掘立柱建物4棟、土坑9基、方形土坑5基、硬化面1面、焼土面1面、溝11条、畦畔状遺構1面、古代～中世にかけての畠2面、耕作痕3面、溝2条、中世の掘立柱建物2棟、土坑3基、墓3基、溝2条、中世以降の水田を確認し、上伊勢第1遺跡が縄文時代～中世の集落、古代～中世の畠、中世以降の水田であることが判明した。以下、調査の成果について、時代ごとにまとめていく。

縄文時代 縄文時代の遺構・遺物は少なく、遺構としては早期のたわみ1が確認されているにすぎなかった。たわみ1からは、早期後半の高山寺式の範疇に収まる外面に栞間文、口縁部内面に斜行沈線を施した押型文土器が出土した。また、早期以外の遺物としては、晩期の突帯文土器が数点出土するのみであった。

弥生時代 弥生時代になると集落が営まれるようになる。ここでは、前期後半～中期中葉の遺構・遺物を確認した。このうち主体となるものは前期後半であった。遺構は前期後半の竪穴住居、掘立柱建物、たわみ状遺構が検出された。これらの遺構のうち、竪穴住居3は中央ピットの両端に柱穴をもち、床面に5本の柱穴をめぐるものであった。また、竪穴住居3は焼失住居と考えられるものであり、床面からは炭や焼土とともに表面に被熱を受けた石斧S8が出土した。ここから出土した炭化材の年代測定を行ったところ、 $2250 \pm 30 \sim 2440 \pm 30$ BP という結果が得られた（第5章参照）。

遺物は前期後半～中期中葉の弥生土器や石器が出土した。このうち注目されるものとして、磨製石包丁S1がある。S1は遺跡周辺において農耕が行われていた状況を示す資料となり注目される。中期中葉以降の遺構・遺物は確認されておらず、古墳時代にかけて集落は断絶するものと考えられる。

古墳時代 古墳時代になると再びこの地に集落が営まれるようになる。遺構は前期～後期までの竪穴住居、掘立柱建物、土坑、方形土坑、硬化面、焼土面、溝、畦畔状遺構を確認した。これらの遺構は調査区全体に認められ、また、遺跡周辺の耕地では土師器・須恵器が採集されていることから、遺跡の立地する微高地全体に集落が展開していたものと考えられる。

遺物は前期～後期の土師器や石器が出土した。このうち溝2から出土した土師器は、天神川Ⅱ～Ⅲ期の一括性の高いものであり、古墳時代前期における一括資料として注目される。

古代以降 古代になると状況が一変し、耕地となる。ここでは9～13世紀頃の畠2面、畠に伴う耕作痕3面を確認した。確認した遺構のうち、畠1は砂に覆われており、良好な状態で畝を検出することができた。また、これらの遺構は耕作痕1→耕作痕2→畠1→耕作痕3→畠2といった順序で形成されており、当時の土地利用の状況や農業技術を知ることができ注目される。

畠の廃絶後、中世の集落が形成されるようになり、掘立柱建物2棟、土坑3基、墓2基などが確認された。これらの遺構のうち、掘立柱建物2棟は棟方向が同一であり、その構造が総柱建物と側柱建物と異なっていることから、主屋とその付属施設であった可能性が考えられる。また、掘立柱建物2の付近には、屋敷墓と考えられる墓2・3が検出されている。

この集落廃絶後、調査区東側を中心に大規模な造成が行われるようになる。その後、水田が形成されるようになり、最近の景観に近い状況になっていくものと考えられる。

(玉木)

土器観察表 1

採掘 No.	掲載 No.	掲載 遺構名	調査時 遺構名	器種	種類	計測値 (cm)			調	色調	胎土	備考	
						口径	器高	底径					
6	1	たわみ 1	SI10	深鉢	縄文	*34.4			外面：横門文 内面：ナデ	灰白色	密、白色粒含	外面に横門文、口縁部内面に斜行乱取文	
					甕	弥生	*22.8			外面：口縁部ナデ、胴部ヘラミガキ 内面：ハケメ→ナデ→ヘラミガキ	にぶい 黄褐色	密、石英・橙 色粒・砂粒含	口唇部に斜目、胴部に3条の沈線、外面に塚付着
	3	鉢	縄文				内外面：ヘラミガキ	褐灰色	密、砂粒多含	口縁部に斜目付貼付突帯			
7	4	遺構外		鉢	縄文				外面：ヘラミガキ 内面：ナデ、ヘラミガキ（器面磨滅し不明瞭）	にぶい 黄褐色	密	口縁部に斜目付貼付突帯	
					鉢	縄文				内外面：ヘラミガキ	黒褐色	密	口縁部に斜目付貼付突帯
6				壺	弥生	*20.0			外面：ヘラミガキ 内面：口縁部ヘラミガキ、以下器面磨滅し不明	にぶい 褐色	密、石英・長 石多含	胴部に1条と2条の沈線	
7				壺	弥生	*20.2			外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	にぶい 黄褐色	密、石英・長 石含	外縁縁合、外面に赤彩痕残る	
8				壺	弥生	*16.0			外面：ハケメ→ヘラミガキ（器面磨滅し不明瞭） 内面：ハケメ→ヘラミガキ	にぶい 黄褐色	密、石英・橙 色粒含	外縁縁合、内外面に赤彩痕残る	
9				壺	弥生	*12.2			外面：ナデ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	褐色	密、砂粒含	胴部に1条の沈線、外縁縁合、外面に塚付着	
10				無蓋壺	弥生	*11.3			外面：ヘラミガキ 内面：ナデ→ヘラミガキ	にぶい 黄褐色	密、砂粒含	内外面に黒痕	
10	住居1	SI 6		壺	弥生				外面：ヘラミガキ 内面：ナデ	にぶい 褐色	密、石英・砂 粒含	肩部に削出突帯2条	
					壺	弥生				外面：器面磨滅し不明 内面：ハケメ→ヘラミガキ	黄褐色	密、石英・長 石含	胴部に3条の沈線、内外面赤 彩痕残る
					壺	弥生				外面：ハケメ→ナデ 内面：ナデ（器面磨滅し不明瞭）	淡黄色	密、長石少含	胴部に5条の沈線
					壺	弥生				内外面：ヘラミガキ	にぶい 褐色	密、石英・橙 色粒含	口縁部逆し字状、内縁縁合
					底部	弥生		*9.6		外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ハケメ	にぶい 褐色	密、石英・長 石含	外縁縁合
					底部	弥生		*8.5		外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ハケメ→ナデ	にぶい 黄褐色	密、石英・長 石含	
					底部	弥生		*8.4		外面：ナデ（器面磨滅し不明瞭） 内面：器面磨滅し不明	にぶい 黄褐色	密、砂粒含	
					鉢	弥生				内外面：ハケメ→ヘラミガキ	にぶい 黄褐色	密、砂粒含	内面に黒痕
12	住居2	SI 8		壺	弥生				内外面：ヘラミガキ（内面器面磨滅し不明瞭）	にぶい 褐色	密、砂粒含	外縁縁合、外面に塚付着	
					壺	弥生				内外面：ヘラミガキ	明赤褐色	密、石英・長 石含	口縁部が逆し字状、口唇部に斜目
					鉢	弥生		*17.7		外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ、ナデ	褐色	密、砂粒含	胴部に2条の沈線、外面に黒痕
					底部	弥生		*3.2		外面：ハケメ→ナデ→ヘラミガキ 内面：ナデ	褐色	密、石英・長 石・雲母多含	
					把手	弥生				外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ（器面磨滅し不明瞭）	にぶい 黄褐色	密、石英多含	耳耳状の突起部
24	住居 1・2	SI 0・8		壺	弥生			外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	にぶい 褐色	密、砂粒含	口縁部逆し字状		
13	住居3	SI 5		壺	弥生				内外面：ヘラミガキ	灰褐色	密、石英・長 石多含	口唇部に斜目	
					壺	弥生				外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	灰褐色	密、石英・長 石多含	外縁縁合
					壺	弥生				外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：赤痕→ヘラミガキ	暗灰黄色	密、石英多含	外縁縁合
					壺	弥生				内外面：ヘラミガキ（器面磨滅し調整不明瞭）	にぶい 黄褐色	密、石英多含	外縁縁合
					壺	弥生				外面：ナデ、条痕 内面：ナデ、ヘラミガキ	浅黄色	密、砂粒含	外縁縁合、胴部に3条以上の沈線、内外面に黒痕
					鉢	弥生		*15.0		外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	淡黄色	密、砂粒多含	口唇部に斜目
15	31	建物1	SB 6	壺	弥生			内外面：ナデ	灰黄褐色	密、石英・長 石・橙色粒含	胴部に2条の斜目付貼付突帯		
16	32	たわみ 2	たわみ 4	壺	弥生	*27.7			外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ハケメ→ナデ、ヘラミガキ	浅黄褐色	密、砂粒多含	内外面に赤彩痕残る	
18	遺構外	黒褐色土 群存遺 SD19		壺	弥生				内外面：ハケメ→ヘラミガキ	浅黄褐色	密、砂粒多含	外縁縁合、内外面に赤彩痕残る	
					壺	弥生		*13.6		外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ナデ→ハケメ	褐色	密、石英・長 石・橙色粒含	外縁縁合
					壺	弥生		*16.0		内外面：ヘラミガキ	褐色	密、石英・長 石含	胴部に3条以上の沈線
					壺	弥生				内外面ともに器面磨滅し調整不明	褐色	密、石英多含	胴部に4条以上の斜目付貼付突帯

土器観察表 2

押戻 No.	国 No.	国 道	調査 時	器種	種類	計測値 (cm)			調 整	色 調	胎 土	備 考
						口径	器高	底径				
18	遺構外	37	甕	弥生				外面：口縁部ナデ、胴部ヘラミガキ 内面：ナデ→ヘラミガキ	にぶい 黄褐色	紫、石英・長 石含	口唇部に割目、外縁接合、胴 部に保付着	
		38	甕	弥生				外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：器面磨減し不明	にぶい 赤褐色	紫、石英・長 石・角閃石含	外縁接合	
		39	甕	弥生	※17.8			外面：板状工具によるナデ 内面：ナデ	にぶい 褐色	紫、砂粒多含	外縁接合、外面に保付着	
		40	黒褐色 土	甕	弥生				外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	にぶい 赤褐色	紫、長石多含	外縁接合
		41	甕	弥生				内外面：ナデ	にぶい 黄褐色	紫、白色粒含	外縁接合	
		42	黒褐色 土	甕	弥生				外面：染指→ヘラミガキ 内面：ナデ、ヘラミガキ	淡黄色	紫、砂粒多含	胴部に3条以上の沈線、外縁 接合、外面に赤彩痕残る
		43	甕	弥生				内外面：ナデ→ヘラミガキ	にぶい 黄褐色	紫、石英・長 石・褐色粒含	口縁部が逆し字状、胴部に3 条以上の沈線、内縁接合、外 面に赤彩痕残る	
		44	甕	弥生				内外面：ハケメ→ヘラミガキ	褐色	紫、砂粒含	外縁接合、外面に保付着	
		45	黒褐色 土	鉢	弥生				外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ、染指	浅黄褐色	紫、砂粒含	内面に赤彩痕残る
		46	黒褐色 土	底部	弥生	※14.0			外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ→ナデ	浅黄褐色	紫、石英・長 石・褐色粒含	
47	黒褐色 土	底部	弥生	※9.3			外面：染指→ヘラミガキ 内面：染指	にぶい 黄褐色	紫、石英・長 石多含			
48	甕	弥生	※13.8				外面：口縁部ナデ、胴部ハケメ→ナデ→ ヘラミガキ 内面：口縁部ナデ、胴部ハケメ→ヘラミ ガキ	にぶい 褐色	紫、石英少含	内外面に赤彩痕残る		
21	住居4	S1	49	甕	土師	15.7	24.8	外面：口縁部ハケメ→ナデ、肩部ハケメ→ ナデ、ミガキ、胴部ハケメ→ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ	にぶい 黄褐色	紫、石英・長 石含	肩部に割変、外面に保付着、 赤彩痕残る	
			50	甕	土師	※13.8	29.3	外面：ハケメ→ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ	にぶい 黄褐色	紫、石英・長 石含	肩部に割変、外面に保付着、 赤彩痕残る	
			51	甕	土師	※14.0		外面：口縁部ハケメ→ミガキ、ナデ、肩 部ハケメ→ナデ、ミガキ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ケズリ →ミガキ	にぶい 黄褐色	紫	外面肩部に黒斑、全体に保付 着	
			52	坏蓋	須恵				内外面：ヨコナデ	灰色	紫	
23	住居5	S2	53	甕	土師	※12.2		外面：口縁部ナデ、肩部ハケメ→ナデ、 胴部ハケメ→ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ (内外面ともに器面磨減し不明瞭)	灰白色	紫、石英・長 石含	外面胴部下半に保付着	
			54	甕	土師	※13.4		内外面：ミガキ、ナデ（器面磨減し不明 瞭）	浅黄褐色	紫	外面に赤彩痕残る	
			55	甕	土師			外面：ハケメ→ミガキ 内面：ミガキ、ナデ	浅黄褐色	紫		
			56	甕	土師			内外面：器面磨減し調整不明	浅黄褐色	紫		
			57	甕	土師			外面：ミガキ、ナデ 内面：ハケメ→ナデ、ミガキ	浅黄褐色	紫、石英粒含		
			58	甕	土師	※13.6		内外面：ナデ、ミガキ	浅黄褐色	紫、石英多含		
			59	甕	土師	※16.9		内外面：ミガキ、ナデ	浅黄褐色	紫、石英多含	外面に保付着	
			60	鉢	土師			外面：ナデ（器面磨減し調整不明瞭） 内面：ミガキ、ナデ	浅黄褐色	紫	口唇部に赤彩痕残る	
			61	脚付甕	土師			内外面：ヘラミガキ	にぶい 褐色	紫	赤彩痕残る	
			62	小型 丸底甕	土師	※9.6		内外面：ハケメ→ナデ（器面磨減し調整 不明瞭）	浅黄褐色	紫		
			63	脚部	土師		7.2	外面：ハケメ→ナデ 内面：ナデ (内外面ともに器面磨減し調整不明瞭)	浅黄褐色	紫、石英・長 石少含		
			64	脚部	土師			内外面ともに器面磨減し調整不明	浅黄褐色	紫、石英・長 石・褐色粒少 含	内面に赤彩痕残る	
			65	甕	土師			外面：ハケメ→ナデ	灰褐色	紫、石英・長 石少含	把手部	
			66	坏身	須恵	※13.6	4.0	外面：ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	灰白色	紫	左回転のロクロ、断面には赤 い赤褐色	
67	坏身	須恵	※11.8		内外面：ヨコナデ	にぶい 黄褐色	紫	焼成不良				
68	坏身	須恵			外面：ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：ヨコナデ、底部仕上げナデ	灰白色	紫、石英・長 石含	右回転のロクロ				
69	高坏	須恵	※10.8		外面：ヨコナデ、底部分キメ ヨコナデ、裏面仕上げナデ	灰色	紫	三方向の透かし穴				
70	甕	土師			外面：ハケメ→ナデ 内面：ヘラケズリ	浅黄褐色	紫、石英少含					

土器観察表3

押図 No.	掲載 No.	掲載 遺構名	調査時 遺構名	器種	種類	計測値 (cm)			調 整	色 調	胎 土	備 考
						口径	器高	底径				
24	71	住居6	SK4	甕	土師				外面：復付着のため不明 内面：ミガキ、ナデ	黒褐色	密	外面に復付着
	72			甕	土師				外面：ハケメ→ナデ→ミガキ 内面：ヘラズリ→ナデ、ミガキ (内外面ともに器面磨減し不明瞭)	褐色	密、砂粒含	肩部に刺突文
	73			高坏	土師					外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	褐色	密
26	74	住居7	SI3	壺	土師	●20.8			内外面ともに器面磨減し調整不明	淡黄色	密	
	75			壺	土師	●17.0			内外面：ミガキ、ナデ	に濃い 褐色	密、石英・長 石含	外面に復付着
	76			甕	土師	●13.8			外面：口縁部ナデ、肩部ハケメ→ナデ、 ミガキ、胴部ハケメ 内面：口縁部ナデ、胴部ヘラズリ (内外面ともに器面磨減し不明瞭)	淡黄褐色	密、石英・長 石・砂粒含	胴部に刺突文、外面胴部に復 付着
	77			甕	土師	●14.6			外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメ →ナデ、ミガキ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ヘラズ リ→ミガキ	に濃い 黄褐色	密、長石・石 英含	外面に復付着
	78			甕	土師	●13.8			外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメ →ナデ、ミガキ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラズ リ→ミガキ	に濃い 黄褐色	密、石英・砂 粒多含	肩部に刺突文、外面に復付着、 赤彩痕残る
	79			小型 丸底壺	土師	●10.6			外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ→ナデ	に濃い 黄褐色	密	外面に復付着
	80			小型 丸底壺	土師	8.0	8.4		外面：底部ハケメ 内面：胴部ヘラズリ (内外面ともに器面磨減し調整不明瞭)	褐色	密、石英・砂 粒含	
	81			小型 丸底壺	土師	10.2	8.4		外面：口縁部ハケメ→ナデ→ミガキ、胴 部ハケメ、ナデ、ミガキ 内面：口縁部ハケメ→ナデ、胴部ヘラズ リ→ナデ	に濃い 黄褐色	密	外面底部に黒斑
	82			高坏	土師	●20.6			内外面：ハケメ→ナデ→ヘラミガキ (器 面磨減し不明瞭)	淡黄色	密	外面口縁部に刺突文
	83			高坏	土師	●17.8			外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	淡黄褐色	密	
84	高坏	土師	●16.2			外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ (器面磨減し調整不明 瞭)	褐色	密				
85	高坏	土師	14.4			外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	褐色	密	内外面に復付着			
86	高坏	土師	13.2			外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	に濃い 黄褐色	密	内外面に復付着、赤彩			
87	胎形 器台	土師				外面：ミガキ、ナデ 内面：ヘラズリ→ミガキ	褐色	密				
27	88			甕	土師	●15.6			外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメ →ミガキ、ナデ、胴部ハケメ→ナデ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラズ リ	に濃い 黄褐色	密、石英・長 石・砂粒含	胴部に刺突文→ナデ、外面に 復付着
	89			甕	土師	●17.4			外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメ →ナデ、ミガキ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラズ リ→ミガキ	に濃い 黄褐色	密、石英・砂 粒少含	内外面口縁部に復付着
	90			坏蓋	須恵	●13.9			内外面：ヨコナデ	灰白色	密	焼成不良
	91			坏身	須恵	11.8	4.8		外面：ヨコナデ、底部回転ヘラズリ 内面：ヨコナデ、底部仕上げナデ	灰色	密、砂粒・長 石含	
	92			坏身	須恵	●11.9			外面：ヨコナデ、底部回転ヘラズリ 内面：ヨコナデ、底部仕上げナデ	青灰色	密	右回転のロクロ
	93			坏身	須恵				外面：ヨコナデ、底部ヘラズリ 内面：ヨコナデ	暗青灰 色	密	左回転のロクロ
	94			甕	須恵	21.5	41.7		外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ、当て具痕	灰色	密	外面に自然輪郭がかかる
28	85	住居8	SI4	甕	土師				外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメ →ナデ、ミガキ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ナデ→ ミガキ、胴部ヘラズリ→ミガキ	に濃い 黄褐色	密	
	86			甕	土師				外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ヘラズリ	淡黄褐色	密	外面に黒斑
	87			高坏	土師	16.6			外面：ハケメ→ナデ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	褐色	密	
35	88	土坑8	SK13	甕	弥生			外面：委實→ヘラミガキ 内面：器面磨減し不明	に濃い 褐色	密、石英・長 石含	口縁部逆字状、口唇部に刻 目	
37	99	方型 土坑2	SK15	甕	土師			外面：ミガキ、ナデ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラズ リ、ミガキ	に濃い 黄褐色	密、石英少含		

土器観察表 4

押戻 No.	図 No.	掲載 遺構名	調査時 遺構名	器種	種類	計測値 (cm)			調 整	色 調	胎 土	備 考	
						口径	器高	底径					
42	100	溝 2	SD-4	甕	土師				外面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部→胴部ハケメ→ミガキ、ナデ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ミガキ、胴部ヘラケズリ→ミガキ	にぶい 黄褐色	赤、石英・長石 赤、褐色粒	内外面に黒斑、口縁部・胴部に赤彩痕残る	
	101								外面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ハケメ→ナデ、ミガキ、胴部ハケメ→ナデ 内面：口縁部→胴部ナデ、ミガキ、胴部ヘラケズリ→ミガキ	にぶい 黄褐色	赤、石英・長石 石含	胴部に波状文、内面底部に指頭1条、外面下半に煤付着	
	102								内外面：ナデ、ミガキ	にぶい 黄褐色	赤、石英・長石 赤	内外面に赤彩痕残る	
	103								直口甕 土師 *10.4	外面：ハケメ→ミガキ 内面：ミガキ	にぶい 黄褐色	赤	
	104								甕 土師	外面：ミガキ、ナデ 内面：ミガキ、ナデ、ヘラケズリ→ミガキ	にぶい 黄褐色	赤	胴部に1条の沈線、刺突文、内面に赤彩痕残る
	105								胴部 土師	外面：肩部ハケメ→ナデ、胴部ハケメ→ナデ 内面：ヘラケズリ→ミガキ、ナデ	褐色	赤、石英・長石 石含	胴部に1条の平行沈線、外面胴部に赤彩の痕跡残る
	106								甕 土師 *15.2	外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメ→ナデ、ミガキ、胴部下半ナデ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケズリ→ミガキ	にぶい 黄褐色	赤、石英・長石 石含	胴部に3条の平行沈線、波状文、内面胴部下半に指頭1条、外面胴部下半に煤付着、赤彩痕残る
	107								甕 土師 *12.8	外面：ミガキ、ナデ 内面：ミガキ、ナデ、ヘラケズリ	にぶい 黄褐色	赤、石英・長石 石含	外面に煤付着、内面に黒斑
	108								甕 土師 *12.2	外面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ハケメ→ミガキ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケズリ→ミガキ	浅黄褐色	赤	外面胴部に刺突文、外面に煤付着
	109								甕 土師 *13.4	外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ミガキ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケズリ	灰黄褐色	赤、石英・長石 石含	外面口縁部に煤付着
110	甕 土師 *14.0	外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメ→ナデ、ミガキ、胴部ハケメ→ナデ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケズリ→ナデ (器面磨減し不明)	灰黄褐色	赤、石英・長石 石含	外面胴部に煤付着								
111	甕 土師 *15.6	外面：ミガキ、ナデ 内面：ミガキ、ナデ、ヘラケズリ	にぶい 黄褐色	赤、石英・褐色粒 赤	外面に煤付着								
112	甕 土師 *16.4	外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ミガキ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケズリ	にぶい 黄褐色	赤	外面に煤付着								
113	甕 土師 *17.2	外面：ミガキ、ナデ 内面：ナデ (器面磨減し不明)	浅黄褐色	赤、砂粒含	外面に煤付着								
114	甕 土師 *14.8	外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ミガキ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケズリ	灰黄褐色	赤、石英・長石 石含	内外面に煤付着								
115	甕 土師 *15.0	外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメ→ナデ、ミガキ 内面：ミガキ、ナデ、ヘラケズリ	黄褐色	赤、砂粒含	胴部に波状文、外面に煤付着								
116	甕 土師 *18.6	外面：ミガキ、ナデ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケズリ (内外面ともに器面磨減し不明)	灰白色	赤									
117	甕 土師 *14.0	外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメ→ミガキ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケズリ→ミガキ	黄褐色	赤、石英少含	4条の波状文、外面に煤付着、赤彩痕残る								
118	甕 土師 *16.4	外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメ→ミガキ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケズリ→ミガキ	にぶい 褐色	赤	胴部に9~11条の平行沈線、内外面に赤彩痕残る								
119	SD 1・4	甕 土師 *18.3	外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメ→ナデ、ミガキ 内面：ミガキ、ナデ、ヘラケズリ→ミガキ	にぶい 黄褐色	赤、石英含	胴部に平行沈線、外面に煤付着							
120	甕 土師 *17.4	外面：口縁部ナデ、肩部ハケメ→ナデ 内面：口縁部ナデ、肩部ヘラケズリ (内外面ともに器面磨減し調整不明)	にぶい 黄褐色	赤	内外面に煤付着								
121	甕 土師 *18.0	外面：ミガキ、ナデ (器面磨減し不明) 内面：ミガキ、ナデ、ヘラケズリ	灰白色	赤									
122	甕 土師 *18.0	外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメ→ミガキ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケズリ→ナデ、ミガキ	にぶい 黄褐色	赤、石英・長石 石多含	外面に煤付着								
123	甕 土師 *24.3	外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメ→ナデ、ミガキ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケズリ	にぶい 黄褐色	赤、石英・長石 石含	口縁部に突起、肩部上半に刺突文、8~11条の平行沈線、外面胴部に煤付着								
124	甕 土師 *30.2	外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメ→ナデ、ミガキ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ヘラケズリ→ミガキ	にぶい 黄褐色	赤、石英・長石 石・砂粒含	外面に煤付着								
125	鉢 土師 *28.2	外面：ナデ、ミガキ 内面：ミガキ	褐色	赤、石英・長石 石多含	内外面に赤彩痕残る								
126	高坏 土師 23.6	内外面：ハケメ、ヘラミガキ	灰白色	赤、石英・砂粒 赤	内外面に赤彩痕残る								
127	高坏 土師 24.2	外面：ハケメ→ナデ、ヘラミガキ 内面：ハケメ→ナデ→ミガキ	にぶい 褐色	赤、石英・長石 石含	赤彩								
128	高坏 土師 *23.3	外面：ハケメ→ナデ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	にぶい 黄褐色	赤、砂粒含	内面に黒斑								

土器観察表 5

押図 No.	掲載 No.	掲載 遺構名	調査時 遺構名	器種	種類	計測値 (cm)			調 整	色 調	胎 土	備 考	
						口径	器高	底径					
44	溝 2	SD-4		高坏	土師	24.0	15.7	15.1	外面：坏部ハケメ→ヘウミガキ、脚部ハケメ 内面：坏部ヘウミガキ、脚部ナデ、ハケメ	に濃い黄褐色	密	坏部内面に黒肌	
				高坏	土師				内外面：ヘウミガキ	浅黄褐色	密		
				高坏	土師	*16.2			外面：ヘウミガキ 内面：ハケメ→ナデ→ヘウミガキ	灰黄色	密、砂粒含	口縁部に煤付着	
				高坏	土師	*16.8			内外面：ヘウミガキ	灰黄褐色	密、石英・長石含		
				高坏	土師	*12.4			外面：ヘウミガキ 内面：ハケメ→ヘウミガキ	浅黄褐色	密	外面に黒肌	
				高坏	土師	*11.8			外面：ハケメ→ヘウミガキ 内面：ヘウミガキ	に濃い黄褐色	密	内外面に赤彩残存	
				低脚坏	土師	*12.8			外面：ハケメ→ヘウミガキ 内面：ヘウミガキ	に濃い黄褐色	密、砂粒含		
				低脚坏	土師		*5.2		内外面：坏部ヘウミガキ、脚部ナデ	に濃い黄褐色	密	内面脚部に赤彩残存	
				低脚坏	土師		*6.0		外面：ヘウミガキ、ナデ 内面：坏部ヘウミガキ、脚部ナデ	に濃い黄褐色	密、石英含	煤付着	
				小型丸底壺	土師	*9.9			外面：口縁部ナデ→ミガキ、ハケメ→ミガキ 内面：口縁部ミガキ、胴部ヘラケズリーミガキ	黄褐色	密	外面に赤彩残存	
				小型器台	土師	10.8	11.6	*12.1	外面：ハケメ→ミガキ 内面：坏部ミガキ、脚部ナデ、ハケメ	に濃い黄褐色	密、石英・長石・褐色粒含	脚部内面器面磨減し調整不明	
				笠形器台	土師	*19.8	*12.3	*17.4	外面：上半ナデ→ヘウミガキ、下半ミガキ、ナデ 内面：上半ヘウミガキ、下半ヘラケズリーミガキ、端部ナデ (器面磨減し不明瞭)	に濃い褐色	密、石英・長石少含	内外面に赤彩残存	
				笠形器台	土師	*21.6			外面：上半ナデ→ヘウミガキ、下半ミガキ、ナデ 内面：上半ヘウミガキ、下半ヘラケズリーミガキ、端部ナデ	に濃い黄褐色	密、石英・長石含	内外面端部に赤彩残存	
				笠形器台	土師	*20.0	11.8	*18.2	外面：ナデ→ヘウミガキ 内面：上半ヘウミガキ、下半ヘラケズリーミガキ (内外面ともに器面磨減し不明瞭)	淡黄色	密、石英・砂粒含		
				笠形器台	土師	*21.2			外面：ミガキ 内面：上半ミガキ、下半ヘラケズリー	褐色	密、石英・長石含	上半に平行沈殿、内面に赤彩残存	
				笠形器台	土師				外面：ミガキ→ナデ 内面：ヘラケズリー→ナデ、ミガキ、端部ナデ	に濃い黄褐色	密、石英・褐色粒含	内面に黒肌	
				笠形器台	土師	*15.8			外面：ナデ→ミガキ 内面：上半ヘラケズリー→ミガキ、下半ヘラケズリー、端部ナデ	に濃い黄褐色	密、石英・長石・褐色粒含	内面に赤彩残存	
笠形器台	土師		*18.6		外面：ハケメ→ナデ 内面：上半ヘウミガキ、下半ヘラケズリー→ナデ、ミガキ	に濃い黄褐色	密、石英・長石含	内外面に赤彩残存					
笠形器台	土師				外面：ナデ、ミガキ 内面：ケズリー→ナデ、端部ナデ	黄褐色	密、石英・長石含	内外面に煤付着、外面に赤彩残存					
46	溝 4	SD88・94	SD88	甕	土師	*14.0			外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメ→ナデ、ミガキ 内面：口縁部ナデ、肩部ヘラケズリー→ナデ	に濃い黄褐色	密	内面に黒肌、外面に赤彩残存	
			SD88・94	高坏	土師	17.8	15.4	*11.0	外面：ナデ→ヘウミガキ、脚部面取りミガキ (器面磨減し不明瞭) 内面：坏部ナデ、ナデ→ヘウミガキ、脚部ナデ、多角形肌ハケメ、端部ナデ	褐色	密、石英多含	口縁部に2条の沈線	
	溝 5	SD96	SD96・SK 9	SD96	甕	土師	*14.3			外面：口縁部：ハケメ→ナデ、肩部ハケメ→ナデ 内面：口縁部ハケメ→ナデ、胴部ヘラケズリー	浅黄褐色	密、石英・長石・褐色粒含	口縁部に刺突、外面に煤付着
				SD96	甕	土師	*15.0			外面：口縁部ナデ、肩部ハケメ→ナデ、端部ハケメ 内面：口縁部ナデ、胴部ヘラケズリー (内外面ともに器面磨減し不明瞭)	灰白色	密、石英多含	
				高坏	土師	*17.8			内外面：ハケメ→ヘウミガキ	に濃い浅黄褐色	密、石英少含	外面に煤付着、内外面に赤彩残存	
				手捏ね	土師	*9.1	3.1		外面：ハケメ→ナデ 内面：ナデ、ミガキ	灰褐色	密、砂粒少含	口縁部にへら線状微文	
				短頸壺	須恵	*7.9			内外面：ヨコナデ	灰色	密	外面に自然釉がかかる	
甕	土師	*21.0	8.0		外面：ハケメ→ヘウミガキ、ナデ 内面：ヘラケズリー→ミガキ、ナデ	褐色	密、石英・長石多含						
甕	土師				外面：垂瓶→ナデ 内面：ヘラケズリー	明赤褐色	密、長石・褐色粒含	外面に煤付着					
47	溝 7	SD95	SD95	低脚坏	土師	*14.0	3.0	4.0	内外面：ヘウミガキ、脚部ナデ	褐色	密	赤彩	
			SD90・93	坏身	須恵				外面：ヨコナデ、底部にへらケズリー 内面：ヨコナデ、底部に上げナデ	灰白色	密	集成不良	
			坏身	須恵				内外面：ヨコナデ	灰色	密	外面に自然釉がかかる		

土器観察表 6

押戻 No.	図載 No.	掲載 遺構名	調査時 遺構名	器種	種類	計測値 (cm)			調 整	色 調	胎 土	備 考	
						口径	器高	底径					
48	溝 8	SD92		160	甕	土師	164	25.8		外面：口縁部ナデ、肩部～底部ハケメーナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ (内外面ともに器面磨減し調整不明)	にぶい 棕色	赤、石英・長石 石含	外面胴部に煤付着
				161	甕	土師	110			内外面ともに器面磨減し調整不明	棕色	赤、石英含	外面に煤付着
				162	高坏	土師				外面：ハケメヘラミガキ 内面：坏部ヘラミガキ、胴部ヘラケズリ	浅黄棕色	赤、石英・長石 石少含	
				163	脚付甕	土師	138	8.5	8.3	外面：ハケメヘラミガキ 内面：ヘラミガキ、胴部ナデ	赤褐色	赤、砂粒微含	赤影
				164	羽釜	土師				外面：ナデ	棕色	赤、砂粒含	外面に煤付着
				165	坏蓋	須恵	137			内外面：ヨコナデ	灰色	赤、長石含	
				166	坏身	須恵	117	5.0		外面：ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ、ナデ 内面：ヨコナデ、底部仕上げナデ (内外面ともに器面磨減し調整不明)	灰色	赤、長石少含	右回転のロクロ、焼成不良
				167	皿	土師	111			内外面：ナデ	浅黄棕色	赤	赤影
				168	溝 10	SD93		甕	土師	120		外面：口縁部ナデ、肩部ハケメーナデ (器面磨減し不明)	にぶい 黄棕色
49	溝 11	SD91		169	甕	土師	137		内外面：ミガキ、ナデ	明黄棕色	赤	内外面に煤付着	
				170	甕	土師	143		内外面：ミガキ、ナデ (器面磨減し調整不明)	にぶい 棕色	赤、石英・長石 多含		
				171	甕	土師			内外面：ミガキ、ナデ	浅黄棕色	赤		
				172	高坏	須恵			内外面：ヨコナデ	明青灰色	赤、長石少含	胴部に 2 方向以上の透かし穴	
50	173	廻轉	水田	甕	弥生			外面：染付ナデ、ヘラミガキ 内面：ナデ、ヘラミガキ	明赤褐色	赤、石英・長石 多含			
51	遺構外			174	黒褐色土	甕	土師	160		外面：口縁部ナデ、胴部ハケメーナデ 内面：口縁部ナデ、肩部ヘラケズリヘラミガキ	浅黄棕色	赤、砂粒含	内面に赤影残る
				175	遺構外	甕	土師	145		外面：口縁部ミガキ、ナデ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケズリヘラミガキ	浅黄棕色	赤	
				176	甕	土師	140		外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメーナデ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケズリヘラミガキ	にぶい 黄棕色	赤、石英・長石 石含	外面に煤付着	
				177	耕作溝 SD69	甕	土師	147		外面：ミガキ、ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ (器面磨減し不明)		赤	外面に煤付着し、色調不明
				178	耕作溝 SD77	甕	土師			外面：ミガキ、ナデ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケズリ (内外面ともに器面磨減し調整不明)	にぶい 黄棕色	赤、砂粒少含	
				179		甕	土師	130		内外面：ミガキ、ナデ	明赤褐色	赤、石英少含	
				180		甕	土師			内外面：ミガキ、ナデ	棕色	赤	
				181	耕作土	甕	土師	156		内外面：ミガキ、ナデ	にぶい 黄棕色	赤	
				182	耕作土	甕	土師	140		内外面：ミガキ、ナデ	黒褐色	赤、石英・長石 石多含	内外面に煤付着
				183		甕	土師	168		内面：胴部ケズリ (内外面ともに器面磨減し不明)	淡黄棕色	赤、石英・長石 多含	
				184		甕	土師	132		外面：ミガキ、ナデ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケズリ	浅黄棕色	赤、石英少含	
				185	耕作土	甕	土師	144		外面：口縁部ナデ 内面：ナデ、ミガキ、胴部ヘラケズリ	棕色	赤、石英・長石 石含	外面に煤付着
				186		甕	土師			外面：ミガキ、ナデ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケズリ	黒色	赤	外面に煤付着
				187		高坏	土師	22.0		内外面ともに器面磨減し調整不明	赤褐色	赤	
				188		高坏	土師	18.4		内外面：ヘラミガキ	にぶい 赤褐色	赤	内外面に赤影残る
				189	遺構外	小型丸底	土師	9.0		外面：口縁部ハケメーナデヘラミガキ、胴部ハケメーナデミガキ 内面：口縁部ナデ、ミガキ、胴部ヘラケズリ	にぶい 黄棕色	赤	
				190	遺構外	坏身	須恵	11.8		外面：ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：ヨコナデ、底部仕上げナデ	灰色	赤、石英・長石 石含	右回転のロクロ
				191	耕作土	坏身	須恵	16.0		内外面：ヨコナデ	灰色	赤	

土器観察表 7

採回 No.	掲載 No.	掲載 遺構名	調査時 遺構名	器種	種類	計測値 (cm)			調 整	色 調	胎 土	備 考	
						口径	器 高	底径					
51	192	遺構外	SD 1	短頸壺	須恵	*9.7			内外面: ヨコナデ	灰色	密	外面に自然釉がかかる	
	193		甕	須恵				外面: タタキ 内面: 当貝瓦	赤灰色	密	外面に自然釉がかかる		
	194		耕作溝	甕	土師				外面: ハケメ、ナデ 内面: ヘラケズリ	にぶい 黄褐色	密、石英少含	外面に赤彩残る	
61	195	土坑11	SK 2	皿	土師				内外面: ヨコナデ	浅黄褐色	密	底部糸切り	
	196			碗	瓦質				内外面: ヨコナデ	灰色	密		
63	197	墓1	墓石1	碗	磁器		*4.7		灰白色	密	内外面に浅黄色釉がかかる		
64	198	墓2	SX 1	皿	土師	7.1	1.7	4.6	内外面: ヨコナデ	褐色	密、褐色粒含	底部回転糸切り	
	199			椀	土師	14.4	4.3	9.1	外面: ヨコナデ 内面: ヨコナデ、底部仕上げナデ	灰白色	密	内外面に煤付着、底部回転糸切り	
65	200	墓3	SX 2	皿	土師		*7.0		内外面: ヨコナデ	にぶい 黄褐色	密	底部回転糸切り	
67	201	溝12	SD 1	坪	土師	*11.0	*6.9		内外面: ナデ	にぶい 黄褐色	密	底部押圧、赤彩	
	202			皿	土師				内外面: ナデ、ヘラミガキ	にぶい 黄褐色	密、砂粒含	赤彩	
	203			甕	土師	*35.8			外面: ナデ 内面: 白縁部ナデ、胴部ヘラケズリ (内外面ともに器面磨滅し調整不明瞭)	にぶい 黄褐色	密、石英・長石・赤色粒・珪母多含	外面に煤付着	
	204			甕	土師	*25.9			内外面: ハケメ→ナデ、ミガキ	浅黄褐色	密、石英・長石・褐色粒含		
	205			碗	磁器				内外面: ヨコナデ	灰白色	密	内外面に白色釉がかかる	
	206			碗	磁器		*2.9			外面: ヘラケズリ	にぶい 黄褐色	密	内外面に緑色釉がかかる
68	207	溝13	SD90	坪	土師		*8.6		内外面: ナデ	淡黄褐色	密	底部押圧、ヘラ切り後ナデ、赤彩、瓦面に黒炭	
	208			坪	土師		*6.0		内外面: ナデ	褐色	密	底部押圧、ヘラ切り、赤彩	
	209			脚付桶	土師				外面: ヘラミガキ (器面磨滅し調整不明瞭) 内面: ヘラミガキ、胴部ナデ	明黄褐色	密、石英・砂粒含	外面に赤彩残る	
	210			皿	土師				外面: ナデ、ミガキ 内面: ケズリ→ナデ、ミガキ	褐色	密、石英・長石多含		
	211			甕	土師				内外面: ミガキ、ナデ	褐色	密、石英少含		
	212			坪身	須恵	*11.6			内外面: ヨコナデ	灰色	密		
69	213	溝14	SD 5	灯明皿	磁器	*8.4	*1.7	*4.7	内外面: ヨコナデ	明赤灰色	密	底部回転糸切り、内面に暗赤灰色釉がかかる	
	214			灯明皿	磁器	*11.0			外面: ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面: ヨコナデ	灰赤色	密	内面に黒色釉がかかる	
	215			碗	磁器	*10.4			内外面: ヨコナデ	浅黄褐色	密	内外面ともに灰白色釉がかかる	
	216			榊鉢	甕前				内外面: ヨコナデ	灰赤色	密	榊鉢放射状焼、IV期	
	217			榊鉢	甕前				内外面: ヨコナデ	褐色	密	榊鉢放射状焼、V期	
70	218	溝15	SD 6	坪	土師	*11.9		7.2	外面: 器面が風化し調整不明瞭 内面: ナデ	灰白色	密、石英・褐色粒少含	底部ヘラ切り	
	219			甕	土師				外面: ミガキ、ナデ 内面: ハケメ→ミガキ、ナデ	褐色	密、石英・長石・珪母少含		
	220			甕	須恵				外面: 格子タタキ→ハケメ 内面: ハケメ	灰色	密		
	221			甕	須恵				外面: 格子タタキ→ハケメ 内面: ハケメ	灰色	密、長石・灰色粒含		
	222			坪	土師	*11.5	3.6	*7.6	内外面: ナデ	にぶい 黄褐色	密	底部押圧、赤彩	
79	223	遺構外	拡築区、耕作溝	坪	土師	*11.8	3.7	7.5	内外面: ナデ	明赤褐色	密、石英・長石含	底部押圧、ヘラ切り、板目粗残る、赤彩	
	224			坪	土師		*14.0		内外面: ナデ	にぶい 黄褐色	密	赤彩	
	225			坪	土師		*8.6			外面: ナデ、底部ヘラケズリ 内面: ナデ	にぶい 黄褐色	密	底部押圧、赤彩
	226			皿	土師		*7			内外面: ヨコナデ	明赤褐色	密	底部回転糸切り
	227			皿	土師		*4.5			外面: ヨコナデ 内面: ヨコナデ、底部仕上げナデ	浅黄褐色	密	底部回転糸切り、内外面に赤彩残る

土器観察表 8

押図 No.	掲載 No.	掲載 遺構名	調査時 遺構名	器種	種類	計測値 (cm)			調整	色調	胎土	備考		
						口径	器高	底径						
79	228	遺構外	耕作溝 SD75	高台	土師			*5.1	外面：ナデ 内面：ヘラミガキ	にぶい 黄褐色	密	内面に暗文、赤彩		
	229			高台	土師			*8.8	外面：ナデ 内面：ヘラミガキ	にぶい 褐色	密	赤彩		
	230			耕作土	高台	土師			*6.0	外面：ナデ 内面：断面磨滅し調整不明	浅黄褐色	密	外面に赤彩痕残る	
	231			耕作土	高台	土師			*7.2	外面：ナデ 内面：ヘラミガキ	にぶい 黄褐色	密	赤彩	
	232			耕作土	甕	土師	*31.2			外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ	にぶい 黄褐色	密、砂粒少含	外面に煤付着	
	233				甕	土師				内外面：ナデ	黒色	密	外面に煤付着	
	234				短頸壺	土師	*8.6			内外面：ナデ	明赤褐色	密	赤彩	
	235				高杯	土師				外面：ケズリ 内面：坪部ヘラミガキ	浅黄褐色	密	赤彩	
	236				耕作溝 SD79	坪	須恵			*8.0	内外面：ヨコナデ	暗青灰色	密、砂粒少含	底部回転糸切り
	237					壺	須恵				外面：ヨコナデ 内面：ナデ	灰白色	密	内外面に自然釉がかかる
	238					甕	須恵				外面：格子タタキ 内面：ナデ	灰色	密	内外面に自然釉がかかる
	239					壺	須恵			*8.0	内外面：ヨコナデ	灰色	密	
	240				遺構外	皿	青磁					オリーブ 灰	緻密	オリーブ緑色の釉がかかる
	241					P12	罎	瓦質			内外面：ナデ	黒褐色	密	

土製品観察表

押図 No.	掲載 No.	掲載 遺構名	調査時 遺構名	器種	計測値 (cm)				重量 (g)	色調	胎土	備考
					最大長	最大幅	最大厚	孔径				
21	C 1	住居 4	SI 1	羽口						灰白色	密、砂粒少含	外面にガラス質付着
23	C 2	住居 5	SI 2	羽口		7.2		3.5		灰黄褐色	密、長石・褐色粒少含	外面に鉄・ガラス質付着
31	C 3	遺構外		土玉	2.9	2.6	2.6	0.6	22.0		密	赤彩
	C 4											

金属製品観察表

押図 No.	掲載 No.	掲載 遺構名	調査時 遺構名	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	材質	備考
					最大長	外/内径	最大厚			
63	M 1	墓 1	隼石 1・ SD 5	釘					鉄	錆により右が付着する
	M 2									

石器観察表

採回 No.	掲載 No.	掲載 遺構名	調査時 遺構名	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	材質	備考			
					最大長	外/内径	最大厚						
10	S1	住居1	SI6	磨製石包丁	4.0	7.1	0.4	19.6	砂質粘板岩	刃部に光沢あり			
12	S2	住居2	SI8	礫石	8.7	8.9	4.2	474.0	角閃石安山岩				
	S3			礫石	22.4	6.9	4.2	1098.0	角閃石安山岩				
	S4			礫石	15.8	7.4	4.5	885.0	角閃石安山岩				
	S5			台石	25.1	19.5	5.9	4580.0	角閃石安山岩				
	S6			石鏃		13.9	1.9			板状安山岩	刃部に磨滅顕著		
13	S7	住居3	SI5	石鏃	2.5	1.3	0.4	1.0	安山岩	凹基式			
14	S8		SI5・6	打製石斧	23.6	9.7	3.7	957.9	板状安山岩	片面に被熱の痕跡あり			
15	S9	建物1	SB6	スクレイパー	2.9	4.1	1.3	7.4	黒曜石				
18	S10	遺構外		石鏃	1.9	1.5	0.4	0.5	黒曜石	凹基式			
23	S11	住居5	SI2	礫石	17.6	7.5	5.1	951.0	角閃石安山岩				
	S12			磨石	18.0	11.3	1.8	562.0	板状安山岩				
27	S13	住居7	SI3	礫石	16.0	6.0	4.8	704.0	角閃石安山岩				
	S14			礫石	15.7	6.6	5.3	738.0	角閃石安山岩				
	S15			礫石	17.5	7.3	5.3	925.0	角閃石安山岩				
	S16			礫石	14.5	7.2	4.0	675.0	角閃石安山岩				
	S17			礫石	16.3	7.4	4.2	697.0	角閃石安山岩				
	S18			礫石	10.2	4.9	2.4	170.0	角閃石安山岩				
	S19			礫石	5.8	6.0	3.0	142.0	角閃石安山岩				
	S20			台石	22.5	15.3	11.3	5760.0	角閃石安山岩				
	28			S21	住居8	SI4	礫石	16.4	7.0	4.5	814.0	角閃石安山岩	
	46			S22	溝4	SD88	石鏃			0.4		安山岩	凹基式
47	S23	溝7	SD90・95	礫石	12.3	4.6		280.0	細粒花崗岩				
48	S24	溝8	SD92	礫石	15.7	8.5	4.4	637.0	角閃石安山岩	被熱の痕跡あり			
63	S25	墓2	SX1	礫石	7.4	7.3	3.2	232.0	細粒花崗岩				
68	S26	溝13	SD90	礫石	18.8	6.7	4.9	723.0	細粒花崗岩				
69	S27	溝14	SD5	礫石	12.1	4.5	2.5	162.0	流紋岩質凝灰岩				
	S28			礫石	8.2	5.9	3.0	62.0	流紋岩				
	S29			磨石	8.0	4.3	4.5	219.0	細粒花崗岩				
	S30			礫石	9.1	6.4	5.9	553.0	流紋岩質凝灰岩				

第4章 三保第1遺跡

第1節 調査の概要

1. 遺跡の概要

三保第1遺跡は、鳥取県東伯郡琴浦町大字三保一本木に存在する。当地域は琴浦町東部を北流する加勢蛇川と洗川によって形成された広大な扇状地上にあり、遺跡は洗川中流域の東岸に位置している。上伊勢第1遺跡からは西方約1kmの場所にある。

調査区は標高約38.8～39.5mの平坦地にあり、周囲は集落や水田、耕作地に囲まれている。調査前の状況は、圃場整備による造成が行われており、水田および芝畑として利用されていた。

当遺跡では弥生時代前期から古墳時代中期にかけての遺構面を確認し、竪穴住居2棟、集石8基、土坑8基、溝6条を検出した。

旧東伯町教育委員会の試掘トレンチ調査の成果を踏まえ、上層の黒灰色土、赤褐色砂質土は重機で



第1図 三保第1遺跡位置図

除去し、その下の暗褐色土上面を遺構面として検出作業をすることにした。1・2区については未買地があったため、3・4区の調査から始めることにした。なお、4区については、調査区の範囲と試掘トレンチが重なっており、また洗川の氾濫によるものと考えられる砂層の堆積しか認められず、遺構・遺物の分布が見込めないことから、試掘トレンチ内の精査をもって調査を終了することにした。



写真図版1 4区調査風景

4月20日から調査を開始し、3区からは土坑1基を検出した。試掘トレンチにおいて竪穴住居1棟が確認されており、また暗褐色土より2層下の暗褐色土上面で遺構面が存在することも確認した。このため、2面調査として発掘を行うことになった。4月26日～30日には、未買地であった1・2区の表土剥ぎを行い、調査に着手した。また、3区が当初の計画よりも狭かったことが判明したため拡張することになり、3区拡張部分の表土剥ぎも行った。この間危険を伴うことから作業員の稼働を中止した。5月6日から調査を再開し、各調査区壁際にトレンチを入れて遺構面の確認を行った。2区の表土除去中において、赤褐色砂質土と暗褐色土の間に植物もしくは生痕を検出した。

1区第1遺構面からは竪穴住居1、溝1、2を検出した。第2遺構面での遺構・遺物は確認されなかった。3区第1遺構面で竪穴住居2を検出し、第2遺構面では集石群を検出した。

2区は5月20日から調査に着手し、第1遺構面から溝4条、土坑5期、集石1基を確認した。6月24日より第2遺構面検出の掘り下げを行い、集石1基、土坑3基を確認した。6月30日には全ての調査を終了した。

なお、6月4日には東伯小学校の児童が遺跡見学に訪れた。遺跡の説明を聞いたほか、実際に遺物に触れたり、遺構を間近で見たりした。本発掘調査が今後の児童の、歴史学習において興味や関心を深めるための一助となれば幸いである。

本報告書中では調査時の遺構名を変更して掲載している。新旧遺構名の対照については表1に示すとおりである。

(浅田康行)



写真図版2 東伯小学校児童見学風景

表1 新旧遺構対照表

新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
竪穴住居1	S I 2	土坑7	SK 1	集石8	集石7
竪穴住居2	S I 1	土坑8	SK 9	溝1	SD 1
土坑1	SK 3	集石1	集石8	溝2	SD 7
土坑2	SK 8	集石2	集石4	溝3	SD 5・6
土坑3	SK 7	集石3	集石6	溝4	SD 2
土坑4	SK 2	集石4	集石5	溝5	SD 3
土坑5	SK 5	集石5	集石3	溝6	SD 4
土坑6	SK 6	集石6・7	集石1・2	—	—

2. 基本層序 (第2～4図)

遺跡内の埋土の堆積状況は第3・4図に示すとおりである。1～3区までの堆積状況はほぼ共通している。4区は洗川による氾濫の影響を受けているものと思われ、砂層が厚く堆積している。

調査区の堆積状況は黒灰色土および青灰色砂質土が堆積し、その下に赤褐色砂質土がある。ここまでの層を1層として扱った。その下には大山西麓に広く分布する黒ボク層があり、さらにその下には明黄褐色を呈する弥山軽石層が堆積する。黒ボクは3層に分層でき、上から順に暗褐色土、黒褐色土、暗褐色土の順に堆積する。また、黒ボク層と弥山軽石層の間には暗褐色土と弥山軽石層との中間にあたる暗黄褐色土(漸移層)がある。主要層の堆積状況や各層の性質は、上伊勢第1遺跡や昨年度調査された中尾第1遺跡と類似している。

暗褐色土上面を第一遺構面(古墳時代中期)とし、暗褐色土上面を第二遺構面(弥生時代前期)とした。調査区内の最終遺構確認面は暗褐色土上面である。

主要堆積層の概要は以下のとおりである。

I層：1層は黒灰色土で、現代の耕作土である。平均して50cmほどの厚さである。古墳時代中期の土師器を多く包含する。

2～3層は赤灰色砂質土、赤褐色砂質土であり、耕作土に対応する床土と考えられる。10cm前後の堆積で、しまりはとてもよくきめは粗い。土師器を包含する。

II層：黒ボク層であり、3層に分層できる。

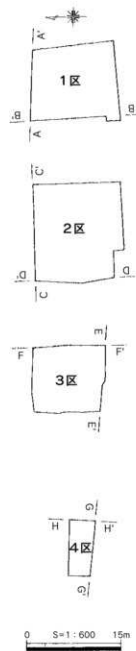
4層は暗褐色土であり、30cm程度の堆積である。上面は後世の耕作による削平を受けており、本来はもう少し厚く堆積していたものと考えられる。この層は1mm以下の白色粒子を含み、炭化物がわずかに混じる。古墳時代中期の遺構面であり、上面から竪穴住居や土坑、溝を検出した。弥生土器片や黒曜石剥片をわずかに包含する。

5層は黒褐色土で、40cm程度の堆積である。粘質が強く、黒ボク層の中で最も黒味が強い。弥生土器を多く包含し、炭化物がわずかに混じる。弥生時代前期の包含層である。わずかではあるが縄文土器を含む。

6層は暗褐色土で、平均して40cm前後の厚さである。当遺跡における基盤層であり、弥生時代前期の遺構面である。上面から集石群や土坑を検出した。

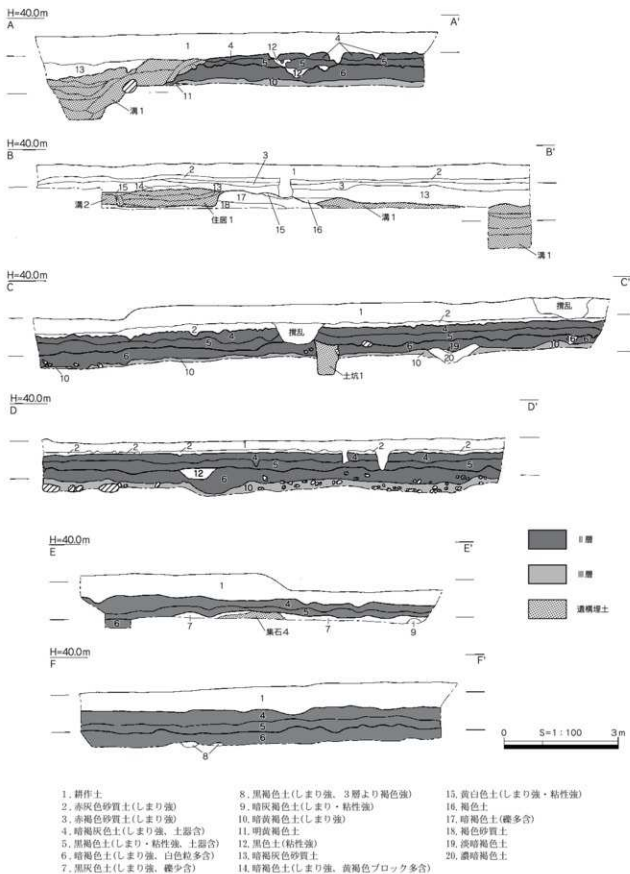
III層：10層は暗黄褐色土で、20cm前後の堆積である。暗褐色土と弥山軽石層に対する漸移層である。しまりがよく、明黄褐色土ブロックが少し混じる。5～10cmの礫を少し含む。

IV層：11層は明黄褐色土で、弥山軽石層である。しまりがよく、10～20cm大の礫を多く含む。

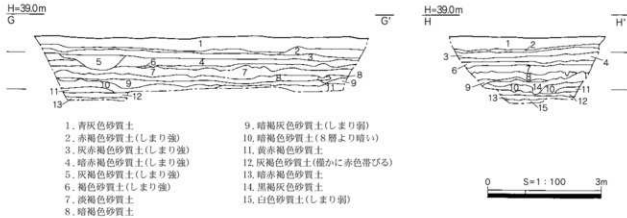


第2図 土層断面位置図

(浅田)



第3図 1～3区土層断面図



第4図 4区土層断面図

第2節 縄文時代の遺物

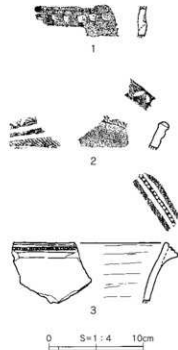
1. 概要

1～3区で数点の縄文時代中期から後期前葉にかけての土器が出土している。いずれも弥生時代の包含層である黒褐色土からの出土であり、多数の弥生時代前期の土器に混じて出土した。

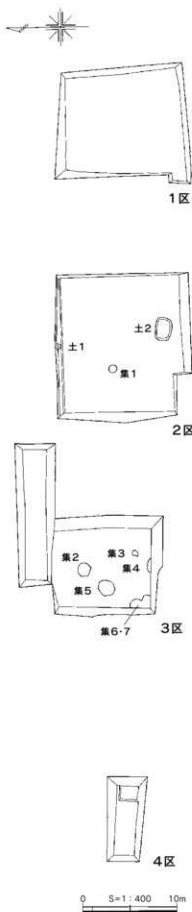
調査時において、暗褐色土以下の層については各区にトレンチを入れることにより、遺構・遺物を包含しないことが確認できた。よって、暗褐色土上面を最終遺構確認面として扱った。しかし、今回の調査では遺構を検出することはできなかったものの、わずかではあるが縄文土器が出土している。このことから、暗褐色土上面において、縄文時代中期～後期の遺構面でもあった可能性が考えられ、調査区外に縄文時代の遺構が存在することが十分に予想される。(浅田)

2. 遺構に伴わない遺物(第5図、PL.38・40・41)

1は3区からの出土で、鉢の胴部と思われる。内外面ともにナデを施す。外面にはナデ後に竹管による刺突文を施す。船元式の範疇に収まるもので、縄文時代中期に相当する。2は1区からの出土である。深鉢の口縁部で、波状口縁をなすものと思われる。口唇部や口縁部外面には縄文後に沈線文を施す。内面は口縁部上端まで縄文が及んでいる。下端はヘラミガキを施す。布勢式に属するもので、縄文時代後期前葉のものである。3は2区からの出土で、深鉢の口縁部である。外面を肥厚させわずかに反外する。口唇部分に2条の沈線を施す。沈線間には刺突文、その外側には縄文を施す。内面は板状工具によるナデを施す。縄文時代後期前葉のものである。(浅田)



第5図 縄文時代遺構外出土遺物



第6図 弥生時代遺構配置図

第3節 弥生時代の遺構・遺物

1. 概要

遺構は暗褐色土上面で検出し、土坑2基、集石7基を調査した。遺物は1～3区においておもに黒褐色土から出土している。1区においては、遺物が1点出土したのみで遺構は検出されなかった。また、4区においては包含層が存在せず、遺物・遺構ともに皆無であった。(浅田)

2. 土坑

土坑1 (第7図、PL.28)

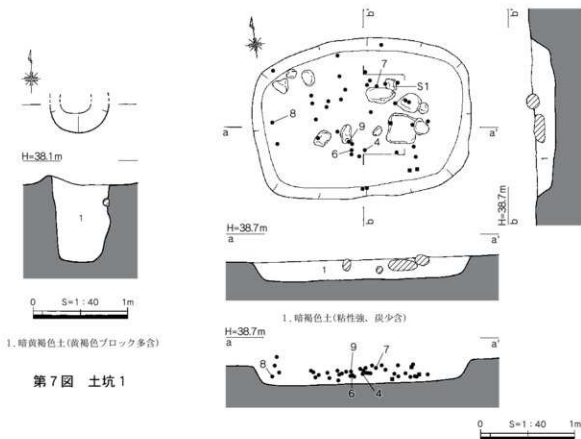
2区の北端にあり、サブトレンチ掘り下げ中に検出した。調査区境にあるため、南側半分の検出である。北側は調査区外へ続いている。平面形は、検出した部分の形状から円形を呈するものと思われる。規模は直径64cmを測る。検出面からの深さは最大41cmを測る。断面は「U」字状を呈し、壁面はわずかに外側に傾斜して立ち上がる。形状から落とし穴が考えられるが、詳細は不明である。

本遺構の時期については、遺物が出土しなかったため詳細な時代を特定することはできないが、掘り込み面が弥生時代前期の遺構面であるため、本遺構の時期もこれに相当するものと思われる。

土坑2 (第8図、PL.28・34)

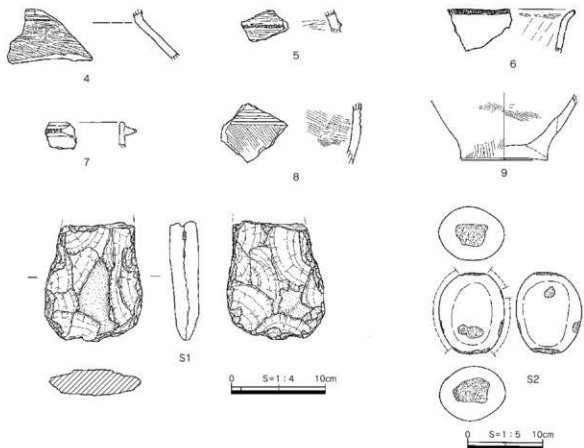
2区の南側に位置する。黒褐色土の除去後に検出した。平面形は方形を呈し、規模は長辺2.0m、短辺1.2mを測る。底面はほぼ平坦で、壁面はわずかに外側に傾斜して立ち上がる。検出面からの深さは最大で19.6cmである。埋土は暗褐色土の単層で、粒状の炭化物を含む。中央やや東よりに径約10～30cmの礫が比較的多くまとまって検出され、そこを中心に甕の底部9や壺の胴部、鉢の口縁部等多数の土器片が出土した。礫に混じり、石鍬S1、敲石S2や黒曜石も出土している。

礫には人為的に組まれた形跡は見られないが、ある程度のまとまりをもって検出されていること、埋土に粒状の炭化物がみられること、平面形が方形であることから埋葬施設の可



1. 暗黄褐色土(黄褐色ブロック多含)

第7図 土坑1



第8図 土坑2・出土遺物



H=38.7m

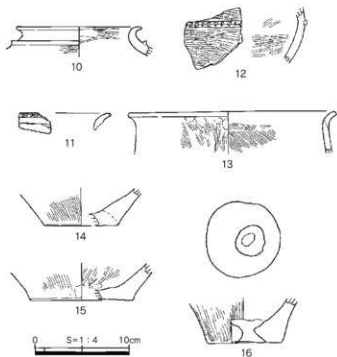


H=38.7m



0 S=1:20 50cm

1. 黒褐色土(砂粒・炭少含)
2. 黒褐色土(砂粒僅含、1層より縮い)



第9図 集石1・出土遺物

能性が考えられる。

出土遺物は弥生土器や石器などが出土した。4・5は壺の胴部である。4は沈線を3条施す。外面ハケメ後ヘラミガキ、内面はナデを施す。5は外面に刻目のある貼付突帯を施す。6～9は甕である。6は口唇部に刻目を施す。7は口縁部に断面三角形の刻目のある貼付突帯を施すものである。8は頸部にナデ後に3条以上の沈線を施す。これらの遺物はおおむね清水編年のI～3期のものである。

本遺構の時期は出土遺物から、弥生時代前期後葉と考えられる。 (浅田)

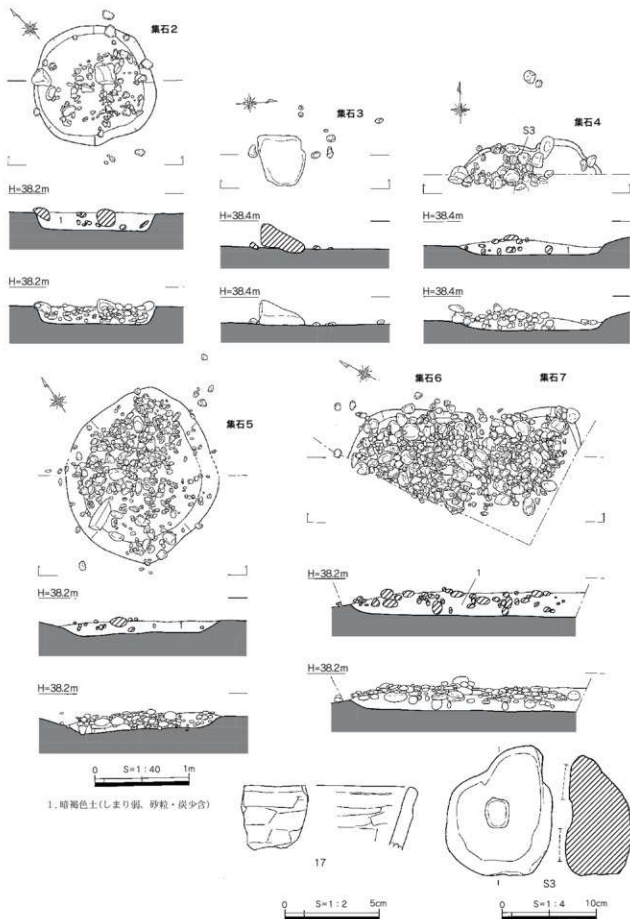
3. 集石

集石1 (第9図、PL.28・34)

2区の西側に位置する。本遺構の埋土は遺構の検出面である黒褐色土と酷似しており、見分けることが困難であり、その大部分を掘り下げてしまった。よって集石の形成面を正確に把握することはできなかった。わずかに残っていた埋土は黒褐色土で、炭化物の粒子が少量含まれていた。埋土中からは人頭大の礫とともに土器片がまとまって出土した。埋土を全て除去した後に、土坑状のわずかな落ち込みを確認することができた。礫には火を受けた痕跡は認められなかった。

出土遺物10は壺の口縁部で、頸部に断面三角形の貼付突帯を持つものである。12は壺の胴部と思われ、外側に刻目のある貼付突帯を施す。11・13～16は甕である。このうち11は口唇部分に刻目を施す。16は底部である。焼成後に穿孔が施される。外面はハケメ後ヘラミガキを施す。14・15は共に底面にヘラケズリが施される。これらの土器は清水編年のI～3期のものである。

本遺構の性格は、全体を正確に検出することができなかったため不明瞭であるが、礫の上下から多数の土器が出土していること、埋土に炭化物を含むことから埋葬施設の可能性を考えることができる。



第10図 集石2～7・出土遺物

時期は、出土遺物から弥生時代前期後葉のものである。

集石 2 (第10図、PL.28)

3区の中央やや北よりに位置する。暗褐色土上面で検出した。ほぼ円形を呈する土坑の中に3～15cm大の川原石が集められていた。集石の形態は円形を呈する。礫除去後の落ち込みの規模は径約130cm、検出面からの深さは約18cmを測る。埋土は遺構検出面に似た暗褐色土で、わずかに炭化物を含む。礫には火を受けた痕跡は認められない。

3区から検出された集石の中では土坑状の落ち込みが最も明瞭のものであった。礫と礫との隙間は他の集石に比べ比較的広く、礫の集められ方は平面的で礫の数も他のものより少なめであり、規則性も見られない。遺物は黒曜石が3点出土している。いずれも小片であり、図示するには至らなかった。

時期としては、周囲から弥生時代前期後葉の土器が出土していることから、本遺構の時期もこれに相当するものと考えられる。

集石 3 (第10図、PL.28)

3区の南東側に位置する。集石2と同様、暗褐色土上面での検出である。他の集石と形態が大きく異なり、他の集石がほぼ同じ大きさの川原石を集めて形成されているのに対し、本集石は長軸53cm、短軸47cmを測る不整形を呈する礫を中心に、その周囲に数個の小礫が散らばって形成されている。中心にある礫は集石群の中で最も大きなものである。また、他の集石は礫が落ち込みの中に納まるように集められているのに対し、本遺構は暗褐色土上面に大きな礫が据え置かれている点でも大きく異なる。礫の周辺において精査を行ったが、掘り方は確認できなかった。周囲の小礫については意図的な配置といえるような状況を見出すことはできなかった。しかし中心に据えられている礫については、集石2、5～7までの距離がそれぞれ5mとほぼ同じであること、また他の集石が形成する緩やかな円の中心付近に位置していることなどから、この位置に意図的に配置されたものと考えられる。遺物は出土していないが、周囲の状況から時期は弥生時代前期後葉頃と考える。

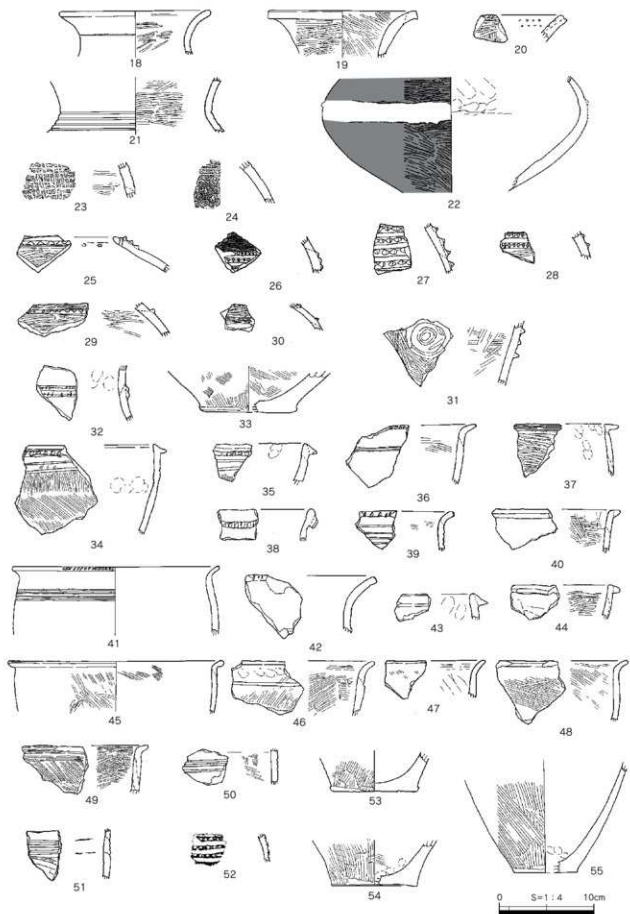
集石 4 (第10図、PL.28・34)

3区の南側の壁面で検出した。北端部だけの検出であり、主体部分は調査区の南側に続いているものと思われる。集石3の南西約1mの場所に位置し、径4～18cmの川原石で形成される。集石の平面形は検出部分から特定することはできない。また、集石の形態は検出された部分において規則性は認められない。礫に火を受けた痕跡は認められない。

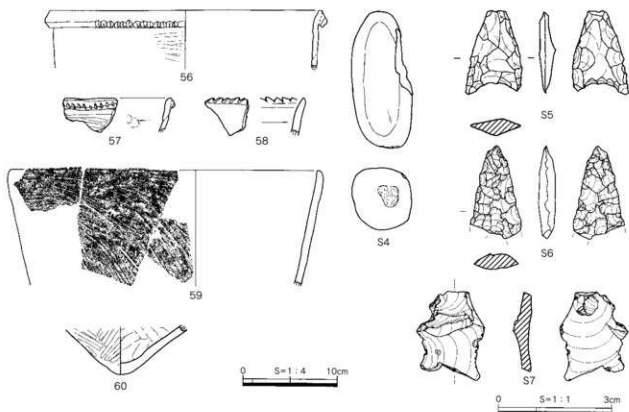
集石を形成する礫の中に凹石S3が含まれていた。石材は角閃石安山岩である。形は卵型を呈し、大きさは長径14.5cm、短径11.1cm、最大厚6.9cmを測る。窪み部分は方形を呈し、大きさは長軸3cm、短軸2.5cm、最大深0.4cmである。窪みのある面には使用した痕跡が見られる。その他に遺物は出土していない。本集石の時期は集石2と同様、弥生時代前期後葉頃と考える。

集石 5 (第10図、PL.29)

3区の中央やや西よりにあり、集石2の南西側約2mの場所に位置する。他の集石と同様、暗褐色土上面で検出した。5～30cm大の川原石で形成される。埋土は集石2と同様に遺構検出面と酷似して



第11圖 弥生時代遺構外出土遺物①



第12図 弥生時代遺構外出土遺物②

いるため、集石検出時には掘り方を確認できなかった。礫を全て除去した後に土坑状の落ち込みを確認することができた。落ち込みの平面形は楕円形で、規模は長軸1.8m、短軸1.6mである。検出面からの深さは最大9.4cmを測る。集石の形態は楕円形を呈する。礫の組み方には前述の集石同様、規則性は認められず、礫に火を受けた痕跡は認められない。

遺物は、底面付近から鉢の口縁部17が出土した。如意状の口縁で外内面に条痕を施し、端部は丸くおさまる。時期は縄文時代晩期から弥生時代前期の範疇に収まるものである。

本遺構の時期としては出土遺物が少なく、詳細に特定することはできないが、この遺構の周囲から出土している土器のほとんどが弥生時代前期後葉に属するものであることから、本集石もこの時期に相当するものと考えられる。

集石6・7 (第10図、PL.29)

3区の南西隅に位置する。調査区際での検出であるため、南端および西端は調査区外へと続く。

2基の集石には礫の積み方や形状に大きな違いは無く、明瞭な境目は見られなかったが、中央付近がくびれており、この部分で2基の集石が重なっているものと考えられる。規模が大きく、形態が楕円形を呈する方を集石6、小規模で円形を呈する方を集石7とした。両遺構とも3～20cm大の川原石で形成され、礫の集め方には規則性は見られず、礫には火を受けた痕跡は認められない。

2基とも明瞭な掘り方は認められず、全ての礫を除去した後にわずかに落ち込みが確認できる程度である。

遺物は出土していないが、時期としては、他の集石と検出面や形状が同じであることから弥生時代

前期後葉頃のものと考える。

(浅田)

4. 遺構に伴わない遺物 (第11・12図, PL.39・40・41)

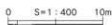
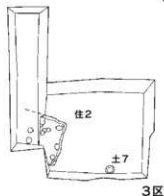
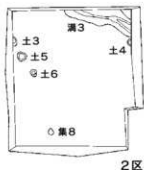
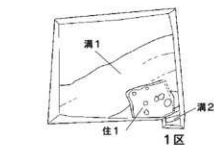
大半のものが黒褐色土層からのもので、2・3区での出土が主である。全ての器種を通して、断面が三角形を呈する貼付突帯を口縁部や頸部に持つものが多く見られる。また、口縁端部や突帯部分には必ずといってよほど刻目が施される。頸部や胴部には多条化した沈線が入り、沈線間にも刻目が施されるものもある。こうした特徴は清水編年のI-3期と同様の傾向を示すものである。時期は弥生時代前期後葉と考えられる。

18~31は壺形土器である。18は外反した口縁部に1条の沈線がめぐり、口縁端部は丸くおさまる。20は口縁部で、口唇部に沈線の後に刻目を施し、内面には竹管による刺突文を施す。21は頸部で下部に4条の沈線を施す。22は胴部で、外面に赤彩を施し、貼付突帯が剥離した痕跡が見られる。23は胴部と思われ、外傾接合からなる。外面にはナデを施した後、横方向の沈線後、縦方向に沈線を施す。内面には条痕を施す。24は胴部で、貝殻腹縁による羽状文と4条の沈線を施す。25~31は貼付突帯を持つものである。25は無頸壺の口縁部と思われる。口縁部上端に穿孔が施され、その下に貼付突帯を3条施す。外面には一部赤彩を施した痕跡が認められる。26~30は胴部と考えられるもので、2~3条の刻目のある貼付突帯が施されるものである。これらの内26・29・30は外傾接合からなる。26には一部赤彩が施される。31は胴部と思われ、外面には突帯をわらびて状に付ける。部分的に赤彩の痕跡が残る。調整は外面にヘラミガキ、内面にハケメ後ナデがなされ、その後更にヘラミガキを施す。

34~56は甕形土器である。34~38・40・43・44は貼付突帯を持つものである。34・35は外傾接合からなるもので、口縁部に刻目のある貼付突帯を施し、頸部には2条の沈線を施す。調整はともに外面にハケメ、内面にナデを施す。37・40は外傾接合からなるもので、口縁部は粘土貼付による。39は口唇部に刻目を施し、頸部には沈線を施す。42は口唇部に刻目、頸部には貼付突帯を持つ。43・44は口縁部が粘土貼付によるもので、調整はともに外面にナデを施す。45は外傾接合からなり、調整は内面がハケメ後ナデ、外面にはハケメ後ヘラミガキが施される。46も外傾接合からなり、頸部に1条の沈線を施す。口縁部には押圧痕が目立つ。49は外傾接合からなり、調整は外面には条痕が内面にはヘラミガキを施す。50は胴部と考えられるもので、沈線を3条施す。調整は内外面ともにハケメ後ナデが施される。52は外面に4条以上の沈線を施し、沈線間には刺突文を施す。53・54・55は甕と考えられるものの底部である。このうち55は外傾接合によるものである。外面は板状工具によるハケメが施される。内面はナデを施し、底面付近には指頭圧痕が目立つ。

57~60は鉢形土器である。57は内傾接合によるもので、口縁部に刻目のある貼付突帯を持つ。外面には条痕を、内面にはナデを施す。58は口縁部であり、口唇部に「V」字状の深い刻目が入る。調整は内外面ともにナデを施す。59は口縁部から胴部にかけてのものである。外傾接合によるもので、調整は外面には条痕、内面にはナデが施される。60は底部である。外面には条痕、内面はナデを施す。石器で図示したものは4点のみである。S4は敲石である。石材は細粒花崗岩で、全長14.6cm、最大幅5.3cmを測る。S5・6は石鏃であり、このうちS5はサヌカイト製の凹基式の鏃である。S6は黒曜石製のもので、基端部を欠損しているもののS5と同じ種類のものと思われる。S7は黒曜石の薄片である。

(浅田)



第4節 古墳時代の遺構・遺物

1. 概要

遺構は1～3区にかけて暗褐色土上面で検出し、竪穴住居2棟、溝3条、土坑5基、集石1基を調査した。遺物は黒灰色土・赤灰色砂質土・赤褐色砂質土から出土している。

1区で検出した溝1については、北側と南側の調査地境に幅1mに渡るトレンチを設定し、底面まで掘り下げ自然流路であることを確認した。また、トレンチ設定範囲において遺物は皆無であった。このため調査は行わないこととなり、上端の範囲およびトレンチ部分で検出した底部と土層断面の観察をもって調査を終了した。(浅田)

2. 竪穴住居

竪穴住居1 (第14図、PL.29・35)

1区の南西隅に位置する。本来の検出面である暗褐色土と遺構の埋土が酷似していたため、暗褐色土上面ではこれを検出することができず、この下層である黒褐色土中で確認した。本遺構の北西側が調査区外にのび、南西側が後述する溝1に設定したトレンチに切られるため、その全体像は明確ではない。しかし、遺存する住居の状況から、平面形は方形を呈するものと思われる。

規模は長軸4.6m、短軸3.4m、床面積12.7㎡を測る。検出面からの深さは38cmであり、床面の標高は38.4mを測る。周囲には、幅7～15cm、深さ8cm、断面形が「U」字状を呈する溝がめぐる。床面には、厚さ約1cm程度の炭層が広がっていた。また、この炭層を除去したところ、住居中央部から南東側にかけて、厚さ約6cm程度の貼り床が確認された。この貼り床は、地山ブロックを多く含んでおり、硬化していた。

貼り床を除去した後、床面からP1～6のピットを確認した。このうち、P1・2は、その形状・規模から柱穴と考えられる。平面形が円形を呈し、規模は径30～46cmを測る。検出面からの深さ38cmを測り、掘り込み面は暗黄褐色

第13図 古墳時代遺構配置図

土までであった。なお、P 2からは径16cmを測る柱痕跡を確認している。柱穴間の距離は1.2mを測る。

P 3はP 2の南側に位置するピットである。規模は径54~66cmを測り、平面形は不整形な円形を呈している。埋土はP 4と同質である。P 4はいわゆる特殊ピットであり、住居南側の壁際に位置している。規模は径68~72cm、深さ20cmを測り、平面形は不整形な円形ないしは方形を呈している。埋土は黄褐色ブロックを多く含む暗黄褐色土である。P 5・6は、径30~40cm、深さ10cmほどを測り、平面形が円形を呈するピットである。柱穴であるP 1・2に比べて浅く、配置も不規則であることから用途は不明である。

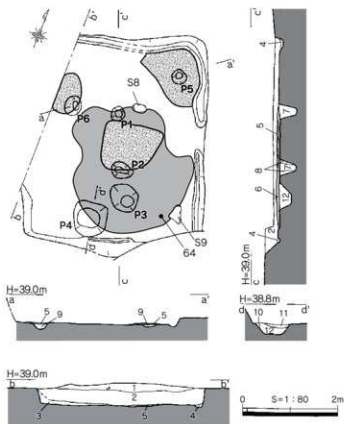
先にも述べたように、本住居は、貼り床除去後にP 1・2といった柱穴やP 4といった特殊ピットが検出されており、建て替えがあったと考えられる。

埋土中から、土師器や須恵器、石器が出土した。このうち、61~66、S 8・9を図示した。これらの遺物のうち、床面直上から出土したのは、土師器62・64、石器S 8・9である。62は甕の口縁部、64は高坏の脚部、S 8は安山岩の磨石、S 9は台石である。

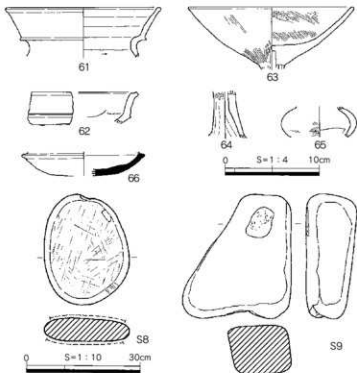
土師器61・63・65、須恵器66はいずれも埋土中からの出土である。流れ込みによる可能性が高く、本遺構の時期を直接判断するものではないと考える。

さて、遺構の時期であるが、出土遺物が天神川Ⅷ期の特徴を示すことから、古墳時代中期後葉と考えられる。

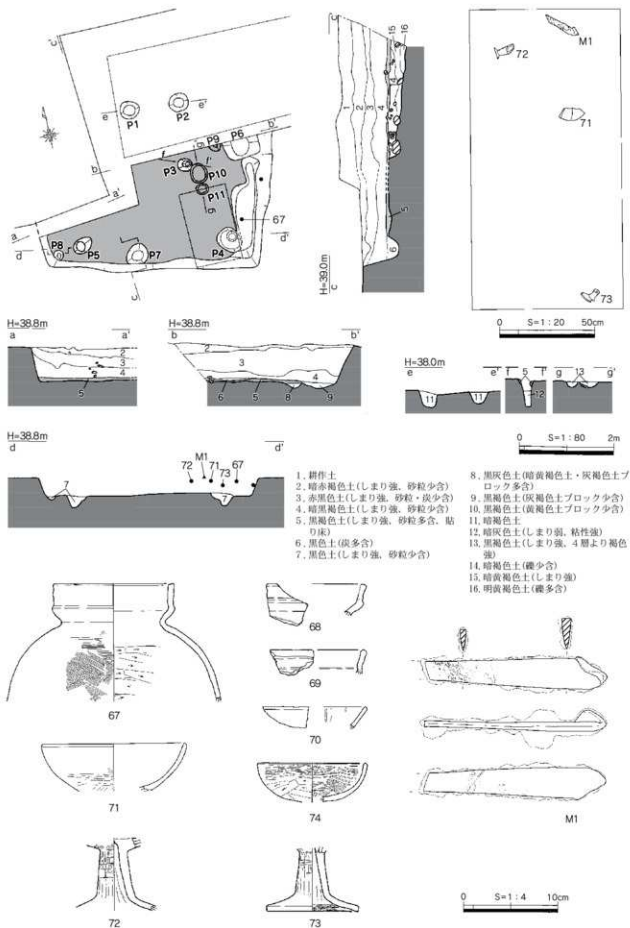
(前島)



1. 褐色土(礫・土器含)
2. 暗褐色土
3. 褐色土
4. 暗黄灰褐色土(砂礫含)
5. 黒褐色土(粘性強、炭多含)
6. 暗黒褐色土(しまり強、硬化面)
7. 暗黄褐色土
8. 暗褐色土(黄褐色ブロック含)
9. 暗褐色土
10. 暗褐色土(2層より褐色強)
11. 暗黄褐色土(黄褐色ブロック多含)
12. 暗黄褐色土(黄褐色ブロック多含)



第14図 竪穴住居1・出土遺物



第15図 竪穴住居2・出土遺物

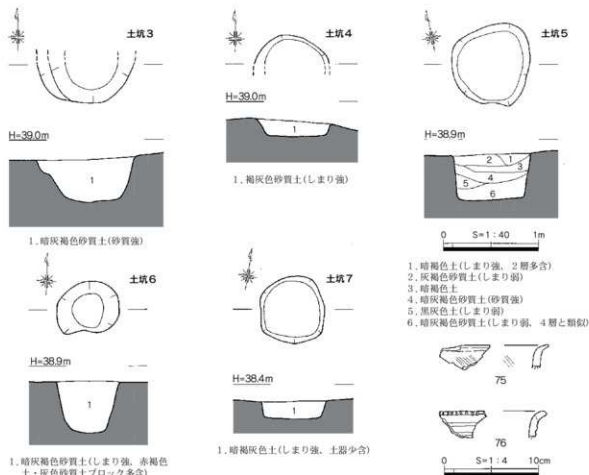
竪穴住居 2 (第15図、PL29・35・42)

3区の北側に位置する。検出した範囲は竪穴住居の南側半分である。北側は町のトレンチにより消失していた。北西側は調査区外のため、不明である。

平面形は検出した部分から、方形を呈するものと考えられる。検出した規模は一辺約2.2m、床面積6.9m以上を測る。床面には貼り床が施され、その厚さは平均して5cmである。検出面からの深さは、最も残りのよい東側で70cmを測る。ピットは全部で11基確認した。このうち、支柱穴と考えられるものはP1～3である。その並び方から4本柱の住居であったと思われる、4本目の柱穴は調査区外に存在するものと考えられる。柱穴のうちP3では断面調査時に埋土の上部に径約20cm、深さ約20cmの大きさの空洞部分を確認した。柱穴の上縁部分には縁取りするように貼り床がやや盛り上がり残っていた。これは柱材が腐食したために生じた空洞と考えられる。

P6は西側壁面際にある。平面形が方形で断面がすり鉢状を呈し、特殊ピットと思われる。また、P4・5・7はその位置から支柱穴と考えられる。P9～10は貼り床除去後に検出した。本遺構に伴うものであるかは不明である。

遺物は、裳67～69、高坏70～73が出土している。69は裳の口縁部であり、72は高坏の脚部である。ともに外面には赤彩が施される。これらは天神川Ⅷ～Ⅸ期のものである。M1は直刃鎌である。刃部はよく使い込まれており、磨り減ってやや湾曲している。また、刃部表面には木質が付着している。本遺構の時期は出土遺物から古墳時代中期後葉である。(浅田)



第16図 土坑3～7・出土遺物

3. 土坑

土坑3 (第16図、PL.30)

2区の北側調査地境に位置しており、北側は調査区外へと続いている。暗褐色土上面で検出した。平面形は、方形もしくは六角形を呈するものと思われる。検出面からの深さは43cmを測る。遺物は出土しておらず時期の特定はできないが、検出状況や周囲の状況等から判断して古墳時代中期後半頃と考えられる。

土坑4 (第16図、PL.30)

2区の南側の調査地境にあり、溝3の西側に位置する。南側は調査区外へと続く。平面形は、検出した部分の状況から円形を呈するものと思われる。壁面は外側にわずかに傾斜して立ち上がる。検出面からの深さは最大で17cmを測る。遺物は出土しておらず、時期を特定できないが土坑3と同様、古墳時代中期後半のものと思われる。

土坑5 (第16図、PL.30)

2区の北側にあり、土坑3の南西側に位置する。平面形は不整形円形を呈し、底面は平坦である。規模は最大径が90cm、検出面からの深さは40cmを測る。埋土は互層状に堆積しており、埋め戻された可能性がある。遺物は出土しておらず、時期を特定できないが土坑3と同様、古墳時代中期後半のものと思われる。

土坑6 (第16図、PL.30)

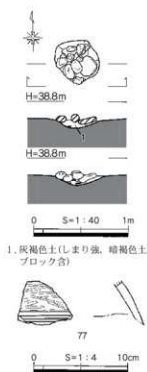
2区の北側にあり、土坑5の南西側に位置する。平面形は不整形な円形を呈し、断面は「U」字状を呈する。底面は平坦である。規模は最大径が67cm、検出面からの深さは55cmを測る。遺物は出土しておらず、時期を特定できないが土坑3と同様、古墳時代中期のものと思われる。

土坑7 (第16図、PL.30)

1区の西側に位置し、暗褐色土上面で検出した。平面形は円形を呈する。検出規模は径68cm、検出面から底面までの深さ17cmである。埋土中から甕の口縁部75・76が出土した。これらは弥生時代前期のもので、埋没過程で混入したものと思われる。本遺構の時期は土坑3と同様、古墳時代中期頃と思われる。(浅田)

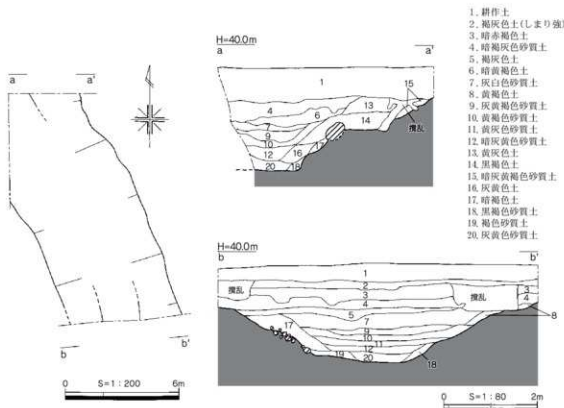
4. 集石

集石8 (第17図、PL.30)



第17図 集石8・出土遺物

2区の西側に位置する。暗褐色土上面で検出した。径約80cmの不整



第18図 溝 1

円形を呈する落ち込みに、5～20cmの石が13個積み重ねられて形成される。配石に規則性は認められない。礫には火を受けた痕跡は確認されなかった。

埋土から土器片が4点出土している。このうち図示できたものは1点である。77は壺の胴部であり、外面には沈線を4条以上施す。弥生時代のものであり、これは本遺構形成時に混入したものと思われる。本遺構の時期は、検出面や周囲の状況から古墳時代中期のものと考えられる。(淺田)

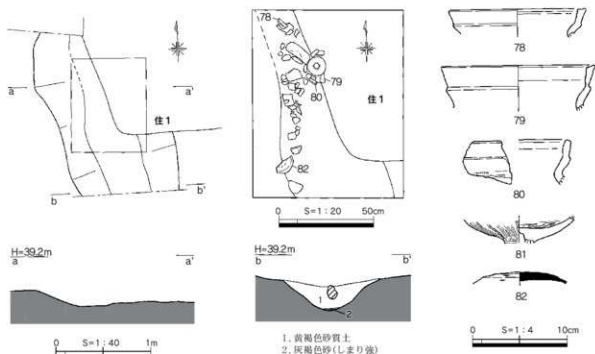
5. 溝

溝 1 (第18図、PL.29・31)

1区の中央に位置しており、重機によって黒灰色土を除去した直後に検出した。調査区南東壁際と北西壁際にトレンチを入れたところ、遺物が出土しなかったため自然河道であると判断し、断面形態と埋土の堆積状況の把握、範囲確認のみの調査を行った。

溝は調査区を南東方向から北西方向に貫いており、13.4mほどを確認した。ほぼ直線的のびているが、南東側から約8.0mの地点で西方向にゆるく湾曲する。規模は幅5.8m、検出面からの深さは2.1mを測る。断面形は幅広な「U」字形をなす。

埋土は灰白色、黄灰色、褐色系の砂質土を主体としたものである。これらは15層に分層できた。このうち第7層は最も厚く堆積しており、最大36cmを測る。これに対して、7層以下の第9～12層の堆積は薄く、また、褐色と灰黄色の砂質土が互層状に水平堆積をなす状況を観察することができた。さらに下層の第18～20層では、5～15cm大の礫が多く含まれており、水の流れが比較的急であったことがうかがえる。なお、埋土中からは遺物は出土しなかった。



第19図 溝2・出土遺物

遺構の時期であるが、遺物が出土しておらず、特定することが困難である。しかし、遺構の上面は竪穴住居1によって切られていることから、少なくとも古墳時代中期以前には埋没していたものと考えられる。

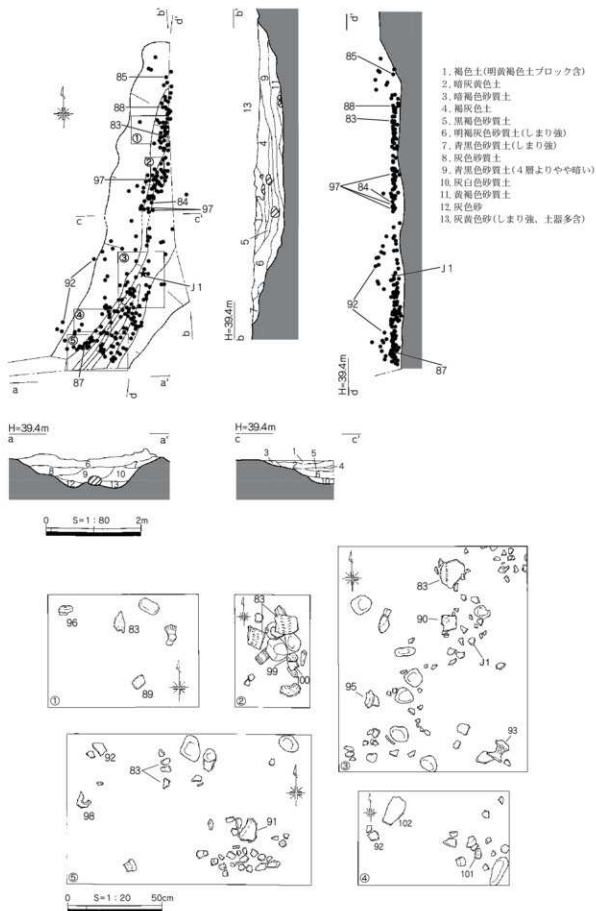
溝2 (第19図 PL.31・35)

1区南西隅の拡張部分に位置している。本遺構は、暗褐色土を掘り下げ中に、調査区南西壁際から遺物が折り重なるようにまとまった状態で出土したことから、調査区外に遺構が存在する可能性がある判断し、一部拡張して調査することとなった。この結果、拡張部分において溝の肩部を確認することとなった。遺構の検出面は暗褐色土上面である。

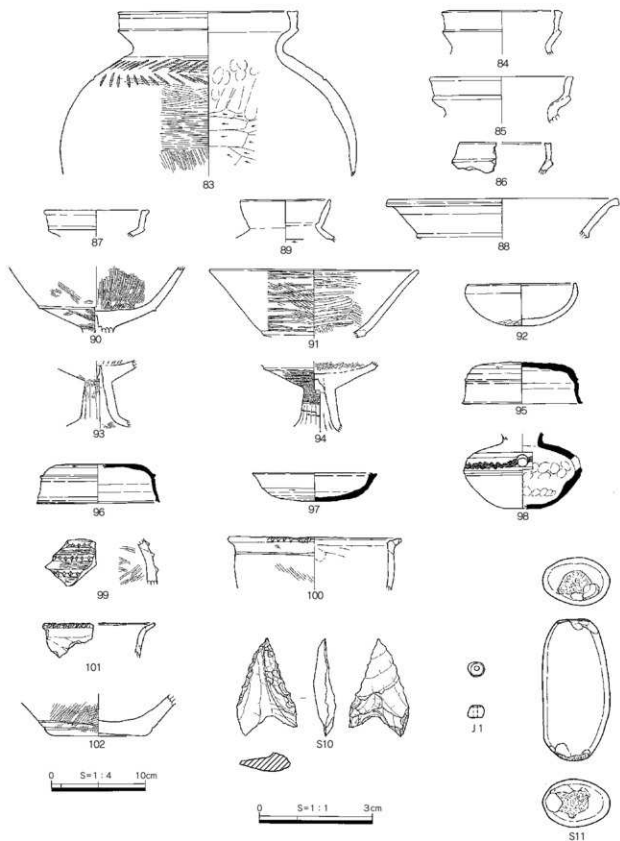
南東から北西方向にほぼ直線的にのびる溝である。その両端が調査区境に接しており、調査区の北西側と南東側へのびるものと思われる。竪穴住居1と重複関係にあるが、両者の遺存状態が悪いことから、新旧関係を明確にすることはできなかった。また、出土遺物も竪穴住居1のものとはほぼ同じ時期を示しているため、これを判断することができなかった。

規模は、幅1.2m、検出面からの深さ25cmを測り、1.7mほどを検出した。断面形は「U」字状を呈しており、底面は暗褐色土まで掘り込まれていた。埋土は黄褐色砂質土を主体としたものである。これらは2層に分層できる。また、底面付近では灰褐色砂質土に砂礫が混入する状況を観察できたことから、流水があったものと考えられる。

遺物は土師器と須恵器が出土している。これらは、すべて床面付近から出土したものであり、このうち78～82を図示した。78～80は土師器の甕である。78・79は、口縁部が外傾して立ち上がるものである。口唇部はやや凹みながらも平坦となり、内側に肥厚する。また、下端部は鈍く突出する。内外面にはナデ調整を施している。78の外表面には煤が付着しており、内面には黒斑を有する。79の内外面



第20図 溝3



第21図 溝3出土遺物

には煤が付着している。80は口縁部が若干外湾して立ち上がり、下端が鈍く突出している。口唇部には平坦面をもつ。81は高坏の坏部であり、堅穴住居1との境から出土した。外面にはハケメ、内面には放射状のヘラミガキを施している。82は須恵器の坏蓋である。天井部には回転ヘラケズリを行っており、その後頂上部において手持ちヘラケズリを施している。天井部の内面にはヨコナデ後仕上げナデを施す。

さて、遺構の時期であるが、出土遺物が天神川Ⅷ期の特徴を示すことから、古墳時代中期後葉の範疇に収まるものと思われる。

溝3（第20・21図 PL.32・36・37）

2区南西隅に位置しており、暗褐色土上面で検出した。確認できた範囲が6.9mと全体の一部分であるため、遺構の全体像を明確に捉えることができなかった。

南西から北東方向に向かってほぼ直線的にのびる溝である。溝は調査区外へのびているが、すぐ東側の1区においては確認することができなかったため、1区と2区の間を通っているものと考えられる。規模は、幅1.5～2.2mを測り、南西側から北東側に向かって次第に広くなっていく。検出面からの深さは68cmを測り、掘り込みは黒褐色～暗褐色土であった。断面形は幅の広い「U」字状を呈しているが、一段落ち込んだ状態となっている。また、底面には明瞭な凹凸が認められる。

埋土は褐色土を主体としたものであり、13層に分層することができた。このうち、埋土の中層にあたる5・6・9・11層では黒褐色土と褐色土が互層状に堆積しており、流水によって自然に堆積したものと考えられる。また、底面の凹みに堆積していた12・13層からは、砂礫や土器片が多く出土した。

遺物は、第20図で示したように、溝の全体にわたって出土している。同一個体となる遺物が比較的近い位置から出土していることから、比較的緩やかな水の流れであったと想定される。また、出土遺物には土師器の他に弥生土器が含まれている。これは、溝が弥生時代の包含層を切って形成され、そこから流れ込んだものと考えられる。

出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、石器、玉類などがある。このうち、83～102、S10・11、J1を図示した。83～92は土師器であり、83～87は甕である。83は口縁部が垂直に立ち上がり、口唇部が平坦で内面が肥厚している。肩部の外面には刺突文をめぐらせている。89は直口壺、88は鼓形器台、90・91・93・94は高坏である。92は椀であり、底部外面に手持ちヘラケズリを施している。95～98は須恵器であり、95・96は坏蓋である。口唇部には明瞭な段ないしは稜が認められ、口縁部はやや外湾しながらも高く立ち上がる。天井部との境には明瞭な稜がつく。天井部は平坦であり、全体の2/3の範囲において回転ヘラケズリを施している。97は坏身であり、底部の2/3において回転ヘラケズリを施している。98は甕であり、頸部と肩部において波状文を施している。また、外面には自然釉がかかっている。99～102は弥生土器である。99～101は甕であり、99は胴部に刻目を施す貼付突帯をもつ。100・101は如意状の口縁部をもつものであり、口唇部に刻目を施す。また、100の頸部には沈線が一条めぐる。S10は石鏃、J1は青色を呈するガラス製の小玉である。

さて、遺構の時期であるが、遺物が天神川Ⅷ期の特徴を示すことから、古墳時代中期後葉頃と考えられる。

(前島)



第22図 古墳時代遺構外出土遺物

6. 遺構に伴わない遺物 (第22図、PL.38・39)

1～3区の黒灰色土・赤灰色砂質土・赤褐色砂質土で出土している。これらの遺物は古墳時代前期から中期後葉のものである。103は直口壺で、口縁上部外面は縦方向のハケメ、下部は横方向のハケメ後ナデを施す。内面はナデを施し、頸部には横方向にヘラケズリを施す。104～109は甕である。104・105は外面ナデ、内面には口縁部にナデ、胴部にヘラケズリを施す。106・107は内外面ともにナデを施す。109は外面口縁部に横ナデ、胴部上半にハケメ、下半にハケメ後ナデを施す。内面口縁部に横ナデ、胴部にヘラケズリを施す。110～116は高環である。この内110は坏部で、屈曲部分にわずかな稜のくびれをとどめる。112は脚部で、3ヶ所に円形の透かし穴を持つ。113は坏部外面にハケメ後ナデ、脚部にはハケメ後面取りを施す。坏部内面にはハケメ後放射状の暗文風のヘラミガキを施す。117は須恵器で直口壺の口縁部である。内外面ともに横ナデを施し、外面に3条の沈線を施す。

(淺田)

第5節 その他の時期の遺構

1. 概要

遺構は全て2区で検出し、溝3条、土坑1基、畝を確認した。溝4～6は赤褐色砂質土除去後に検出し、土坑8は黒褐色土除去後に検出した。いずれも遺物を包含せず、詳細な時期は不明である。(浅田)

2. 土坑

土坑8 (第24図)

2区の南側、調査地境付近に位置する。暗褐色土上面で、土坑の底面部分を検出した。本来の掘り込みは上の層からと思われるが、土坑の埋土が黒褐色土と酷似しており、本来の掘り込み面を検出することができなかった。

平面形は円形で、規模は直径50cm、検出面からの深さは10cmである。底面には直径20cm、深さ6cmのビットがある。底面ビットを持つことから落とし穴が想定される。

時期は遺物が出土せず、また掘り込み面も確認できなかったため不明である。(浅田)

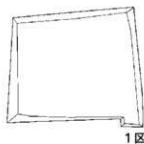
3. 溝

溝4 (第25図、PL.33)

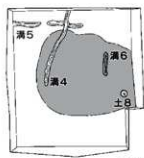
2区のほぼ中央に位置する。溝5を切る。東西方向にのび、東側は調査地外へと続く。検出規模は全長8.2m、幅約30cm、検出面からの深さ約8cmである。用途、時期については不明である。

溝5 (第25図、PL.33)

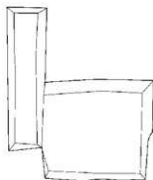
2区の東側、やや北よりに位置する。溝4に切られる。南北方向にのびており、北側は調査地外に続く。規模は、全長7.2m、幅約20cm、検出面からの深さ約2cmである。溝4に切られるものの、形状や埋土が似ており、溝4とほぼ同じ時期のものとする。



1区

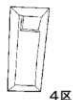


2区



3区

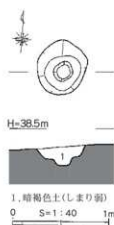
■ 植物痕もしくは足跡の範囲



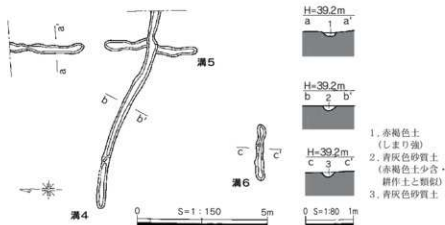
4区

0 5=1:400 10m

第23図 遺構配置図



第24図 土坑 8



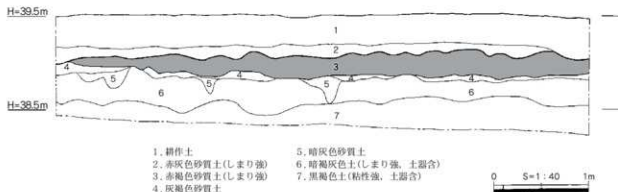
第25図 溝 4～6

溝 6 (第25図、PL.33)

2区の南側、調査地境付近に位置する。溝4・5と同じく赤褐色砂質土除去後に検出した。検出規模は全長2.2m、幅23cm、検出面からの深さ約3cmである。埋土が溝4と同じであるため、溝4と同時に存在したものと考える。用途は不明である。(浅田)

4. 畠 (第23・26図、PL.33)

2区の掘り下げ終了時に調査区南側壁面の土層断面を精査したところ、赤褐色砂質土上面において30～40cmの間隔で、幅約6mに渡り凹凸面が連続して続いていることが確認できた。また、掘り下げ作業中においては、赤褐色砂質土中に褐灰色を呈し、径約5～8cmの円形状を呈する植物の株痕のようなものが点々と分布する部分を確認していた。この分布域と南側壁面で確認できた凹凸面が層位的に一致することから、凹凸面は畝、円形状のものが点在する部分を畠の可能性のあるものとして考えた。畠跡として報告されているものの中には、検出面において見られる円形状の痕跡は、栽培されていた植物の株や耕作動物等の足跡とされる例もある。本遺構にあつては、植物株や足跡を裏付けるような明確な情報は得られなかった。遺物は皆無であり、時期については不明である。(浅田)



第26図 畠土層断面図

第6節 小結

三保第1遺跡の発掘調査は一般国道9号（東伯中山道路）の改築工事に伴い、平成16年度に実施したものである。調査の結果、縄文時代から古墳時代に至るまでの遺構・遺物を確認した。検出した遺構・遺物は全て1～3区のものである。4区は当遺跡の西側を流れる洗川もしくはその支流の影響を受けたものと思われる砂層が堆積する。そのため遺物包含層は存在せず、遺構・遺物は皆無であった。よって以下に、1～3区を中心に調査結果を時代順にまとめて述べることにする。

縄文時代 遺構は検出されず、遺物のみの確認である。鉢もしくは深鉢と思われる破片が数点出土している。船元式もしくは布勢式に属するもので、縄文時代中期～後期前葉のものである。調査区の外に遺構が存在する可能性が考えられる。

弥生時代 前期後葉の遺構・遺物を確認した。遺物は鉢や甕を主とし、口縁部端部に刻目を持つもの、胴部に刻目のある貼付突帯を伴うものなどが出土している。遺構は土坑2基、集石7基を調査した。このうち、2区で検出した土坑2、集石1は埋葬施設と考えられるものである。埋土には炭化物が含まれている。また、人頭大の礫に混じり土器が多数出土している。3区からは、川原石を塊状に集めた集石が6基確認された。それぞれの集石は環状に配置されている。2区の埋葬施設と合せ、一連の墓域を形成するものと考えられる。詳細は第6章第2節に述べているので、そちらを参照されたい。昨年度調査された同時期の中尾第1遺跡の土坑墓と合せ、東伯善における前期の墓制を考える上で注目される遺構である。周辺地域での今後の資料の増加がまつれる。

古墳時代 竪穴住居2棟、溝3条、土坑5基、集石1基を確認した。遺物は土師器や、須恵器、直刃鎌、ガラス製の小玉などが出土している。遺構・遺物の時期は前期から中期後葉のものである。2・3区で確認した溝2・3は水流のあったことが確認でき、底面からは多数の土師器片が出土している。ガラス製の小玉は溝3からの出土である。出土した遺物は全て破砕面がシャープで、水流によるローリングを受けた形跡は認められなかった。このことから、これら遺物は出土場所からさほど遠くない上流域で溝の中に投棄されたものと考えられ、調査区の外においても当時代の遺構が分布していることが指摘できる。この時代にあつては、集落が形成されていたことが考えられる。

その他の時代 溝3条、土坑1基、畠を確認した。遺物が出土していないため、いずれも詳細な時期については不明である。溝は重複する部分があるものの、同一検出面であることより、ほぼ同時期に存在した可能性がある。性格については不明である。畠については赤褐色砂質土上面において植物ないしは足跡と考えられる円形または楕円形の痕跡を確認した。また、2区南壁において畝と考えられる凹凸面が明瞭に観察できた。土坑は最終遺構確認面上において、底部部分のみ確認した。掘り込み面を確認することはできなかった。底面にピットを持つことから落とし穴の可能性はあるが、詳細については不明である。

今回の調査では、当遺跡周辺地域においては類例の少ない沖積平地における弥生時代～古墳時代の遺構を確認することができた。これは丘陵部において確認されている、同時期の三保遺跡や笠見第3遺跡、久蔵峰北遺跡等の集落との関係や集落の変遷について比較検討できる貴重な情報を得ることができたといえる。また、県内において不明な点の多い、弥生時代前期における墓制を考える上で貴重な資料を得ることもできた。

（浅田）

土器観察表1

検出 No.	埋藏 No.	区	埋藏 遺構名	調査時 遺構名	器種	種類	計測値 (cm)			調 整	色 調	胎 土	備 考	
							口径	器高	底径					
5	1	3区	遺構外	黒褐色土	鉢	縄文				内外面：ナデ	鈍黄褐色	密、砂粒含	胴部に斜交文	
	2	1区			深鉢	縄文				外面：縄文 内面：ヘラミガキ	鈍黄褐色	密、砂粒含	外面、口唇部に縄文→沈線文	
	3	2区			深鉢	縄文				外面：口唇部縄文、ナデ、 内面：板状工具によるナデ	灰黄褐色	密、砂粒含		
8	4	2区	土坑2	SK8	壺	弥生				外面：ハケム→ヘラミガキ 内面：ナデ	鈍褐色	密、石英・長石少含	外面に沈線3条以上	
	5				壺	弥生					内外面：ヘラミガキ	明濁灰色	密、石英多含	外面に刻目付貼付突帯
	6				甕	弥生					外面：ナデ 内面：ハケム→ナデ	鈍褐色	密、砂粒含	口唇部に刻目
	7				甕	弥生					内外面：ナデ	浅黄褐色	密	口縁部に刻目付貼付突帯
	8				甕	弥生					内外面：ハケム	灰黄褐色	密、石英・長石多含	胴部に沈線3条以上、外面に窪付着
	9				甕	弥生		8.9			内外面：ハケム→ナデ	褐色	密、織含	内面に窪付着
9	10	2区	集石1	集石8	短頸壺	弥生	*12.8			内外面：ナデ、ヘラミガキ	鈍褐色	密、砂粒稍含	胴部に貼付突帯	
	11				甕	弥生					内外面：ナデ	鈍褐色	密、石英含	口唇部に刻目、胴部に沈線1条以上
	12				壺	弥生					内外面：ヘラミガキ	鈍褐色	密、砂粒含	外面に刻目付貼付突帯
	13				甕	弥生	*22.4				外面：ハケム→ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ハケム	鈍褐色	密、石英多含	外面に窪付着
	14				甕	弥生		*7.6			外面：ハケム、底面ケズリ 内面：ナデ	鈍褐色	密、石英・褐色粒少含	
	15				甕	弥生		*10.7			外面：ハケム→ナデ 内面：ナデ→ヘラミガキ	灰黄褐色	密、石英含	内外面に窪付着
10	16	2区	集石5	集石3	壺	弥生				内外面：条痕	鈍黄褐色	密		
	17				壺	弥生	*16.0			外面：ナデ 内面：ハケム→ナデ→ヘラミガキ	褐色	密、石英含		
	18				暗褐色土	壺	弥生	*16.0			内外面：ヘラミガキ	明赤褐色	密、石英・砂粒多含	
	19				黒褐色土	壺	弥生				外面：ハケム→ナデ→ヘラミガキ 内面：ナデ	鈍黄褐色	密、石英含	口唇部に沈線刻目、内面に斜交
	20				壺	弥生					外面：器面が風化し調整不明 内面：ヘラミガキ	褐色	密、石英・長石含	
	21				壺	弥生					外面：ヘラミガキ 内面：ナデ	鈍赤褐色	密、石英多含	外面に赤彩
	22				壺	弥生					外面：ナデ 内面：条痕	鈍黄褐色	密、砂粒含	外面に沈線文
	23				壺	弥生					外面：ヘラミガキ 内面：ナデ	鈍褐色	密、石英・長石含	外面に貝殻復縁による飾文
	24				黒褐色土	無頸壺	弥生				外面：ヘラミガキ 内面：ナデ	褐色	密、石英・褐色粒多含	口縁部に貼付突帯3条、穿孔、赤彩
	25				壺	弥生					外面：ヘラミガキ 内面：ナデ	鈍褐色	密、砂粒含	外面に刻目付貼付突帯3条、赤彩、外縁接合
11	26	2区	遺構外	黒褐色土	壺	弥生				内外面：ナデ	鈍褐色	密、石英・褐色粒少含	胴部に刻目付貼付突帯	
	27				壺	弥生				外面：ヘラミガキ 内面：ナデ	鈍赤褐色	密、砂粒少含	外面に刻目付貼付突帯	
	28				壺	弥生					内外面：ヘラミガキ	鈍褐色	密、石英含	外面に刻目付貼付突帯、外縁接合
	29				壺	弥生					外面：ナデ 内面：条痕	鈍黄褐色	密、砂粒含	外面に刻目付貼付突帯、外縁接合
	30				壺	弥生					外面：ヘラミガキ 内面：ナデ	鈍黄褐色	密、砂粒含	貼付突帯、内外面に赤彩
	31				壺	弥生					外面：ヘラミガキ 内面：ハケム→ナデ→ヘラミガキ	鈍黄褐色	密、石英・褐色粒含	
11	32	2区	黒褐色土	壺	弥生				内外面：ナデ	明赤褐色	密、石英多含	胴部に刻目付貼付突帯		
	33			壺	弥生		10.3		内外面：ハケム→ナデ	鈍黄褐色	密、石英・長石含			
	34			甕	弥生				外面：ハケム 内面：ナデ	鈍黄褐色	密、石英・褐色粒含	胴部に沈線2条、外面に窪付着、外縁接合		
	35			甕	弥生				外面：ハケム 内面：ナデ	鈍黄褐色	密、石英・褐色粒稍含	口縁部に刻目付貼付突帯、胴部に沈線2条、外面に窪付着、外縁接合		
	36			甕	弥生				外面：ナデ 内面：ハケム→ナデ	鈍黄褐色	密、石英・砂粒含	胴部に沈線2条、外縁接合		

土器観察表 2

排戻 No.	掲載 No.	区	掲載 遺構名	調査時 遺構名	器種	種類	計測値 (cm)			調 整	色 調	胎 土	備 考
							口径	器高	底径				
11	37	3区		黒褐色土	甕	卵生				外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ナデ	鈍褐色	密、石英・長石・褐色粒多	口縁部粘土貼付、外面に煤付着、外縁接合
	38							3.3		外面：ナデ 内面：ナデ	鈍黄褐色	密、砂粒多	口縁部に斜目付貼付突部、外面に煤付着
	39	2区		黒褐色土	甕	卵生				外面：ナデ 内面：ハケメ→ナデ	灰黄褐色	密	頸部に沈積4条以上、外面に煤付着、外縁接合
	40									外面：ナデ 内面：ヘラミガキ	鈍黄褐色	密、石英含	口縁部粘土貼付、外面に煤付着、外縁接合
	41							*22.0		外面：ハケメ→ナデ 内面：ナデ	鈍黄褐色	密、礫含	口唇部に斜目、頸部に沈積3条
	42	3区		黒褐色土	甕	卵生				器面摩滅し調整不明	鈍褐色	密、石英・長石多含	口唇部に斜目、頸部に貼付突部
	43									内外面：ナデ	鈍黄褐色	密、石英含	口縁部粘土貼付
	44									外面：ナデ 内面：ヘラミガキ	鈍褐色	密	口縁部粘土貼付、外縁接合
	45	遺構外		暗褐色土	甕	卵生	*23.0			外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ハケメ→ナデ	鈍褐色	密、砂粒少含	外面に煤付着、外縁接合
	46									外面：ハケメ→ナデ 内面：ナデ	鈍黄褐色	密、石英・褐色粒少含	頸部に沈積1条、外面に煤付着、外縁接合
	47									内外面：ハケメ→ナデ	浅褐色	密、石英・褐色粒含	外面に煤付着
	48	3区		暗褐色土	甕	卵生				外面：口縁部ナデ、胴部ハケメ→一部ヘラミガキ 内面：ハケメ→ナデ	鈍黄褐色	密、石英・雲母、砂粒含	外面に煤付着
	49									外面：ヘラミガキ、条痕 内面：ヘラミガキ	鈍黄褐色	密、石英・褐色粒含	外縁接合
	50									外面：ナデ 内面：ハケメ→ナデ	鈍黄褐色	密、石英含	胴部に沈積3条
	51	2区		暗褐色土	甕	卵生				外面：条痕 内面：ナデ	鈍褐色	密、石英含	頸部に沈積3条、外面に煤付着、外縁接合
	52									内外面：ナデ	浅黄褐色	密、石英少含	外面に沈積4条以上、沈積間に斜交文
	53	1区			暗褐色土	甕	卵生	*8.2		外面：ハケメ、外面底部：ナデ 内面：ナデ	褐色	密、石英含	
54	2区		黒褐色土	甕	卵生				外面：ハケメ 内面：ハケメ→ナデ	鈍い褐色	密、石英・長石多含	内面に煤付着	
55									外面：ハケメ 内面：ナデ	6.8			鈍褐色
12	56	2区		黒褐色土	甕	卵生	*23.6			外面：条痕 内面：ナデ	灰褐色	密、砂粒多含	口縁部に斜目付貼付突部、内縁接合
	57									外面：条痕 内面：ナデ			鈍黄褐色
	58	3区		暗褐色土	深鉢	卵生				内外面：ナデ	鈍黄褐色	密、砂粒多含	口唇部に斜目
	59									外面：条痕 内面：ナデ			灰黄褐色
60	2区			黒褐色土	深鉢	卵生			外面：条痕 内面：ナデ	灰黄褐色	密、石英・褐色粒・礫多含		
14	61	1区	住居1	S12	甕	土鍋	*16.0			外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、肩部ヘラケズリ	浅黄褐色	密、長石少含	
	62									内外面：ナデ	鈍褐色	密、長石・褐色粒少含	外面に煤付着
	63									内外面：ハケメ→ナデ	褐色	密、石英・長石少含	
	64									外面：ハケメ→面取り	褐色	密	
	65									外面：ハケメ→ナデ 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	浅黄褐色	密	外面に赤彩
	66									環身	土鍋	13.2	
15	67	3区	住居2	S11	甕	土鍋	*12.8			外面：口縁部ナデ、肩部ハケメ→ナデ、胴部ハケメ 内面：口縁部→肩部ナデ、胴部ヘラケズリ	鈍褐色	密、石英・長石多含	
	68									内外面：ナデ	鈍黄褐色	密	外面に煤付着
	69									内外面：ナデ	浅黄褐色	密	外面に赤彩
	70									外面：ナデ 内面：放射状の暗文織ミガキ	褐色	密	
	71									外面：ハケメ→ナデ→ヘラミガキ 内面：器面摩滅し調整不明	褐色	密	

土器観察表3

押図 No.	掲載 No.	区	掲載 遺構名	調査時 遺構名	器種	種類	計測値 (cm)			調 整	色 調	胎 土	備 考						
							口径	器高	底径										
15	72	3区	住居2	SI 1	高坪	土師			9.6	外面：ハケメ→面取り→ヘラミガキ 内面：ハケメ	純褐色		外面に赤彩						
	73									高坪	土師			外面：ハケメ→面取り→ヘラミガキ 内面：ハケメ	純褐色	密			
	74									椀	土師	φ11.5		外面：ケズリ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	褐色	密			
16	75	3区	土坑7	SK 1	甕	弥生				内外面：ハケメ→ナデ	純黄褐色	密、石英・粗 色粒含							
	76									甕	弥生			内外面：ナデ	灰黄色	密、石英多含	口唇部に斜目、頸部に沈 線3条以上、外縁接合		
17	77	2区	集石8	集石7	壺	弥生				外面：ヘラミガキ 内面：ナデ	褐色	密、石英・粗 色粒含	外面に沈線4条以上、外 縁接合						
19	78	1区	溝2	SD 7	甕	土師	φ14.4			内外面：ナデ	灰黄色	密		外面に保付着					
	79									甕	土師	φ16.5			内外面：ナデ	純黄褐色	密、石英少含		内・外面に保付着
	80									高坪	土師			外面：口縁部ナデ、肩部ハケメ→ ナデ 内面：ナデ	浅黄褐色	密、石英少含			
	81									高坪	土師			外面：ハケメ 内面：放射状の繪文並ミガキ	褐色	密			
	82									坏蓋	須恵			外面：回転ヘラケズリ 内面：ヨコナデ→一部仕上げナデ	灰色	密			
21	83	2区	溝3	SD 5	甕	土師	φ17.0			外面：口縁部ナデ、肩部→胴部ハ ケメ 内面：ナデ→ケズリ	純黄褐色	密、石英・粗 色粒含		胴部に貝殻復縁による割 英文					
	84									甕	土師	φ11.4			内外面：ナデ	純黄褐色	密、石英多含		
	85									甕	土師	φ14.2			内外面：ナデ	純黄褐色	密、石英・長 石多含		外面に保付着
	86									甕	土師				内外面：ナデ	純黄褐色	密、石英少含		外面に保付着
	87									甕	土師	φ10.5			内外面：ナデ	純黄褐色	密、石英少含		外面に保付着
	88									鼓形 器台	土師	φ24.4			内外面：ナデ	純黄褐色	密、石英少含		
	89									壺	須恵	φ9.4			外面：ナデ 内面：ナデ→ケズリ	純褐色	密、石英少含		外面に保付着
	90									高坪	土師				外面：ハケメ→ナデ 内面：ハケメ→ヘラミガキ	褐色	密、砂粒少含		
	91									高坪	土師	φ21.7			外面：ハケメ→ナデ→ヘラミガキ 内面：ハケメ→多角形状のヘラミ ガキ	純褐色	密、石英僅含		
	92									椀	土師	φ11.3	4.6		外面：ナデ、底部手持ちヘラケズ リ 内面：ナデ	純黄褐色	密、石英・長 石含		
93	高坪	土師				外面：ハケメ→面取り 内面：坪部ヘラミガキ、脚部ハ ケメ	純赤褐色	密											
94	高坪	土師				外面：坪部ハケメ→ヘラミガキ、 脚部ハケメ→面取り→ヘラミガキ 内面：坪部ハケメ→ヘラミガキ	純赤褐色	密、長石・粗 色粒少含		外面に赤彩									
95	坏蓋	須恵	φ12.8	4.4		外面：回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面：ヨコナデ→仕上げナデ	灰色	密		左回転のロクロ、断面は 赤灰色									
96	坏蓋	須恵	13.0	4.2		外面：回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面：ヨコナデ	灰色	密		左回転のロクロ、断面は 赤灰色									
97	坏身	須恵	φ13.2	3.0		外面：ヨコナデ、回転ヘラケズリ 内面：ヨコナデ→底面仕上げナデ	暗灰色	密、砂粒僅含		左回転のロクロ									
98	甕	須恵				内外面：ナデ	灰色	密		肩部・胴部に炭状文、断 面は赤灰色									
99	甕	弥生				内外面：ヘラミガキ	純褐色	密、石英・長 石少含		胴部に斜目付貼付文帯、 外縁接合									
100	甕	弥生	φ17.9			外面：ハケメ→ナデ 内面：ナデ	純黄褐色	密		口唇部に斜目、頸部に沈 線1条、外縁接合									
101	甕	弥生				内外面：ナデ	褐色	密、石英僅含		口唇部に斜目、外縁接合									
102	甕	弥生				外面：ハケメ→ナデ→ヘラミガキ 内面：ナデ	純黄褐色	密、石英・長 石多含		外面に沈線2条									
22	103	2区	遺構外	暗褐色土	壺	土師				外面：タテハケメ・ヨコハケメ→ ナデ 内面：ナデ	純褐色	密、石英多含							
	104	1区	遺構外	暗褐色土	甕	土師	φ15.6			外面：口縁部ナデ、肩部ハケメ→ ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ケズリ	純黄褐色	密		外面に保付着					
	105									壺	土師	φ11.4			外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ケズリ	褐色	密		外面に保付着

土器観察表 4

採掘 No.	掲載 No.	区	掲載 遺構名	調査時 遺構名	器種	種類	計測値 (cm)			調整	色調	胎土	備考
							口径	器高	底径				
22	106	1区	遺構外	埴輪灰色土	甕	土器	#15.7			内外面：ナデ	純褐色	密、石英・橙 色粒包含	外面に煤付着
	107				甕	土器				内外面：ナデ	灰黄褐色	密、石英包含	
	108				甕	土器	#13.0			外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ハケメ	純褐色	密、石英・橙 色粒包含	外面に煤付着
	109				甕	土器	#15.0			外面：口縁部ナデ、胴部上半ハケ メ、下半ハケメ→ナデ 内面：ケズリ	純黄褐色	密、石英・砂 粒含	外面に煤付着、波状皮膜
	110	高坏			土器	#20.9			内外面：ハケメ→ナデ→ミガキ	褐色	密、石英包含		
	111	3区			高坏	土器	#16.5			外面：ハケメ→ナデ→一部ヘラミ ガキ 内面：ハケメ→ナデ→放射状の暗 文風ミガキ	暗赤褐色	密	
	112	高坏			土器		11.6			外面：ハケメ→面取り→ナデ 内面：ケズリ、ハケメ→ナデ	純黄褐色	密	3箇所に円形の透かし穴
	113	高坏			土器	#16.2	11.3	#9.9		外面：坏部ハケメ→ナデ、脚部ハ ケメ→面取り 内面：坏部ハケメ→放射状の暗文 風ミガキ	褐色	密、石英少含	
	114	高坏			土器	#18.0				外面：坏部面剥離し調整不明、 脚部ハケメ→ミガキ 内面：縁部面剥離し調整不明、 ヘラミガキ	純黄褐色	密、石英少含	
	115	高坏			土器		9.3			外面：ハケメ→面取り→ヘラミガ キ 内面：ハケメ→ナデ	純褐色	密	
	116	高坏			土器		9.4			外面：ナデ→ヘラミガキ 内面：ハケメ	純褐色	密	
117	埴瓦土	直口壺	須恵	#9.0			内外面：ヨコナデ	青灰色	密	断面は赤灰色			

石器観察表

採掘 No.	掲載 No.	区	掲載 遺構名	調査時 遺構名	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	石材	備考		
						最大長	最大幅	最大厚					
8	S 1	2区	土坑 2	SK 8	石硯	12.8	10.4	3.1	524.7	板状安山岩			
	S 2					硯石	10.9	8.6	7.2	933.0	角閃石花崗岩	表裏面に磨り跡が残る。	
10	S 3	3区	集石 4	集石 5	凹石	13.8	11.1	7.5	1420.0	角閃石安山岩	上面には、磨り痕顕著に残る。		
12	S 4	3区	遺構外		埴輪灰色土	硯石	14.7	6.6	6.1	830.0	細粒花崗岩		
	S 5					3区	石硯	2.1	0.4	1.4	1.3	安山岩	円基式
	S 6	2区				2区	石硯	2.5	1.4	0.5	1.2	黒曜石	円基式か?
	S 7					黒褐色土	剥片	7.2	5.4	1.5	35.8	黒曜石	
14	S 8	1区	住居 1	S1 2		磨石	29.4	22.5	6.2	6570.0	角閃石安山岩		
	S 9					台石	33.2	28.8	13.1	17200.0	角閃石安山岩		
21	S10	2区	溝 3			SD 6	石硯	2.6	1.6	0.6	1.2	安山岩	
	S11					SD 5	硯石	15.1	7.2	5.1	710.0	細粒花崗岩	

玉観察表

採掘 No.	掲載 No.	区	掲載 遺構名	調査時 遺構名	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	材質	備考
						最大長	最大幅	最大厚			
21	J 1	2区	溝 3	SD 6	小玉		0.5	0.3	0.1	ガラス	中心部分に径1.5mmの穿孔。青色。

金属製品観察表

採掘 No.	掲載 No.	区	掲載 遺構名	調査時 遺構名	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	材質	備考
						最大長	最大幅	最大厚			
15	M 1	3区	住居 2	S1 1	鎌	19.5	3.2	1.0	173.0	鉄	直刀鎌 刀部に木質付着。

第5章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定

上伊勢第1遺跡の竪穴住居3は、出土遺物から弥生時代前期後葉から中期前葉にかけてのものである。また、この竪穴住居は、焼土や垂木として使用されていたと考えられる炭化材が検出されており、焼失住居と考えられるものであった。このため、竪穴住居3はこの時期の実年代を知るための良好な試料となり得るものと考えられた。そこで、この竪穴住居から出土した炭化材の年代測定を行うこととした。測定は、株式会社加速器分析研究所に委託して行った。

算出方法

- (1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用している。
- (2) BP年代値は、1950年からさかのぼること何年前かを表している。
- (3) 付記した誤差は、標準偏差（ 1σ ）に相当する年代で、以下のように算出している。
複数回（通常は4回）の測定値において χ^2 検定を行い、測定値のばらつきが小さい場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、ばらつきが大きい場合には不偏分散の平方根（標準偏差）と統計誤差から求めた値を比較して大きい方を誤差としている。
- (4) $\sigma^{13}\text{C}$ の値は、通常、質量分析計を用いて計測するが、AMS測定の場合には、同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。
 $\sigma^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位対比および年代値を参考として掲載している。

同位対比は、いずれも基準からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。

$$\sigma^{14}\text{C} = [(^{14}\text{As} - ^{14}\text{Ar}) / ^{14}\text{Ar}] \times 1000 \quad \dots\dots (1)$$

$$\sigma^{13}\text{C} = [(^{13}\text{As} - ^{13}\text{APDB}) / ^{13}\text{APDB}] \times 1000 \quad \dots\dots (2)$$

ここで、 ^{14}As ：試料炭素の ^{14}C 濃度： $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_s$ または $(^{14}\text{C}/^{13}\text{C})_s$

^{14}Ar ：標準現代炭素の ^{14}C 濃度： $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_R$ または $(^{14}\text{C}/^{13}\text{C})_R$

$\sigma^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度（ $^{13}\text{As} = ^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）を測定し、PDP（白亜紀のペレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算している。

ただし、IAAでは加速器により測定中に同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ も測定しているため、標準試料の測定値との比較から算出した $\sigma^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には、表中に「加速器」と注記している。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は試料炭素が $\sigma^{13}\text{C} = -25.0$ （‰）であるとしたときの ^{14}C 濃度（ ^{14}As ）に換算した上で計算した値である。（1）式の ^{14}C 濃度を、 $\sigma^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算している。

$$^{14}\text{As} = ^{14}\text{As} \times [0.975 / (1 + \sigma^{13}\text{C}/1000)]^2 \quad (^{14}\text{As} \text{として } ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= {}^{14}\text{As} \times [0.975 / (1 + \sigma^{13}\text{C}/1000)] \quad ({}^{14}\text{As} \text{ として } {}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

$$\Delta^{13}\text{C} = [({}^{14}\text{As} - {}^{14}\text{Ar}) / {}^{14}\text{Ar}] \times 1000 \quad (\%)$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\sigma^{13}\text{C}$ に相当する BP 年代値が、比較的良好その貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致している。

${}^{13}\text{C}$ 濃度の現代炭素に対する割合に対するもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{13}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{13}\text{C} = (\text{pMC}/100 - 1) \times 1000 \quad (\%)$$

$$\text{pMC} = \Delta^{13}\text{C}/10 + 100 \quad (\%)$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{13}\text{C}$ あるいは pMC により、放射線炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age; yrBP) が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{13}\text{C}/1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC}/100)$$

表1 放射性炭素年代測定結果

IAA Code No.	試料	BP年代および炭素の同位対比
IAAA-40606	試料採取場所 : 上伊勢第1遺跡	Libby Age (yrBP) : 2,440 ± 30
	試料形態 : 木炭	$\sigma^{13}\text{C}$ (‰), (加速器) = -26.52 ± 0.56
	試料番号 : No.1(1186)	$\Delta^{13}\text{C}$ (‰) = -262.2 ± 3.0
		pMC (%) = 73.38 ± 30
#623-1	(参考) $\sigma^{13}\text{C}$ の補正なし	$\sigma^{13}\text{C}$ (‰) = -264.5 ± 2.9
		pMC (%) = 73.55 ± 0.29
		Age (yrBP) : 2,470 ± 30
IAAA-40607	試料採取場所 : 上伊勢第1遺跡	Libby Age (yrBP) : 2,270 ± 30
	試料形態 : 木炭	$\sigma^{13}\text{C}$ (‰), (加速器) = -29.03 ± 0.56
	試料番号 : No.2(1187)	$\Delta^{13}\text{C}$ (‰) = -246.1 ± 3.1
		pMC (%) = 75.36 ± 0.31
#623-2	(参考) $\sigma^{13}\text{C}$ の補正なし	$\sigma^{13}\text{C}$ (‰) = -252.3 ± 2.9
		pMC (%) = 74.77 ± 0.29
		Age (yrBP) : 2,340 ± 30
IAAA-40608	試料採取場所 : 上伊勢第1遺跡	Libby Age (yrBP) : 2,250 ± 30
	試料形態 : 木炭	$\sigma^{13}\text{C}$ (‰), (加速器) = -30.55 ± 0.56
	試料番号 : No.3(1188)	$\Delta^{13}\text{C}$ (‰) = -244.2 ± 3.2
		pMC (%) = 75.58 ± 0.32
#623-3	(参考) $\sigma^{13}\text{C}$ の補正なし	$\sigma^{13}\text{C}$ (‰) = -252.8 ± 3.0
		pMC (%) = 74.72 ± 0.30
		Age (yrBP) : 2,340 ± 30